福岡市埋蔵文化財調査報告書　第170集

福　岡　市

下山門乙女田遺跡

SIMOYAMATO　OTOMEDA

1 9 8 7

福 岡 市 教 育 委 員 会

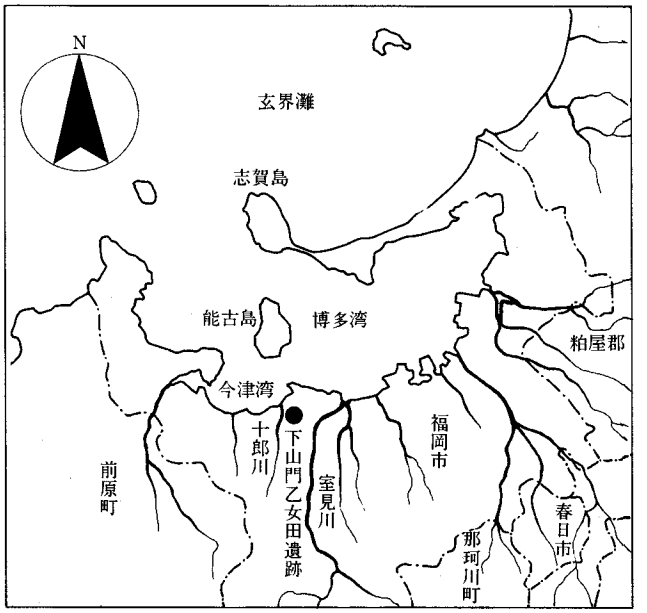
下山門乙女田遺跡　正誤表

頁	行	誤	正
例言	12	柵	柵
	13	土壙	土壙
4	16	1.000m	1,000m
6	9	花嵩	花崗
10	tab.2	原稿	原稿・編集
PL	42	SE31	SD31

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第170集

福　岡　市

下山門乙女田遺跡



遺跡略号 SOM
遺跡調査番号 8532

昭和62年3月

福岡市教育委員会

ＳＥ０５ 出土漆椀出土状況

序　　文

福岡は大陸に近いところから、古くから東アジアとの接点として数多くの文物を受け入れ発展をとげてきました。

このようなところから福岡市地域内には各時代の文化財が埋蔵されており、福岡市教育委員会では、各種の開発事業に先行して埋蔵文化財の記録保存に努めています。

今回報告する下山門乙女田遺跡の調査報告書は、過大規模校解消のために新設する中学校建設に先だって発掘調査を行なった記録です。この下山門乙女田遺跡からは、古代から中世に渡る人々の暮らしぶりや大陸との活発な交易を知ることのできる貴重な資料が数多く出土しています。

本報告書及び出土資料が、市民各位の文化財に対する認識を深めていただくとともに、歴史研究の分野においても活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査に際して協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位に心より厚くお礼を申し上げます。

昭和６２年３月

福岡市教育委員会

教育長　佐　藤　善　郎

例　　言

1．本報告書は、福岡市西区下山門字乙女田473番他における中学校建設予定地内の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、福岡市土地開発公社の委託により、福岡市教育委員会が実施し、瀧本正志が担当した。

3．遺構の実測は、主に瀧本が行ない、一部を佐藤一郎・吉武学（福岡市埋蔵文化財課）が行なった。

4．遺物の実測、遺構・遺物のトレースは瀧本が行なった。

5．写真撮影は、遺構を瀧本が、遺物は木器の一部を浜石哲也（福岡市埋蔵文化財センター）が行ない、その他は藤美代子が行なった。

6．遺構はすべて記号化し、次のように表示した。

ＳＡ……柵　ＳＢ……掘立柱建物　ＳＤ……溝・河川　ＳＥ……井戸　ＳＧ……池
ＳＫ……土壙　ＳＰ……柱穴　ＳＸ……水田

7．本書に使用した方位は磁北方位で、真北より６°21′西偏する。

8．本報告書に関する遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されている。

9．陶磁器は、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）・井沢洋一（福岡市埋蔵文化財センター）・池崎譲二・横山邦継（福岡市埋蔵文化財課）各氏の助言を得たが、文責は瀧本にある。

10．土製仏像の文字解説では八尋和泉（九州歴史資料館）・後藤耕二（福岡県立美術館）各氏の助言を得たが、文責は瀧本にある。

11．本書の執筆・編集は瀧本が担当した。

遺　跡　名	下山門乙女田遺跡（しもやまとおとめだ）		
遺跡略号	ＳＯＭ	調査番号	８５３２
調　査　地	福岡市西区下山門字乙女田４７３番他		
調査期間	昭和６０年９月１９～昭和６１年２月２８日		
調査対象面積	９，１８５㎡	調査面積	６，５００㎡

本　文　目　次

頁

第一章　はじめに …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査の組織 …… 1
第二章　遺跡の歴史的環境 …… 4
　1　位置と歴史的環境 …… 4
　2　地形と地質 …… 4
第三章　調査の経過 …… 9
第四章　遺構と遺物 …… 11
　1　遺跡の概観 …… 11
　2　遺構と土層との関係 …… 11
　3　遺構 …… 12
　4　遺物 …… 22
　　a　土器・陶磁器 …… 22
　　b　土製仏像・瓦・土錘・石錘・金属製品・銅銭・石製品 …… 40
　　c　木器 …… 43
第五章　まとめ …… 53

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000）
Fig. 2　試掘調査トレンチ位置図（縮尺1/1,000） …… 2
Fig. 3　周辺地形図（縮尺1/10,000） …… 5
Fig. 4　地質調査地点図 …… 7
Fig. 5　地質柱状図 …… 7
Fig. 6　明治33年の周辺地形図（縮尺1/20,000） …… 8
Fig. 7　調査区割略図 …… 9
Fig. 8　遺構と土層の関係概略図 …… 11
Fig. 9　ＳＢ01実測図（縮尺1/100） …… 12
Fig. 10　ＳＢ02実測図（縮尺1/100） …… 12
Fig. 11　遺構配置図（縮尺1/500） …… 折り込み
Fig. 12　ＳＤ28実測図（縮尺1/80） …… 折り込み

頁

Fig. 13　SD30木材集積図（縮尺1/20）……15
Fig. 14　SE01実測図（縮尺1/40）……16
Fig. 15　SE02実測図（縮尺1/40）……16
Fig. 16　SE03実測図（縮尺1/40）……17
Fig. 17　SE04実測図（縮尺1/40）……18
Fig. 18　SE05実測図（縮尺1/40）……19
Fig. 19　SE07実測図（縮尺1/40）……19
Fig. 20　SX01実測図（縮尺1/300）……21
Fig. 21　SD01出土土器実測図（縮尺1/3・1/4）……23
Fig. 22　SD03出土土器実測図（縮尺1/3）……25
Fig. 23　SD03出土土器実測図（縮尺1/3・1/4）……26
Fig. 24　SD04出土土器実測図（縮尺1/3）……29
Fig. 25　SD04出土土器実測図（縮尺1/3）……30
Fig. 26　SD04出土土器実測図（縮尺1/4）……31
Fig. 27　SD06・08・17・24出土土器実測図（縮尺1/3・1/4）……32
Fig. 28　SD28出土土器実測図（縮尺1/3・1/4）……35
Fig. 29　SD31出土土器実測図（縮尺1/3・1/4）……35
Fig. 30　SE02，SG01，SK03・04・09・10・16・19出土土器実測図（縮尺1/3・1/4）…36
Fig. 31　灰褐色砂質土上面出土土器・陶器実測図（縮尺1/3・1/4）……38
Fig. 32　陶器、磁器実測図（縮尺1/3）……39
Fig. 33　大宰府史跡第67次調査出土土製仏像（縮尺1/3）……40
Fig. 34　SD04出土土製仏像実測図（縮尺1/3）……40
Fig. 35　SD04出土土製仏像拓影……40
Fig. 36　土錘、石錘実測図（縮尺1/2）……41
Fig. 37　金属製品実測図（縮尺1/1）……42
Fig. 38　銅銭拓影（縮尺1/1）……42
Fig. 39　石鍋、石斧実測図（縮尺1/4）……42
Fig. 40　編錘実測図（縮尺1/2）……43
Fig. 41　SD28出土木器実測図（縮尺1/4）……44
Fig. 42　SD28出土木器実測図（縮尺1/4）……45
Fig. 43　SD28出土木器実測図（縮尺1/2）……46
Fig. 44　SD28出土建築部材・木器実測図（縮尺1/8）……折り込み

Fig. 45　ＳＤ30出土木器実測図（縮尺1/4）……47
Fig. 46　ＳＤ30出土木器実測図（縮尺1/4）……48
Fig. 47　ＳＤ30出土木器実測図（縮尺1/4）……49
Fig. 48　ＳＤ30出土木器実測図（縮尺1/4）……50
Fig. 49　ＳＤ30出土木器実測図（縮尺1/4）……51
Fig. 50　ＳＤ31出土木器実測図（縮尺1/4）……52
Fig. 51　ＳＥ05出土漆塗椀実測図（縮尺1/2）……52
Fig. 52　ＳＧ01出土下駄実測図（縮尺1/4）……52

表　目　次

Tab. 1　下山門乙女田遺跡の発掘調査作業経過
Tab. 2　下山門乙女田遺跡の整理作業経過
Tab. 3　ＳＤ01出土土器観察表
Tab. 4　ＳＤ03出土土器観察表
Tab. 5　ＳＤ03・04出土土器観察表
Tab. 6　ＳＤ04出土土器観察表
Tab. 7　ＳＤ04出土土器観察表
Tab. 8　ＳＤ04・06・08・17・24・28・31出土土器観察表
Tab. 9　ＳＤ28・31，ＳＥ02，ＳＧ01，ＳＫ03・04・09・10・16・19出土土器観察表
Tab. 10　ＳＫ04・10，ＳＰ11・42・47・101・184・190・192灰褐色砂質土出土土器観察表
Tab. 11　灰褐色砂質土，ＳＤ01・04・31，ＳＧ01，ＳＫ05出土土器・陶磁器観察表
Tab. 12　土錘観察表

図　版　目　次

巻頭写真　ＳＥ05出土漆椀出土状況
ＰＬ．1　調査区遠景（南から）
ＰＬ．2　(1)　Ⅰ区調査区全景（南から）　(2)　Ⅰ区調査区全景（北から）
ＰＬ．3　(1)　Ⅱ区調査区全景（東から）　(2)　ＳＤ09・11（北から）
ＰＬ．4　(1)　ＳＤ01・02・07（北から）　(2)　ＳＤ01土層（西壁）

PL．5　(1)　Ⅲ区調査区上層遺構（南から）　(2)　ＳＸ01（北から）
PL．6　(1)　Ⅲ区調査区上層遺構北半部　(2)　ＳＤ17・19（東から）
PL．7　(1)　Ⅲ区調査区下層遺構全景（北から）　(2)　ＳＤ29（西から）
PL．8　(1)　ＳＤ28木材出土状況（西から）　(2)　ＳＤ28（西から）
PL．9　(1)　ＳＤ28木材出土状況（南から）　(2)　ＳＤ28木材出土状況（南東から）
PL．10　(1)　Ⅳ区調査区全景（北から）　(2)　ＳＢ01，ＳＸ02（南から）
PL．11　(1)　ＳＤ14・15・16（南から）　(2)　ＳＤ31（北から）
PL．12　(1)　Ⅴ区調査区西半部（北から）　(2)　ＳＤ30（北から）
PL．13　(1)　ＳＥ01（南から）　(2)　ＳＥ01掘形（南から）
(3)　ＳＥ01井戸枠（南から）　(4)　ＳＥ01井戸枠内堆積状況
PL．14　(1)　ＳＥ02（西から）　(2)　ＳＥ02井戸枠内堆積状況（西から）
PL．15　(1)　ＳＥ02井戸枠内竹筒出土状況（西から）
(2)　ＳＥ02掘形（西から）
PL．16　(1)　ＳＥ03（東から）　(2)　ＳＥ０４（南から）
PL．17　(1)　ＳＥ05（東から）　(2)　ＳＥ０６（東から）
PL．18　(1)　ＳＤ28鍬出土状況（北から）　(2)　ＳＤ２８槽出土状況（東から）
PL．19　(1)　ＳＤ28梯子出土状況（西から）　(2)　ＳＤ２８梯子出土状況（北から）
PL．20　(1)　ＳＤ28建築部材出土状況　(2)　枘穴部拡大
(3)　ＳＤ28漆塗木槽出土状況
PL．21　(1)　ＳＤ30木製農耕具出土状況　(2)　ＳＤ３０木材出土状況（東から）
PL．22　ＳＤ01出土土器
PL．23　ＳＤ03出土土器
PL．24　ＳＤ03出土土器
PL．25　ＳＤ04出土土器
PL．26　ＳＤ04出土土器
PL．27　ＳＤ04出土土器・土製仏像
PL．28　ＳＤ06・08・17・24出土土器
PL．29　ＳＤ28・31，ＳＧ01出土土器
PL．30　ＳＫ04・10・16・19，ＳＰ11・42・101・133出土土器
PL．31　灰褐色砂質土上面出土土器・陶器
PL．32　陶磁器
PL．33　土錘
PL．34　銅銭、耳環、飾金具、石錘

PL.３５	ＳＤ28出土木製鍬	
PL.３６	ＳＤ28出土槽（右）	木製鍬（左）
PL.３７	ＳＤ28出土梯子建築部材・木器	
PL.３８	ＳＤ28出土木器（右）	ＳＤ30出土木製鍬（左）
PL.３９	ＳＤ30出土木製鍬	
PL.４０	ＳＤ30出土木製鋤	
PL.４１	ＳＤ30出土木製鋤	
PL.４２	ＳＧ01出土下駄（左上）	ＳＥ05出土漆椀（右上）
	ＳＤ01出土木製編錘（左下）	ＳＤ31出土木製品（右下）

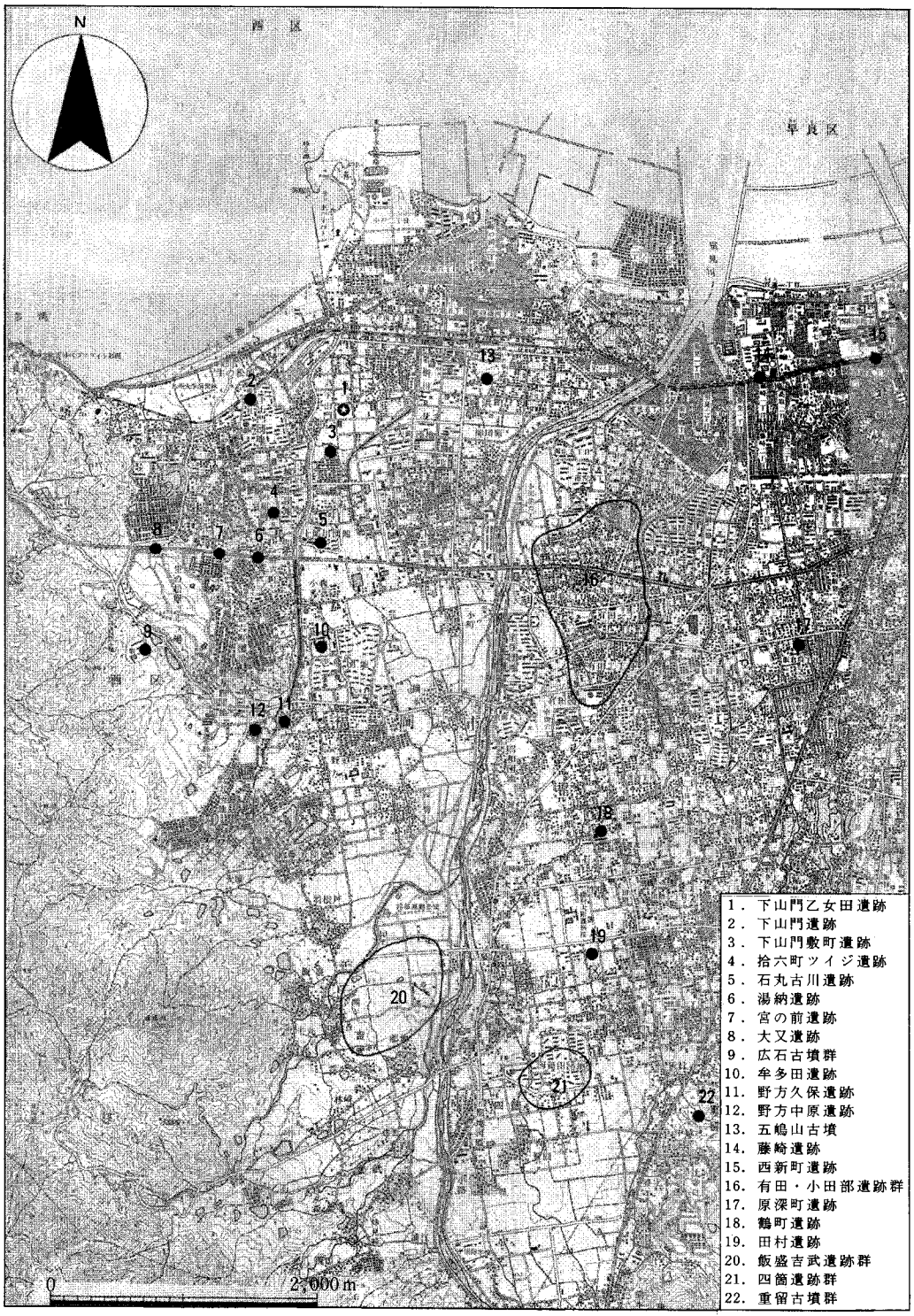


Fig. 1 周辺遺跡分布図（縮尺1/50000）

第一章　はじめに

1．調査に至る経過

近年における福岡市は、九州の文化・経済の中心としての度合を強め、その発展に伴う人口増が著しい。この人口増大に伴う宅地開発は、福岡市近郊の農村地帯にまで及び、既設の公共施設数が不足する事態を生じさせている。特に、生徒数の増加に伴う過大規模校の出現は、教育都市福岡にとって大きな問題となっている。このため、過大規模の解消を重点課題とする福岡市教育委員会では、過大規模校の一つである西区内浜中学校を分離、新設することとし、昭和５９年１０月に福岡市土地開発公社に対して学校用地取得の依頼がなされた。これを受けた福岡市土地開発公社は、西区下山門字乙女田に用地25,227㎡を取得した。その後、この学校建設予定地内における埋蔵文化財の有無を確認する事前調査の依頼が、昭和６０年６月に用地計画課より埋蔵文化財課に対して行なわれた。

埋蔵文化財課は、学校建設予定地には福岡市文化財分布地図によると遺跡は認められないが、予定地の東南近くには下山門敷町遺跡が存在することから遺跡の存在が十分に考えられるとして、試掘調査を行なった。試掘調査（Fig.２）は、予定地全域（25,227㎡）を対象として１０本、延513mのトレンチを設定して実施した。その結果、トレンチ５・７・８を中心にして溝・柱穴の遺構を確認するとともに土師器・滑石製の石鍋・磁器を採集した。

試掘調査報告によると、遺構の中心は予定地の北西部にあると思われ、遺構の性格は鎌倉から室町時代の集落跡ではないかと報告されている。さらに、調査の進展によっては遺跡が更に広がる可能性と、下層における古い時期の遺構が存在する可能性があることも報告されている。

試掘調査結果を得た埋蔵文化財課は、試掘調査で遺構を検出した学校建設用地を含む東西240m南北100mの範囲を下山門乙女田遺跡として登録し、周知することにした。さらに関係機関と協議を行ない、昭和６２年４月開校に支障をきたさないように、昭和６０年度中に発掘調査に着手することを決定した。調査は予定地の北半部9,185㎡を対象地として、昭和６０年９月１９日から始め昭和６１年２月２８日に終了した。

2．発掘調査の組織

調査委託者　福岡市都市開発公社

調査主体者　福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

文化部部長　河野清一

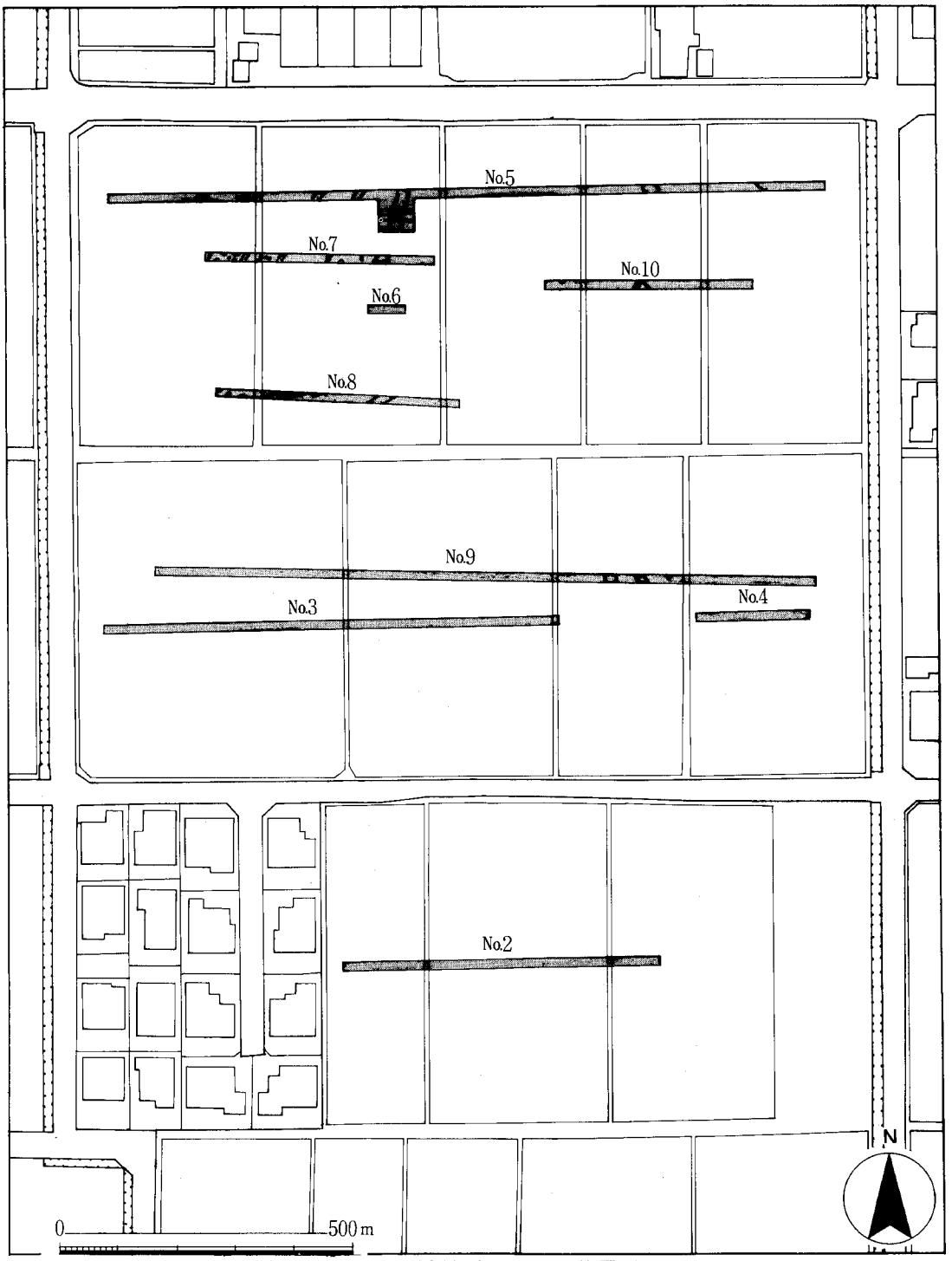


Fig. 2　試掘調査トレンチ位置図

調査責任者　埋蔵文化財課課長　柳田純孝
　　埋蔵文化財課第１係長　折尾　学
庶務担当者　岸田　隆
調査担当者　山崎龍雄　松村道博（試掘調査）
　　瀧本正志（本調査）
地元協力者　青木サキノ　青木春子　赤池春光　荒牧八千代　有田吉太　有吉サダエ
　　伊藤君子　池 弘子　久保喜代子　小林フミ子　末松泉　末松ノブ子
　　鈴木百合子　添田シノブ　田中キヨキ　土斐崎マツエ　土斐崎靖　富永純子
　　中村千里　西島タミエ　西島初子　西島フサエ　松本トシエ　松本マサ子
　　三苫宗登　宮崎久美江　原 早苗　平田政子　藤 裕美子　古井モモエ
　　吉岡アヤ子　吉岡員代　吉岡竹子　吉岡タヤ子　吉岡蓮枝　脇坂ミサヲ
資料整理　尾崎育子　川口玲子　小松原澄江　児嶋絹子　小森佐和子　土斐崎つや子
　　吉田扶希子

第二章　遺跡の歴史的環境

1．位置と歴史的環境

下山門乙女田遺跡は、早良平野の北西部、生の松原海岸から800mほど南に入った沖積地に位置する。遺跡の東は低地帯が広がり、早良平野の中央を流れる室見川へつづく。西は十郎川が流れ、背振山系より派生した丘陵へとつづく。遺跡は標高３m前後に位置するが、下山門地域一帯は客土が行なわれていることから、標高２m前後に生活面が存在していると思われる。

早良平野には、旧石器時代を始めとして各時代の遺跡が全域に存在している。早良平野における遺跡の説明については、既刊の報告書に詳細に言及しつくされているので本文末に関係文献を列参してこれに譲り参照されたい。本書では、今回の調査と深く関わり合いをもつ奈良・平安時代から室町時代における遺跡に限定して述べてみる。

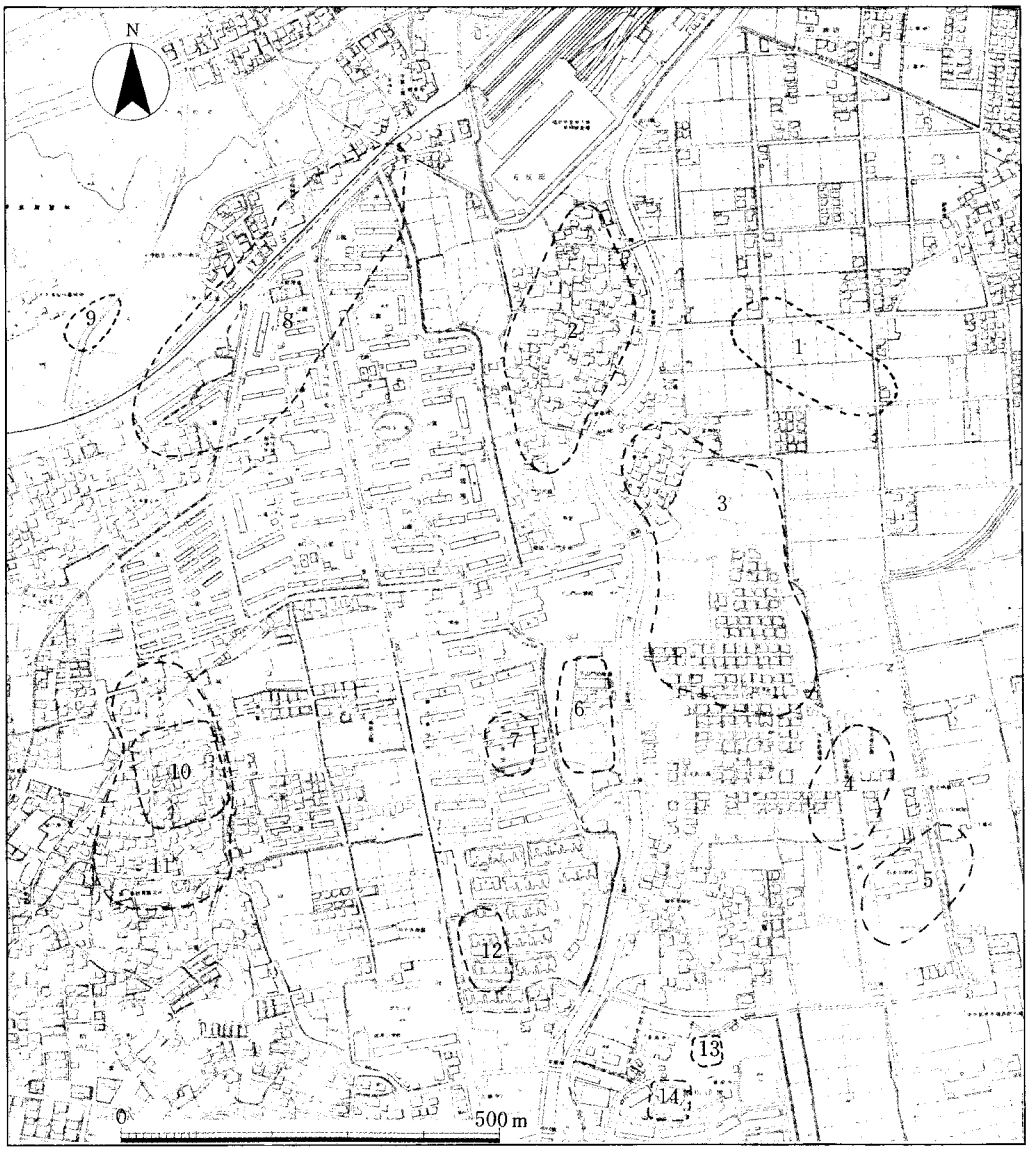
倭名類聚抄によれば、早良郡には六郷が存在する。六郷とは、毗伊郷（樋井川村・片江）・能解郷（野芥）・額田郷（野方）・早良郷（麁原）・平群郷（戸切）・田部郷（小田部）である。本遺跡の所在する下山門は、額田郷の中に含まれると考えられる。中世以降においては、山門庄として文献[註(1)]に見ることができる。

調査地周辺における奈良・平安時代の遺跡は、調査地の南約400mに下山門敷町遺跡[註(2)]、南西約900mに城ノ原廃寺[註(3)]、西約1.000mに斜ヶ浦瓦窯址[註(4)]が所在する。下山門敷町遺跡は、掘立柱建物１２棟を有す製鉄に関係する遺跡であり、本調査地からも鉄滓が出土している。城ノ原廃寺は、奈良時代から平安時代にかけて存続しており、本調査地からは、複弁蓮華文軒丸瓦が出土している。斜ヶ浦瓦窯跡は、「警護」の銘を有する瓦を生産して平安京へ供給している[註(5)]が、本遺跡からは、同様に「警護」の銘を有する平瓦が出土している。

以上のように、調査地から出土した遺物と密に関係する遺跡は、地域及び時代を限定しても数多く存在している。下山門乙女田遺跡は、これらの遺跡と性格は異なるが、遺跡の存在する地理的要因という点においては共通点を持つ。

2．地形と地質

下山門乙女田遺跡は、福岡市西部の早良平野の西側に流れる名柄川と十郎川とに挟まれた標高３m前後の平担地に位置する。早良平野は、背振山系を源とする室見川と幾つかの小河川によって形成された扇状地で、扇頂から末端まで１０数キロメートルを呈する。本遺跡は、扇状地の末端近くに位置し、北方800mで玄界灘につながる今津湾に達する。本遺跡の周辺は、従来水田地帯として利用されていたが、現在では住宅地として姿を変えつつある。水田として利用



1．下山門乙女田遺跡　2．下山門北山小路遺跡　3．下山門敷町遺跡　4．石丸A遺跡
5．石丸B遺跡　6．下山門南C遺跡　7．下山門南B遺跡　8．下山門遺跡
9．生の松原遺跡　10．城ノ原廃寺　11．城ノ原遺跡群　12．下山門南A遺跡
13．石丸古川B遺跡　14．石丸古川A遺跡

Fig.3　周辺地形図（縮尺1/10,000）

されていた当時は、降雨の度に冠水するという低湿地帯であった。その後、水田整備により現在の標高に嵩上けされたものであるが、今でも満潮時における十郎川への海水の流入が本遺跡よりさらに上流へ達していることから、本遺跡周辺がかなりの湿地帯であったことが想像される。

下山門乙女田遺跡の地質は、福岡市土地開発公社が委託した学校建設用地地質調査報告書[註(6)]によると、新生代三紀の砂岩・頁岩類の基盤層と厚い沖積層及び洪積層とからなっている。

沖積層は、層厚0.2m～0.5mの砂混じり粘土・シルトからなる上部層と、層厚約6.3mの砂及び礫混じり砂層からなる下部層の二層からなっている。

洪積層は、標高－8m前後を境に沖積層と区分され、層厚4m～5m程度で細粒化した花崗礫・マサ等の花崗岩類からなる上部層、層厚約2mの粘性土層の中部層・シルト・粘土混じりの瓦礫層からなる下部層の三層からなっている。

今回の調査で検出した遺構は、その大半が沖積層の上部層に位置するものであるが、一部は沖積層の下部層に位置する。

註1. 福岡市教育委員会「青木文書」『下山門遺跡』1973年

2. 福岡市立歴史資料館「福岡平野の歴史」1977年

3. 福岡市教育委員会「福岡市文化財分布地図」1979年

4. 福岡市教育委員会「草場古墳群、斜ヶ浦瓦窯址」1974年

5. 同　上

6. 五代産業株式会社「内浜地区中学校用地地質調査委託業務報告書」1985年

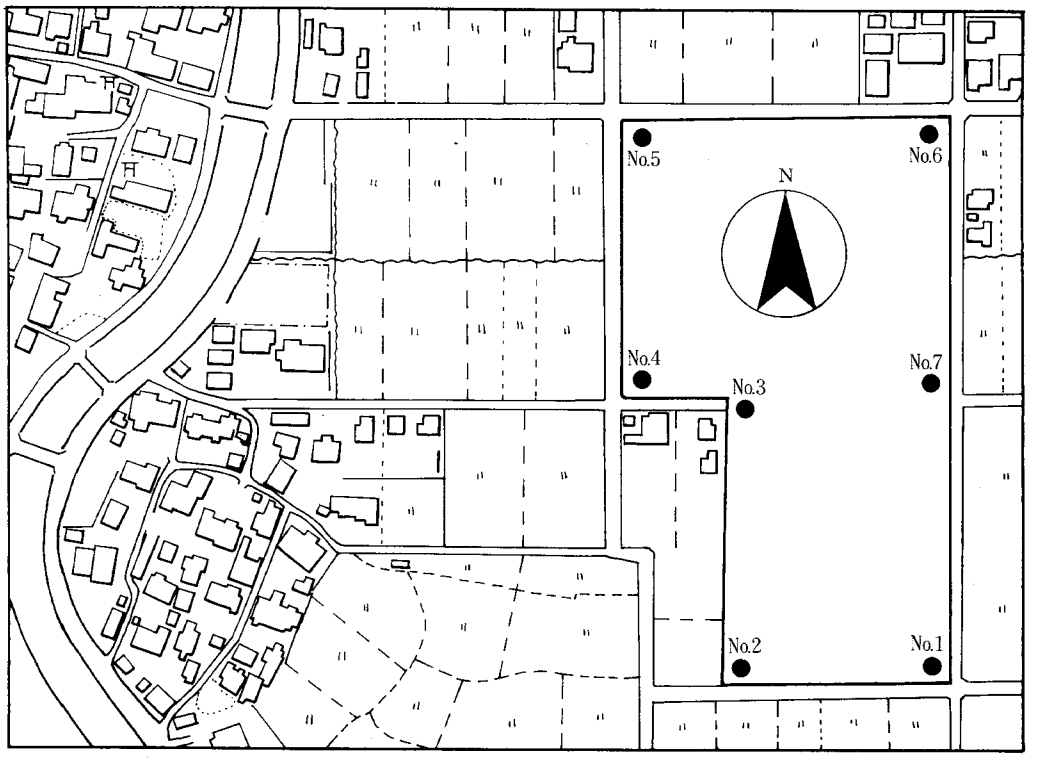


Fig. 4　地質調査地点図

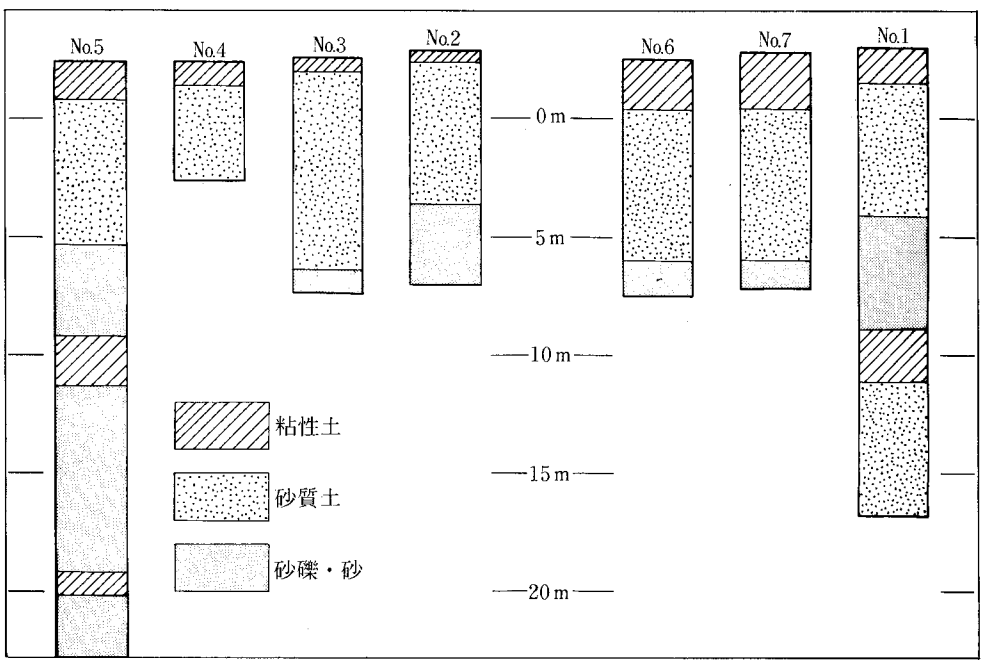


Fig.5　地質柱状図

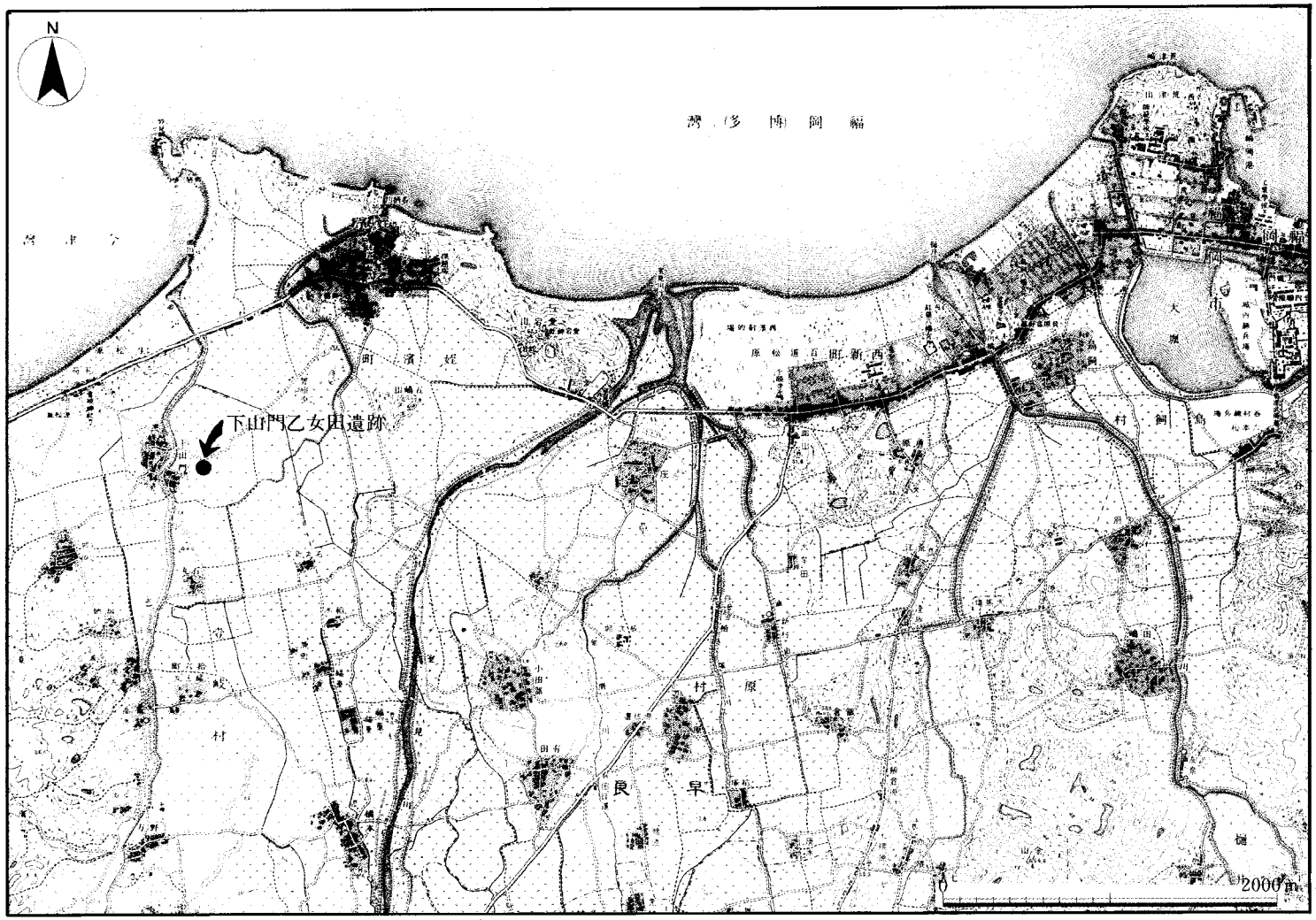


Fig. 6 明治33年の周辺地形図(縮尺1/20,000)

第三章　調査の経過

調査の経過

発掘調査は、学校建設用地の北西部に遺構の中心があるという試掘調査の所見から、用地の北半部に調査区を設定して行なうことにした。しかし、福岡市土地開発公社から昭和６０年度中に用地造成を完了させることが決定しているので、工期的に早急に造成工事を行なう心要がある地区を優先して調査を行なってほしい旨の要請があった。この要請に対して、埋蔵文化財課は、発掘調査と造成工事との両者に極力支障をきたさない方法として、Fig.7 に示すように５つの小調査区を設定し、調査が終了次第に調査区の造成工事を順次に認めることにした。

調査は、Ⅰ区→Ⅱ区→Ⅲ区→Ⅴ区→Ⅵ区の順に行ない、昭和６０年９月１９日着手し、昭和６１年２月２８日に終了、約半年を要した。

調査においては、降雨によるヘドロの流入や地下水の湧水等の障害が調査中に途切れることなく続いた。

出土遺物の整理及び調査報告書作成は表に示す日程で行ない、出土遺物は洗浄、註記入れ、復元、実測、写真撮影の順に行なった。遺物の実測、原稿の執筆は、業務の都合上、専ら夜間に行なわなければならず、そのため長時間を要した。

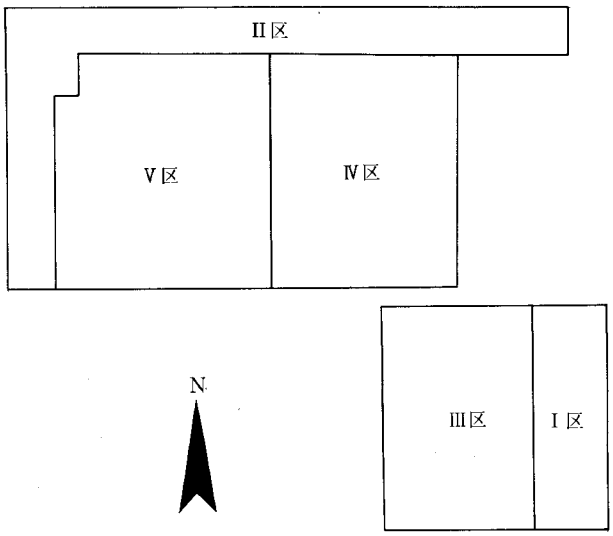
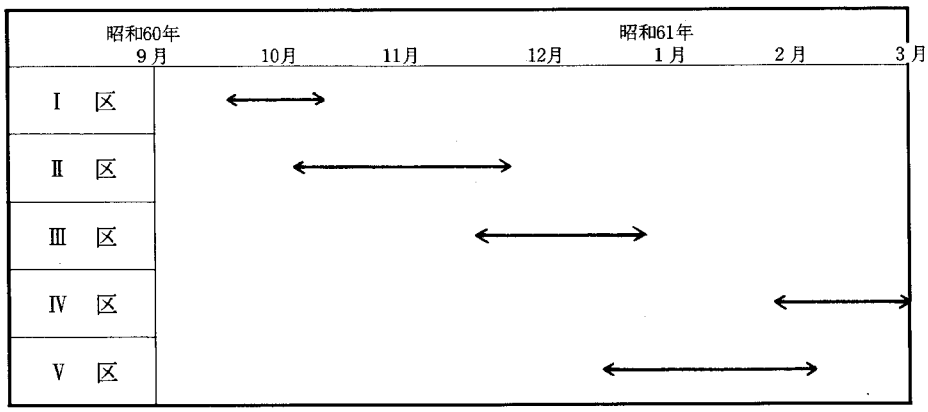
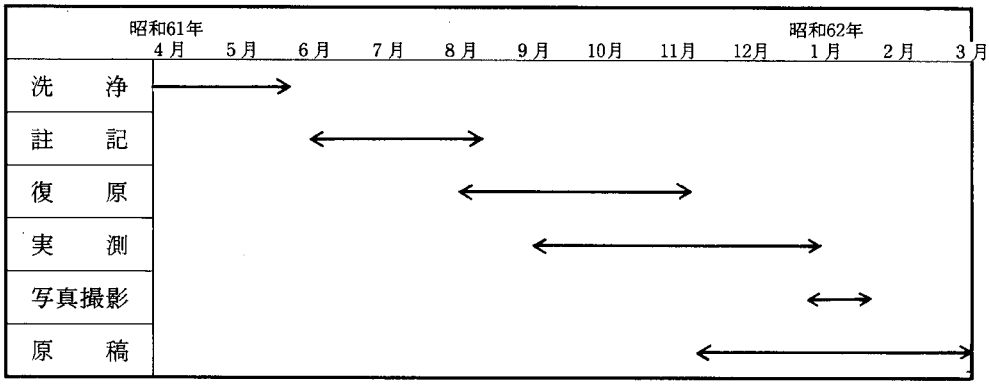


Fig.7　調査区割略図



tab.1　下山門乙女田遺跡の発掘調査作業経過



tab. 2 下山門乙女田遺跡の整理作業経過

調査日誌抄

昭和６０年

９ 月１９日　バックフォーにり表土を除去し、Ⅰ区より遺構検出作業を行なう。

９ 月２０日　Ⅰ区で溝・畦畔状の各遺構を検出する。

９ 月２５日　連日の雨で、調査区の周辺から大量のヘドロが調査区へ流入し、ヘドロ除去作業を行なう。

１０月 １ 日　Ⅰ区の畦畔状遺構と足跡の写真撮影

１０月 ５ 日　台風20号により簡易便所が倒され早急に修理する。

１０月 ８ 日　Ⅰ区の土層実測と併行してⅡ区の表土剝ぎに着手する。

１０月１２日　Ⅱ区の遺構検出作業を行なうが、東半部では溝以外の遺構は検出されない。

１０月２１日　ＳＤ０１・０４を掘り下げる。埋土中より土師器の坏・皿が出土する。

１１月１０日　Ⅲ区の遺構検出作業を開始する。１区で検出した畦状遺構がⅢ区に拡がることを確認する。

１１月２０日　ＳＤ１７・１９・２４を掘り下げる。さらにⅢ区北半部を掘り下げて畦畔状遺構の拡がりを確かめようとしたが、北半部には残存しない。

１２月 ３ 日　Ⅲ区にトレンチを入れて、下層に河川が存在することを確認する。

１２月１６日　ＳＤ２８の木材出土状況の実測を雪降る中で行なう。

昭和６１年

１ 月 ９ 日　Ⅴ区のＳＥ０１・０２を掘り下げる。

１ 月１７日　ＳＥ０５より漆椀が出土する。

２ 月 ８ 日　Ⅳ区の掘り下げを雪降る中で行なう。ヘドロと雪に悩まされる。

２ 月２８日　機材を徹収し、調査を終了する。

第四章　遺構と遺物

1．遺跡の概観

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物２棟、柵２条、井戸７基、溝・河川31条、水田、池、土壙、柱穴などである。調査区の西半部及び南半部において遺構は密であるのに対して中部及び東北部は希薄である。

遺構は、古墳時代前期から室町時代末に属し広範囲な年代に及ぶが、室町時代が中心となる。古墳時代前期以前の遺物もいくつか出土しているが後世に混入したと思われ、それらに関係する遺構の所在は調査地の南方を考えるのが妥当であろう。

遺構の解説は、種類毎に行なう。遺構には、遺構の種別を表わすため、ＳＡ－柵、ＳＢ－掘立柱建物、ＳＤ－溝・河川、ＳＥ－井戸、ＳＧ－池、ＳＫ－土壙、ＳＸ－水田、等の記号を遺構番号の前に付して標記する。

遺構は、その検出面の違いにより上層と下層とに大別され、さらに幾つかに区分される。Fig. 11の遺構配置図では、上層遺構を黒、下層遺構を赤で示した。

2．遺構と土層との関係

調査地の基本的層位は、地表から１：水田の耕土及び床土層、２：水田整備に伴なう客土層、３：灰褐色砂質土層、４：灰色砂層の順である。灰褐色砂質土層は、Ⅱ・Ⅳ区で認められるものの、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ区では、茶灰色砂質土に変る。遺構検出は、標高約２ｍの灰褐色・茶灰色砂質土層上面において行なった。調査区全体では、北から南へ向かって緩やかに下降しており、この緩傾斜面を埋める形で青灰砂層が堆積している。

遺構は、少なくとも４層の土層に分かれて切り込んでいる。

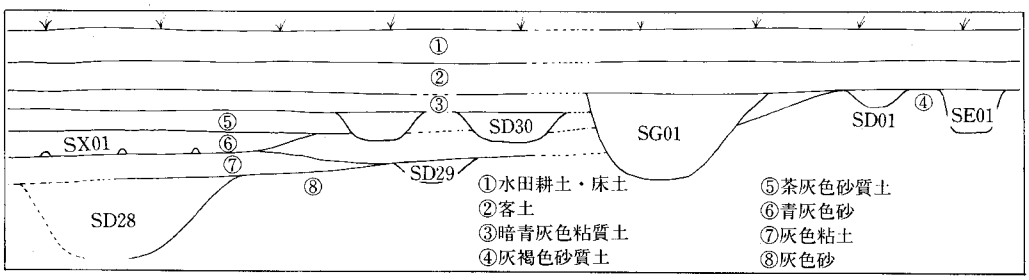


Fig. 8　遺構と土層の関係概略図)

3．遺構

SA01　Ⅲ区調査区中央にある東西柵列。3間分検出し、柱間寸法は2.2m～2.8mで一定しない。

SA02　ＳＡ01の南に位置する東西柵列。4間分検出し、柱間寸法は1.5m～2.4mで一定しない。ＳＢ02と方向を同じくする。

SB01（Fig.9，PL.10）　Ⅳ区調査区西で検出した、桁行3間（5.4m）・梁間2間（3.4m）の南北棟の掘立柱建物。ＳＸ02を切って作られている。柱間は、桁行が1.8m等間、梁行が1.8mと1.6mである。柱穴は、30cm×50cmの円形もしくは楕円形の平面形をなし、深さ20cm～30cmほど残る。遺物は、柱穴埋土から土師器（坏）片が数点出土している。

SB02（Fig.10）　Ⅲ区調査区中央西にある桁行3間（5.7m）・梁間1間（2.9m）の東西棟の掘立柱建物。柱間は、桁行が1.8m～2.2mと一定しない。柱穴は、30cm×50cmの円形もしくは楕円形の平面形をなし、深さ10cm～50cm程残る。

SD01　Ⅱ区調査区西で検出した溝で、幅2m～4m・深さ0.6mを測る。溝は、調査区北で北東方向から北西方向へＬ字状に折れ曲がり、調査区外へ延びる。溝の西岸は幅1mの平担な面を有する。溝の東岸でも平担な面を検出している。溝が北西へ折れ曲がる所での溝底は、0.3mの高低差がある段をなしている。溝からは、弥生土器（甕）・土師器（皿・坏・高坏・擂鉢・鍋等）・瓦質土器（擂鉢）・陶器（擂鉢）・磁器（粉青沙器）・平瓦・土錘・滑石製石

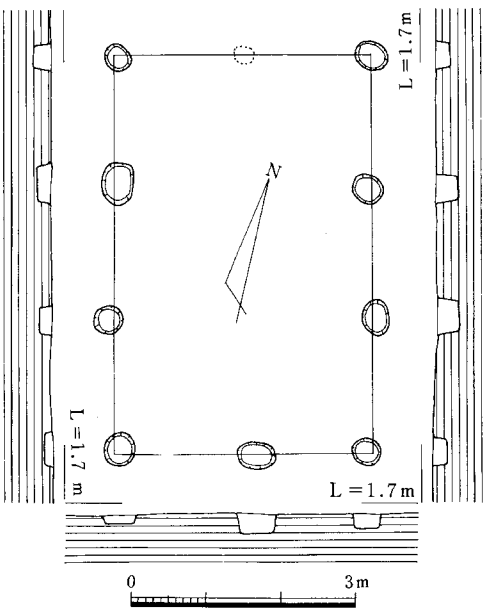


Fig. 9　SB01実測図（縮尺1/100）

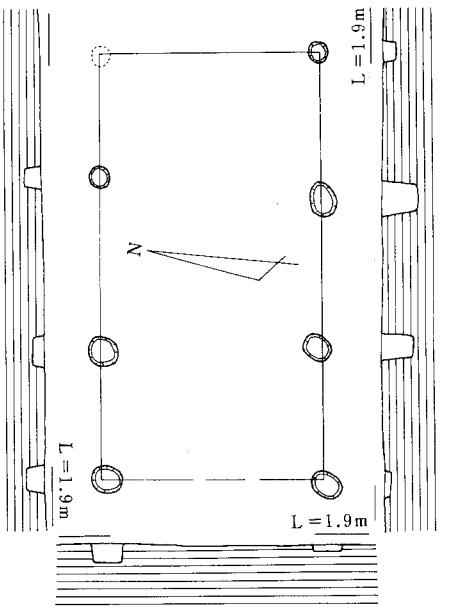


Fig.10 SB02実測図（縮尺1/100）

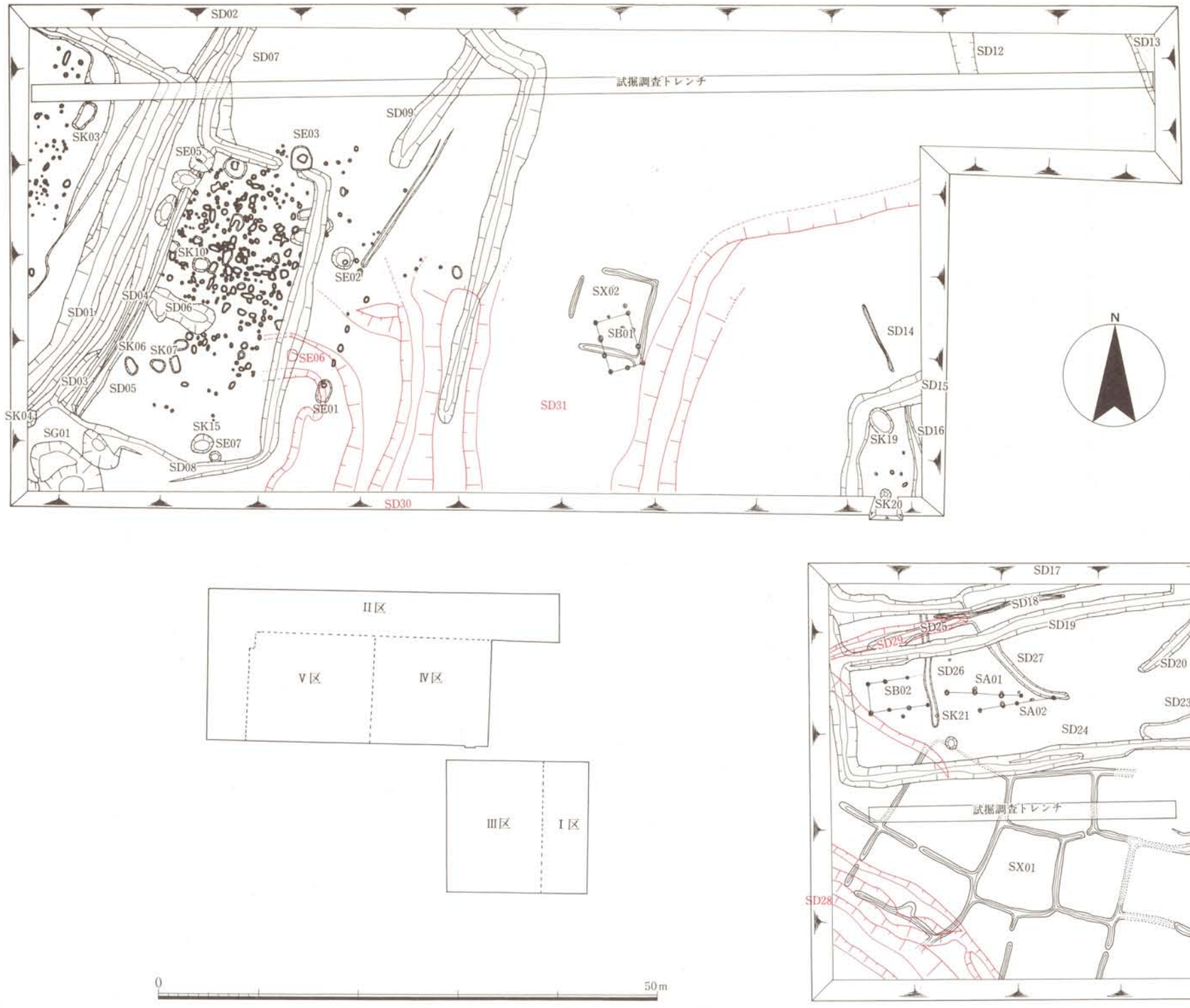


Fig.11　遺構配置図（縮尺1/500）

鍋・黒曜石・鉄滓・木製品（編錘）等が出土している。

SD02（PL.4）　Ⅱ区調査区北西に位置する南北溝で、幅1.2m・深さ0.3mを測る。溝は、灰褐色砂質土層上面から切り込んでいる。溝の断面形は緩やかな弧を描く。溝内には、土層に灰褐色砂、下層に暗灰色砂質土が堆積している。溝からは、土師器（皿・坏）等が小量出土している。

SD03　Ⅱ区調査区南で検出した南北溝で、SD04に切られており幅は1.5m以上・深さ0.3mを測る。開溝期における溝の流れは、SE04と同様であったと考えられる。溝からは、土師器（皿・坏・甕）・陶器（甕）・磁器（碗）が出土している。

SD04　Ⅱ区調査区南にある南北溝で、調査区中央で途切れる。幅1m・深さ0.2mを測る。溝の南はSG01に切られている。溝の断面形は、緩やかな弧を描く。溝からは、木製漆椀・弥生土器（高杯）・土師器（皿・坏・擂鉢・鍋・釜）・瓦質土器（擂鉢・鉢）・陶器（梅瓶・擂鉢・角椀）・磁器（碗）・土製仏像・土錘・丸瓦・銅銭（祥符元寶）・黒曜石・鉄滓が出土している。

SD05　Ⅱ・Ⅴ区調査区で検出した南北溝で、北方で東へ折れ曲がり終結する。幅0.7m～1m・深さ0.2m～0.3mを測る。溝の南はSG01に切られる。溝は、SE04・05を壊して開溝されている。溝からは、土師器（皿・坏・・鍋）・磁器（碗・皿）・土錘等が出土されている。

SD06　Ⅴ区調査区西に位置する東西溝で、幅2m～2.3m・深さ0.5mを測る。溝の東端は、緩やかに立ち上がり、西は、SD05に切られている。本書では、溝としたが、土壙の可能性も強い。溝からは、土師器（皿・坏・鍋）等が出土している。

SD07　Ⅴ区調査区で検出した南北溝で、幅1.5m～2m・深さ0·3mを測る。溝は南でSD05と交わる。溝からは、土師器（坏・擂鉢）等が出土している。

SD08　Ⅴ区調査区で検出した溝で、幅1m～2m・深さ0.3mを測る。溝は、調査区南で東西溝から南北溝に折れ曲がり、北端で更に西に折れて、緩やかに溝底が立ち上がる。溝の一部をSE03が切っている。溝からは、弥生土器・土師器（皿・坏・）・磁器（碗）等が出土している。

SD09（PL.3）　Ⅱ・Ⅴ区調査区で検出した南北溝で、幅2m～2.5m・深さ0.6mを測る。溝は、南で川底が緩やかに立ち上がり、北はSD11に切られている。溝の断面形は、緩やかな弧を描いている。溝からは、土師器（坏）・磁器（碗）・黒曜石が出土している。

SD10　Ⅴ区調査区中央北に位置する小溝で、幅0.5m・深さ0.2mを測る。溝は、南で溝底が立ち上がる。

SD11（PL.3）　Ⅱ・Ⅴ区調査区で検出した溝で、幅1.5m～2.5m・深さ0.4m～0.5mを測る。溝は、北方向への流れが、調査区北で、北西方向に変わる。更に調査区外へ延びる。溝の南端は、溝底が緩やかに立ち上がる。溝からは、須恵器（坏）・土師器（皿・坏・鉢・鍋）・

瓦質土器（擂鉢）・陶器（梅瓶）・磁器（碗）・鉄滓等が出土している。

SD12　Ⅱ区調査区東で検出した溝で、溝底がわずかに残る。

SD13　Ⅱ区調査区東端で検出した南北溝で、溝の大半が調査区外にある。

SD14（PL.11）　Ⅳ区調査区東に位置する南北溝で、幅0.2m～0.3m・深さ0.1mを測る。溝は、南北両端で、それぞれに溝底が立ち上がる。

SD15（PL.11）　Ⅳ区調査区南東で検出した溝で、幅1.5m～2.5・深さ0.3m～0·4mを測る。溝は、途中で、北方向から東方向へ折れ曲がり、調査区外へ延びる。溝の一部は、SK19に切られている。

SD16（PL.11）　SD15の南に位置する溝で、幅0.5m～1m・深さ0.1mを測る。溝は、北で浅くSD15に切られている。SD16はSD14・26につながる可能性が強い。

SD17（PL.6）　Ⅲ区調査区北で検出した溝で、幅1.3m～2m・深さ0.3m～0.4mを測る。溝は、東西方向の流れが、調査区西端で北へL字状に曲がり調査区外へ延びる。SD15と一連の可能性が強い。SD17はSD19・24とつながる溝で、同時に存在している。溝からは、弥生土器（甕）・須恵器（坏）・土師器（皿・鍋・擂鉢）・陶器（擂鉢）・磁器（碗・皿）・鉄滓等が出土している。

SD18　SD17の南に位置する東西溝で、両端の溝底は緩やかに立ち上がる。幅0.3m・深さ0.1mを測り、SD17に切られている。

SD19（PL.6）　Ⅰ・Ⅲ区調査区北に位置する東西溝で、幅1.5m～2m・深さ0.4mを測る。溝は西でSD24と接し、東端で流れが北へ変わり調査区外へ延びる。溝の断面形は、緩やかな弧を描く。溝からは、小量の土師器（坏）と銅銭（元豊通寶）が出土している。

SD20　Ⅰ区調査区北で検出した溝で、幅1m・深さ0.2mを測る。溝の南端は、川底が緩やかに立ち上がり、北ではSD19につながる。

SD21　Ⅰ区調査区東で検出した南北溝で、幅1.5m・深さ0.4mを測る。溝は、北で溝底が緩やかに立ち上がり、南では調査区外へ続く。

SD22　SD21の東で溝の溝の西岸を検出した。溝の幅・深さは不明であるが、SD21と同方向の流れである。

SD23　Ⅰ区調査区中央で検出した東西溝で、SD21に切られている。幅1m～2m・深さ0.1mを測る。

SD24　Ⅰ・Ⅲ区調査区で検出した溝で、幅1.2m～2m・深さ0.2m～0.4mを測る。溝は、東西方向の流れが調査区西で北方向へ変り、SD17・19と一体化する。SD17と接する所では、溝底の高低差が15cmあり、段をなす。溝からは、弥生土器（甕）・須恵器（蓋）・土師器（皿・坏・擂鉢・鍋）・磁器（碗・皿）・黒曜石・人頭大の鉄滓が出土している。

SD25　Ⅲ区SD17の南に位置する東西溝で、幅1m～1.5m・深さ0.15mを測る。溝は、

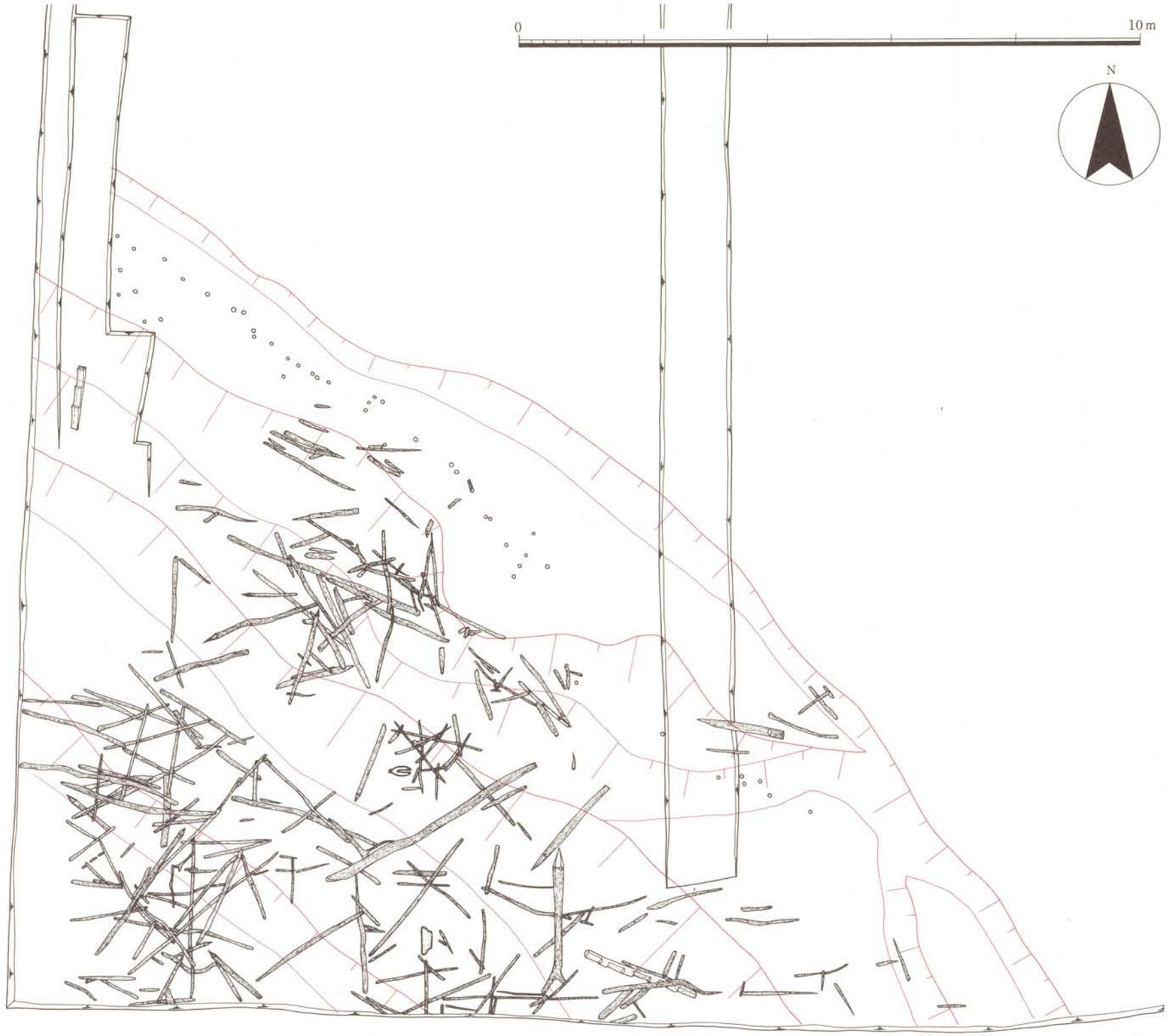


Fig.12　SD28実測図(縮尺1/80)

ＳＤ17・18に切られている。

SD26　Ⅲ区調査区北で検出した南北溝で、幅0.8m・深さ0.1mを測る。溝は、調査区中央で溝底が緩やかに立ち上がり、ＳＤ17・25に切られている。

SD27　ＳＤ26の西に位置する溝で、幅0.8m～１m・深さ0.1mを測る。溝は、調査区東で川底が緩やかに立ち上がる。ＳＤ19に切られている。

SD28（Fig.12，PL.8・9）　Ⅲ区調査区の南西隅に位置する溝で、幅13m以上・深さ１mを測り、北岸は南東から北西方向へ斜行している。溝は、灰色砂層上面で検出した。溝の南岸は調査区の外に想定されるが、溝底の最深部の位置から、溝の幅は20m前後の規模が想定される。溝の岸では、直径６cm前後の丸木杭列を検出した。杭は、総数45本にのぼり、溝の護岸に使用したものと思われる。

溝の堆積土は、上層の黒灰色粘土層と下層の黒灰色粘質砂層とに分れる。下層の黒灰色粘質砂層からは、木製農耕具・建築用部材・梯子・一端を尖らした丸太木等を始めとする多くの木材・弥生土器（高坏）・土師器（甕）が出土している。これに対して、上層の黒灰色粘土層には、殆ど遺物は含まれていない。

SD29（PL.7）　Ⅲ区調査区北、灰色砂層上面で検出した東西溝で、幅1.2m～２m・深さ0.4mを測る。溝は、東端が調査区北中央で溝底が緩やかに立ち上がり、西は調査区の外へ延びる。

SD30（PL.12）　Ⅳ区調査区南東に位置する南北溝で、灰色砂層上面で検出した。幅８m・深さ１mを測る。溝は流路が北で２つに分かれ、一方は北へ、他方は西方向へ流れる。溝内には、暗灰色粘質砂・粗砂・黒灰色粘質砂が堆積している。溝底からは、木製漆椀や、一ヵ所に集中した状態で木製農耕具を始めとする木製品が出土した。土器類は一点も出土していない。溝の西斜面には、木を人工的に集積させた状態（Fig.13）の遺構を検出した。２本の木に直交して10本の木が整然と並んでいる。

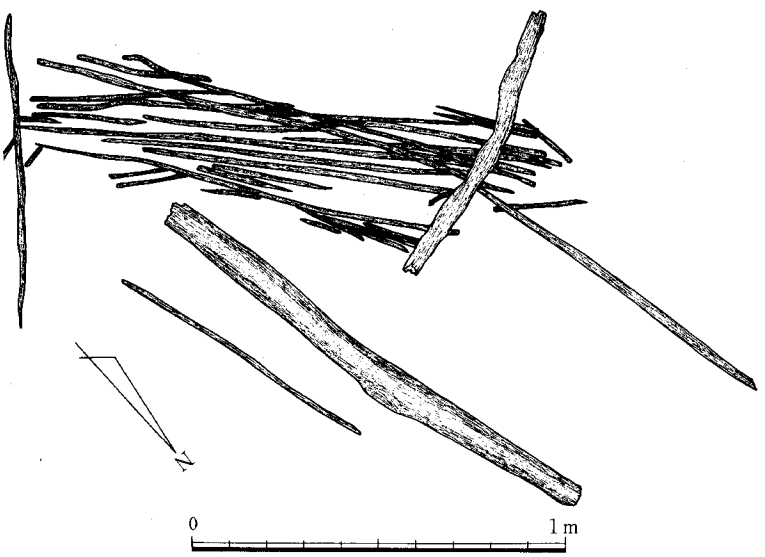


Fig.13　SD30木材集積図(縮尺1/20)

SD31（PL.11）

Ⅳ・Ⅴ区調査区南、

灰色砂層の上面で検出した南北溝で、幅20m・深さ１mを測る。溝は、北で東方向へ流れが変る。溝内からは、土師器（坏・擂鉢・鉢）・黒色土器（埦）・陶器（皿）が出土している。

SE01（Fig.14, PL.13）　　Ⅴ区調査区中央南に位置し、灰褐色砂質土上面で検出した。井戸枠の据え付け掘形は、長径2.4m・短径1.3mを測り、小判形の平面形を呈する。深さ0.7mである。井戸枠は、掘形の北側に偏する位置に据え付けられている。井戸枠自体は、直径55cmを測る木製の桶の底を取り除き、広径を下にして据え付けられている。桶は、14枚の板を組み合せて、竹のタガでとめている。調査では、一段分しか残っていなかったが、本来は桶の底を抜いて何個も重ねて井戸枠としていたものであろう。井戸からは、土師器（坏・鍋）が数点出土している。

SE02（Fig.15, PL.14・15）　　Ⅴ区調査区中央、灰褐色砂質土層上面で検出した。井戸枠の据え付け掘形は、長径2.2m・短形２mを測る楕円形の平面形で、深さ1.4mである。井戸枠は、掘形中央より南東へ寄っている。井戸枠自体は、ＳＥ01と同じく直経55cmの桶の底を取り除き、広径が下になるように据え付けられている。井戸枠は、二段の桶を重ねた状態で出土した。二段の内、下段の桶は破損してなく桶の大きさを知ることができる。下段の桶は、長

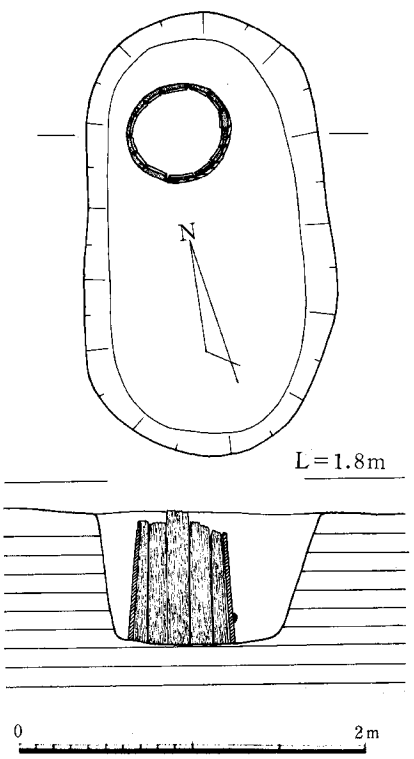


Fig. 14　SE01実測図(縮尺1/40)

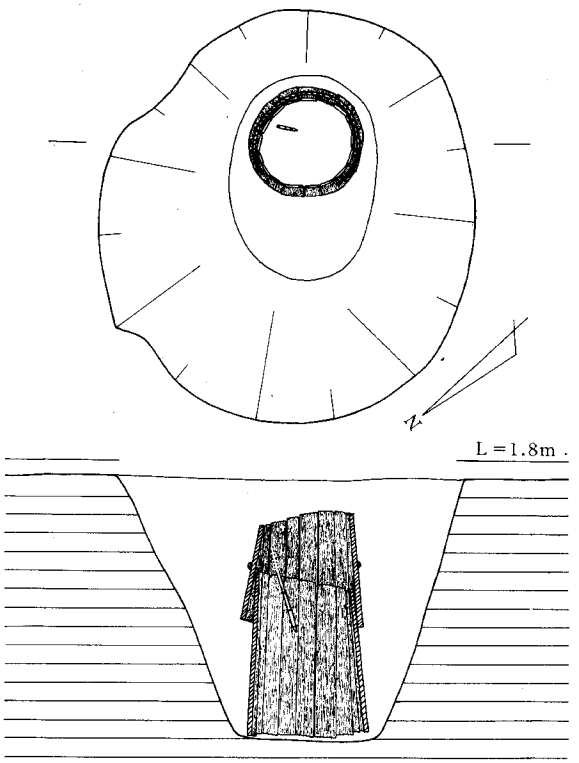


Fig. 15　SE02実測図(縮尺1/40)

さ75cm・幅９～13cm・厚さ３cmの板16枚を円形に組み合せ、竹のタガでとめている。上段の桶は、上部が欠損して全容は不明であるが、下段と同程度の板を17枚使って作られている。

井戸枠内から竹筒が立った状態で出土している(ＰＬ．15)。竹筒は、直径1.5cmの竹の先端を尖らせたもので、竹先を底へ向けている。竹筒の長さは、30cm程残存していたが、本来は、もっと長いものであったと考えられる。この竹筒は、出土状況及び出土列[註]から、井戸を埋めて廃棄するさいの祭に使用されたものであろう。祭は、井戸使用時における井戸の神への感謝と井戸を埋めるにあたり神のたたりを除ぐものであろう。竹筒は、その際に、井戸を埋めても神のもとに常に大気が流れ行くための方法として使われたものであろう。本調査では、ＳＥ02の他にＳＥ07でも同様の事例を見ることができる。ＳＥ02からは、土師器（皿・坏）・磁器等の破片が小量出土している。

SE03 (Fig.16, ＰＬ.16)　　Ⅴ区調査区北に位置し、灰褐色砂質土層上面で検出した。井戸枠の据え付けの掘形は、東西2.2m・南北2.3m・深さ0.3mの隅丸方形の平面形を呈し、中央で底が深くなりＳＤ08を切って作られている。一段深くなっている所は、東西１m・南北１mの隅丸方形で、底は検出面から0.6m下る。井戸枠等は残存していない。出土した遺物は、土師器（坏・皿）・磁器の破片が小量出土している。

SE04 (Fig.17, ＰＬ.16)　　Ⅴ区調査区北、ＳＥ05の東で灰褐色砂質土層上面で検出した。掘形は、東西2.2m・南北2.3mの円形の平面形を呈し、深さ0.4mを測るが、底中央上がり北で一段深くなる。一段深くなっている所は、長辺70cm・短辺55cmの長方形の平面形を呈し、掘形底より25cm深くなっている。更に、20cm×20cm程の板状の石が、落ち込みの縁に並べられている。この石列は、本来一周していたものと思われる。土師器（坏・土鍋・擂鉢）・陶器等の破片、鉄滓が出土している。

本書では井戸と考えたが、石列の在り方から廁の可能性もありえる。

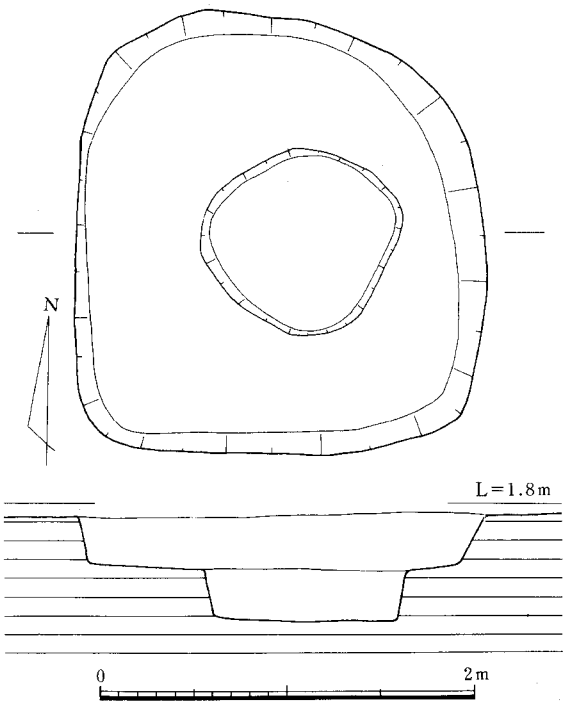


Fig. 16 ＳＥ03実測図 (縮尺1/40)

SE05 (Fig.18, ＰＬ.17・42)

Ⅴ区調査区西、灰褐色砂質土層上面で検出した。井戸枠の据え付けの掘形は、東西2.3m・南北2.4mを測り、隅丸方形の平面形を呈している。掘形の

一部はＳＤ25に壊されている。掘形の底は、検出面より１ｍ程下り、径1.5mの円形で、その中心が掘形上面の中心より北へ偏している。掘形の南斜面が緩やかな勾配であるのに対して、北・西両斜面は、急激に立ち上がる。

井戸枠は、３枚の板が立ち、西の板に50cm×60cmの板石が接して立っている。板は、幅８～10cm・長さ３０～50cm・厚さ1.5～２cmを測る。板石は、井戸枠内への砂土の流入を封じるために用いられていたと考えられ、井戸使用期には、４辺とも板石で囲んでいた可能性が強い。井戸底には、工作の跡は認められなかった。

井戸枠内からは、土師器（坏・土錘）・木製漆椀（巻頭写真）が出土している。椀は、井戸底から30cm高い位置で、二つに割れた状態で出土した。

SE06（ＰＬ.17）　Ｖ区調査区中央に位置し、灰色砂層上面で検出した。井戸枠の据え付けの掘形は、東西1.1m，南北1.2mを測り、平面形が円形を呈している。掘形の深さは、0.35mしか残存していないことから、井戸の上部は削平されたものと思われる。掘形の壁面は、急激に立ち上がっている。井戸内に位置する所には、直径0.5mの円形をなすように幅２～３cmの竹片が残存していた。更に、その円形の内側に接するように幅10cm・長さ25cm・厚さ１cmの板が立っていた。この竹片は、井戸底に用いられていた籠のような竹製品、もしくは井戸枠に用いられた桶のタガが残存したものと思われる。井戸枠からは、銅銭の「治平元寳」が出土したのみである。

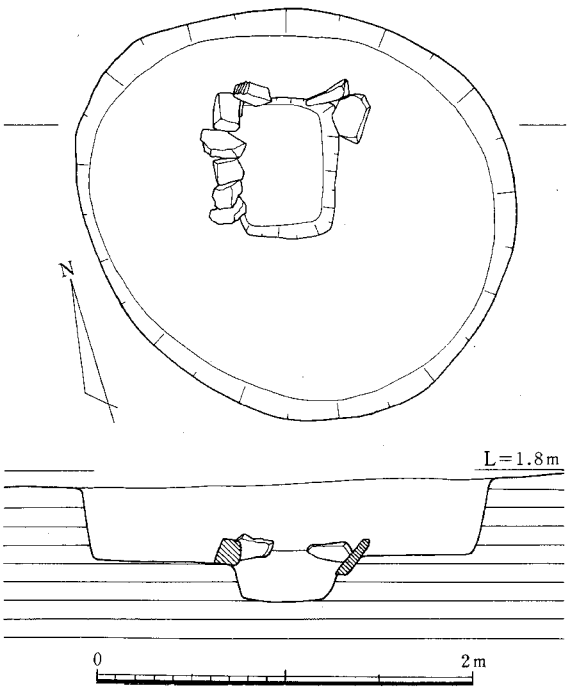


Fig. 17　ＳＥ04実測図（縮尺1/40）

SE07（Fig.19）　Ｖ区調査区南に位置し、灰褐色砂質土層上面で検出した。掘形は、東西1.1m・南北1.2m・深さ１mを測り、円形の平面形を呈している。掘形の壁は、垂直に近い立ち上がりを見せている。掘形内は、上層から灰褐色砂質土層・暗青灰粘質砂層・灰色砂層が水平堆積している。井戸枠は、残存していなかったことから、素掘りの井戸、若しくは井戸を埋める際に井戸枠を取り除いたものかもしれない。

掘形の中央に、直径３cm・長さ63cmの竹筒が垂直状態で埋められていた。竹筒の井戸底側は、ＳＥ02と同様に先を尖らせている。

掘形の底からは、土師器（皿・坏）が

小量出土している。

SG 01　Ⅱ区調査区南に位置し、北半部を検出した。調査区内では、東西９ｍ・南北６ｍの半形の平面形を呈し、深さは1.2mに達する。調査区内において底の最深部が認められることから池は、東西９ｍ・南北10m前後の規模と思われる。池は、池底から１ｍの厚さで暗青灰色粘土が堆積している。

SK 03　Ⅱ区調査区西北，ＳＤ01の西に位置し、灰褐色砂質土層上面で検出した。楕円形の平面形を呈し、長径3.1m・短径1.5m・深さ0.1mを測る。土壙は平担な面を有し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土中より土師器（坏・皿）が出土している。

SK04　Ⅱ区調査区南西に位置し、大半は調査区の外にある。平面形は半円形を呈し、直径1.8m・深さ0.6mを測る。土壙の上部は、ＳＤ01開溝時に削平を受けている。土壙の推積土は３層からなり、上層より灰褐色砂質土層・茶褐色粘質砂層・青灰色細砂層である。底は半円形の平担部を有し、壁面は緩やかな弧を描き立ち上がる。土壙内より土師器（皿・坏・鉢）・石錘等が出土している。

SK 06　Ⅴ区調査区西に位置する。南北1.6m・東西1.5m・深さ0.2mを測るり、楕区形の平面形を呈す。底は円形の平担部を有し、壁は緩やかに立ち上がる。土壙内より、土師器（皿・

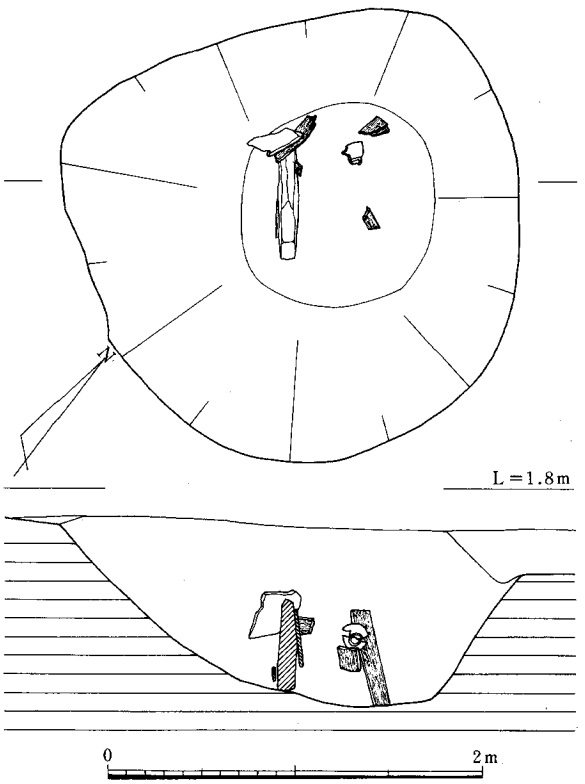


Fig. 18　ＳＥ05実測図（縮尺1/40）

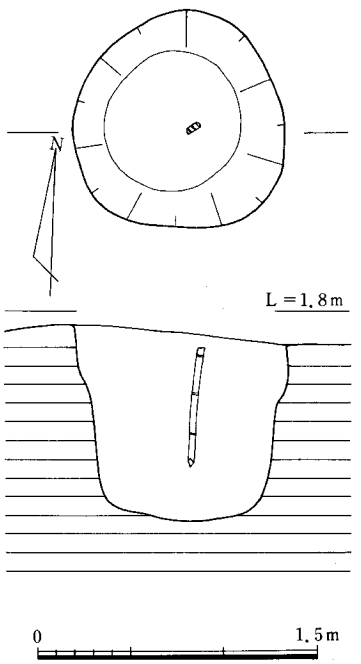


Fig. 19　ＳＥ04実測図（縮尺1/40）

坏）が出土している。

SK07　Ⅴ区調査区西，ＳＫ06の東に位置する。東西１ｍ・南北1.8ｍ・深さ0.3ｍを測り、楕円形の平面形を呈する。土壙の断面形は、緩やかな弧を描く。土壙からは、土師器（皿・坏）が数点出土している。

SK10　Ⅴ区調査区西，ＳＤ06の北に位置する。東西1.7ｍ・南北1.5ｍ・深さ0.2ｍを測り、楕円形の平面形を呈する。土壙の壁は、緩やかに立ち上がる。土壙からは、土師器（皿・坏・鉢）が出土している。

SK11　Ⅴ区調査区西に位置し、西半部はＳＤ05開溝時に壊されている。東西１ｍ・南北1.4ｍ・深さ0.4ｍを測り、土壙の壁は、緩やかに立ち上がる。土壙内より、土師器・青磁等が出土している。

SK12　Ⅴ区調査区西，ＳＫ11の東５ｍに位置する。東西1.0ｍ・南北1.6ｍ・深さ0.2ｍを測り、不整形な平面形である。土壙内からは、土師器（皿・坏）・青磁（碗）・白磁（碗）が出土している。

SK13　Ⅴ区調査区北西，柱穴群の中央に位置する。馬蹄形の平面形を呈しているが、複数の土壙もしくは柱穴を一度に掘った可能性もある。土壙は東西1.4ｍ・南北1.6ｍ・深さ0.3ｍを測る。土壙からは、土師器（皿・坏）が出土している。

SK15　Ⅴ区調査区南西に位置する。東西2.4ｍ・南北1.8ｍ・深さ0.6ｍを測り、楕円形の平面形を呈する。底は東西1.6ｍ・南北0.9ｍを測る楕円形の平面形である。土壙からは、土師器片が数点出土している。本書では、土壙としたが、井戸枠の据え付けのための掘形の可能性もある。

SK16　Ⅴ区調査区中央西に位置し、遺構の大半はＳＤ06に壊されている。東西1.6ｍ・深さ0.6ｍを測り、南北は、2.5ｍ前後を復原値と考える。土壙からは、土師器（皿・坏・擂鉢・鍋）・青磁（碗・皿）が出土している。

SK19　Ⅳ区調査区南東に位置し、ＳＤ15を切って開作されている。東西２ｍ・南北2.8ｍを測り、楕円形の平面形を呈している。底は、北辺が深さ15㎝・南辺が40㎝の二段になっている。土壙内からは、弥生土器（甕）・土師器（坏・鍋）・須恵器（坏蓋）等が出土している。

SP（柱穴）　Ⅴ区調査区西半部に集中し、一部はⅡ区調査区西に位置する。直径0.2ｍ～0.4ｍの円形もしくは楕円形の平面形を呈する。全て灰褐色砂質土層上面で検出した。Ⅴ区調査区西半部の柱穴には、底に板石の礎板を置き、直径10㎝程の柱痕が残る例がある。掘立柱建物が存在していたと思われるが、確認することはできなかった。柱穴からは、土師器・陶器・磁器・銅銭（皇宋通寶・紹聖元寶）・飾金具が出土している。

SX01（Fig.20, PL.5）　Ⅰ・Ⅲ区調査区南半部、灰色粘土層上面で検出した。灰色粘土は、Ⅰ・Ⅲ区調査区南半部で20㎝前後の厚さで広がっているが、中央部では薄くなり、北半部

では存在しない。水田は、15区画を確認したが、その平面形は方形ないしは長方形を呈し、規格性を有しない。畦畔は、幅45～65cm，高さ３～５cmを測り、屈折する。検出した水田の中、幾つかの水田の畦畔は、１～２ヶ所途切れている。これは、水田用水の取り入れ口及び排水口と考えられる。水田の面積は35～89m²を測り一定していない。水田面は、標高1.4～1.5mに位置し、北から南へ緩やかに下る。遺構面上には、シルト・砂が推積し、耕作時に水害を受けたことが想定される。Ⅰ区調査区においては、人と思われる足跡を確認したが、Ⅲ区調査区では確認していない。水田は、その北が水田面より20cm前後の比高差を有する微高地となり、この微高地を中心にして展開しているものと思われる。

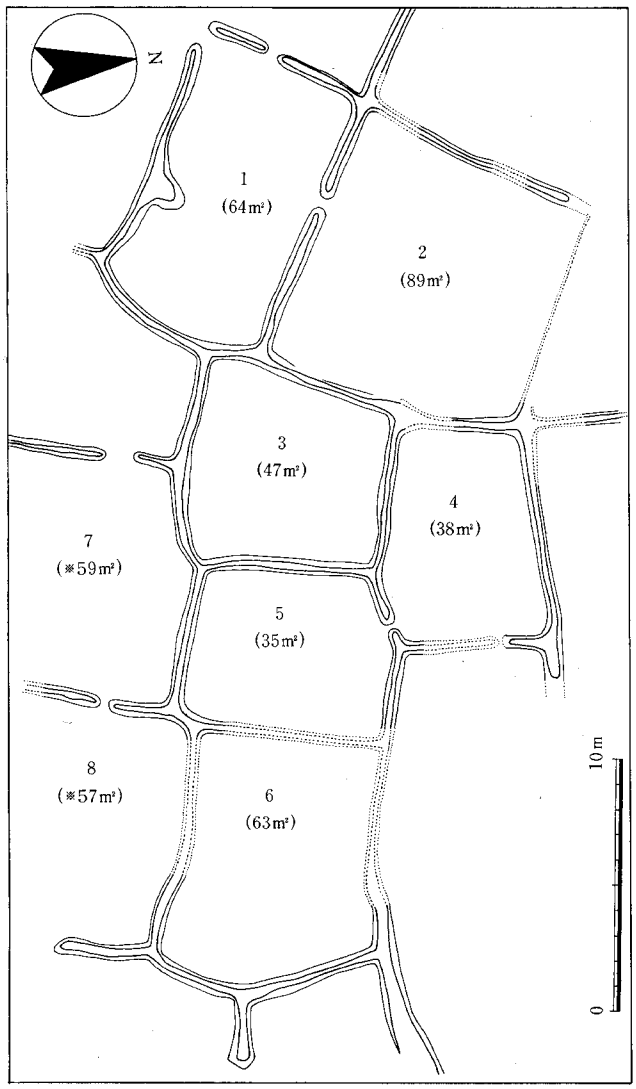


Fig. 20　ＳＸ01実測図（縮尺1/300）※は調査区内の面積

SX02（PL. 10）　Ⅳ区調査区中央西に位置し、灰色粘土層上面で検出した。確認した水田は、一区画分にとどまる。平面形は方形を呈し、面積50m²を測る。幅45～70cm・高さ３～６cmを測る。畦畔に囲まれ、標高1.45mに位置する。水田の北西・南西の両隅は畦畔が途切れているが、ＳＸ01の場合と異なっており、水口及び削平の両方を考える必要があろう。水田の東は緩やかに上がり、標高1.6mの微高地が広がる。この微高地は、Ⅰ・Ⅲ区で確認した微高地につながるものと思われる。水田は、ＳＤ31の推積土の最上層である灰色粘土層上面にあることから、ＳＤ31が埋まった後に耕作されている。そして、畦畔が南へ続く様相を見せていることから、水田は微高地を中心として西に広がりをもっていたものと思われる。ＳＸ02は、灰色粘土層上面に作られたＳＸ01と同じ水田と思われる。

4．遺　物

今回の調査で出土した遺物は、土器・陶磁器・瓦・木製品・銅銭・金属製品・石製品等で、パンコンテナ80箱余りを数える。これらは調査区全域から出土したが、大半は遺構に伴なうものである。本書では、主に遺構に伴うものを取り上げ、説明を行う。土師器・皿の分類は九州歴史資料館「大宰府史跡発掘調査概報」[註1]を、磁器の分類は福岡市教育委員会「博多出土貿易陶磁分類表」[註2]をそれぞれ参考とした。

a．土器・陶磁器

SD01出土の土器・陶磁器　(Fig.21・32, PL.22・32, tab.3)

土師器　皿・坏・高坏・擂鉢・鍋

皿（1～9）　口径7.3～9.3cm，底径5.3～8cm，器高1.2～2.0cmである。底部切り離しは糸切りによる。6・7・9は底部外面に板目痕が残る。(1・4)，(2)，(3・8・9)，(5～7)に細分できよう。

坏（10～18）口径11.3～13.1cm，底径6.8～9.9cm，器高2.3～3.1cmである。底部切り離しは糸切りによる。11は底部外面に板目痕が残る。16は底部内面にナデを施す。(12)，(10～11・13～18)に2分されよう。

高坏　高坏の脚部片が出土している。胎土は精選され0.5～1.0mmの砂粒を僅かに含む。焼成は酸化炎で赤褐色を呈している。外面は四面に大きく面取りされる。

擂鉢　破片数は50点ほど出土しているが、全形のわかるものは無い。胎土は0.5～1.0mmの砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。体部外面は縦方向の刷毛目調整後にナデを施し、内面は横方向の刷毛目調整後に5本単位の条線を刻む。

鍋　3個体出土しているが、全形のわかるものは無い。胎土は0.5～2.0mmの砂粒を多く含み、焼成は硬質とやや軟質とに分かれる。内面は横方向の刷毛目調整を施し、外面は縦方向の刷毛目調整後にナデを施す。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は面を持つ。外面には煤が付着する。

瓦質土器　擂鉢

擂鉢　破片数が15点ほど出土しているが、全形のわかるものは無い。胎土は精選されており、0.5～1.0mmの砂粒を僅かに含む。体部外面は縦方向の刷毛目調整後にナデを施し、内面は横方向の刷毛目調整後に3本～7本単位の条線を刻む。口縁端部は、角張るものと丸味を有するものとがある。

陶器　皿・擂鉢

皿（168）　口径9.4cm，底径2.8cm，器高3.3cmである。胎土は精選されており、赤褐色を呈す。口縁は緩やかに立ち上がる。底部切り離しはヘラ切りによる。中国産と思われる。

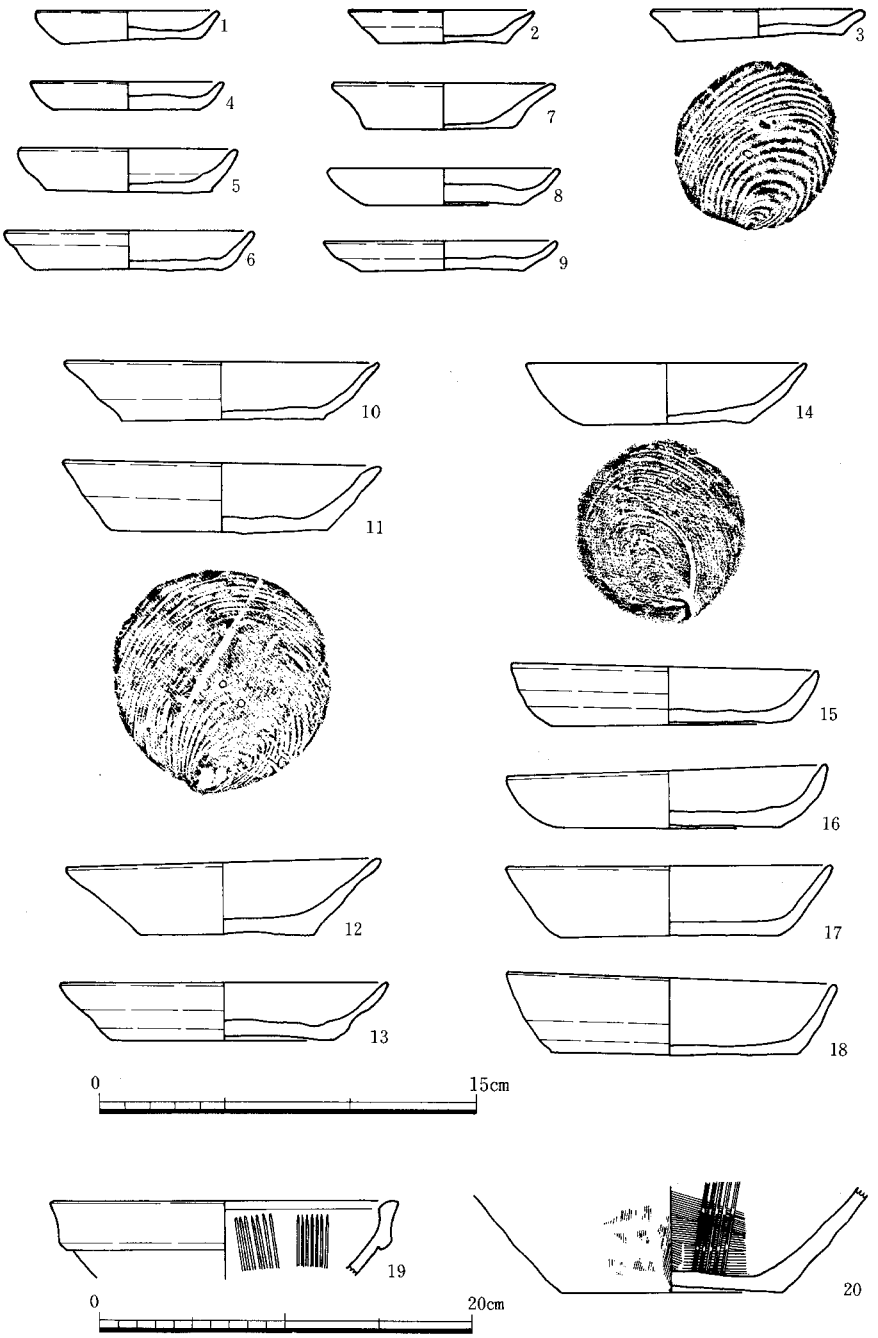


Fig.21　ＳＤ01出土土器実測図（縮尺1/3, 1/4）

擂坏（19～20）　19の口径は18.2cm，底径は不明。内・外面とも横ナデを施し、条線は７本を単位として内面に刻む。中国産と思われる。20の口径は不明で、底径は11.9cm。体部外面は縦方向の刷毛目調整後にナデを施し、内面は横方向の刷毛目調整後に５本単位の条線を刻む。底部内面はナデ調整を施す。

青磁　　皿・碗

皿（167）　見込みは櫛描き文を施し、底部外面は露胎である。同安窯産と思われる。

碗（169・171・172）　169・171の口縁は緩やかに立ち上がる。全面に厚く施釉するが、畳付と高台内面には施さない。172の体部外面には鎬入りの蓮弁を刻む。

この他に粘双魚文を見込みに有するものが出土している。碗の産地としては、龍泉窯産が多く、同安窯産は少ない。

壺　高台部分が出土した。高台口径6.0cm。胎土は灰白色。緑灰色の釉を厚く施すが、畳付部分は削られ露胎となる。

盤　口縁部分が１点出土した。胎土は灰白色で、緑灰色の釉である。口縁は「く」の字に外反し、端部は内弯する。

白磁　　皿・碗・四耳壺

皿（166）　全面に緑灰色の釉を施し、底部外面は釉を拭き取っている。166の他に高台付皿が出土している。高台口径4.6cmで、口径は不明である。胎土は緑を帯びた灰白色である。

碗（170）　胎土は粗く、灰白色を呈する。釉は内面と体部外面下半部まで施す。高台の削りは浅い。

白磁では以上の他に、四耳壺が出土している。

高麗青磁　　皿

皿　高台付皿は２個体出土しているが、全形のわかるものは無い。胎土は灰白色、釉は青色を帯びた緑灰色を呈する。体部内面下位には、２条の白象嵌の区画線があり、細い貫入がある。

粉青沙器　　皿

皿　口縁部の破片が１点出土する。胎土は灰白色である。口縁は緩やかに外反し、端部は丸味を有する。

SD03出土の土器・陶磁器　（Fig.22・23，PL.23・24，tab.４・５）

土師器　　皿・坏・甕

皿（21～35）　器高の低い口径8.4～9.5cm，底径6.9～8.2cm，器高1.2～1.4cmの１群（21～25）と，器形的には坏で口径8.7～9.8cm，底径6.0～7.6cm，器高1.7～2.3cmの１群（26～35）とに分かれる。底部切り離しは全て糸切りである。底部外面に板目痕が残るものが多い。22・32・34は、明らかに胎土が他の皿と異なり、生地自体が粗い。

坏（36～49）　口径11.4～13.1cm，底径7.8～9.7cm，器高2.4～3.2cmである。底部切り離しは

全て糸切りによる。底部内面にナデを施し、底部外面に板目痕を残す。37・38は、他の坏と胎土が明らかに異なる。37は赤褐色砂粒を多く含み、38は生地自体の目が粗い。

甕（50）　口縁の一部が出土した。口縁端部は、「く」の字状に外へ折れる。体部外面は縦方向の刷毛目調整の後にナデを施し、内面は横ナデを施す。

陶器　甕

甕（51）　胎土は、1㎜前後の砂粒を多く含む。焼成は不良で焼き締まっていない。須恵器的な形態ではあるが、瓦質土器の様相を呈する。口縁部は大きく外反し、端部は下方へつまみ出す。外面は平行叩目が残り、内面はナデ痕跡。東播磨地域で作られたものであろう。

磁器

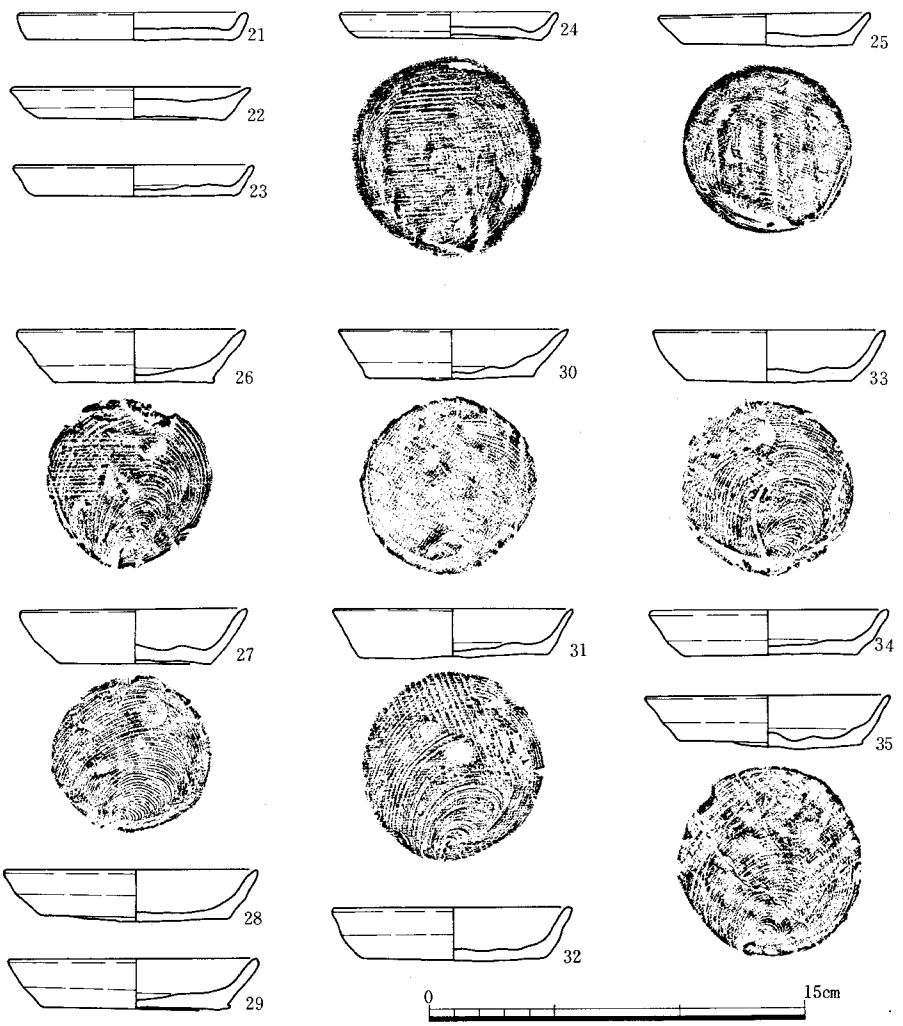


Fig.22　ＳＤ03出土土器実測図（縮尺1/3）

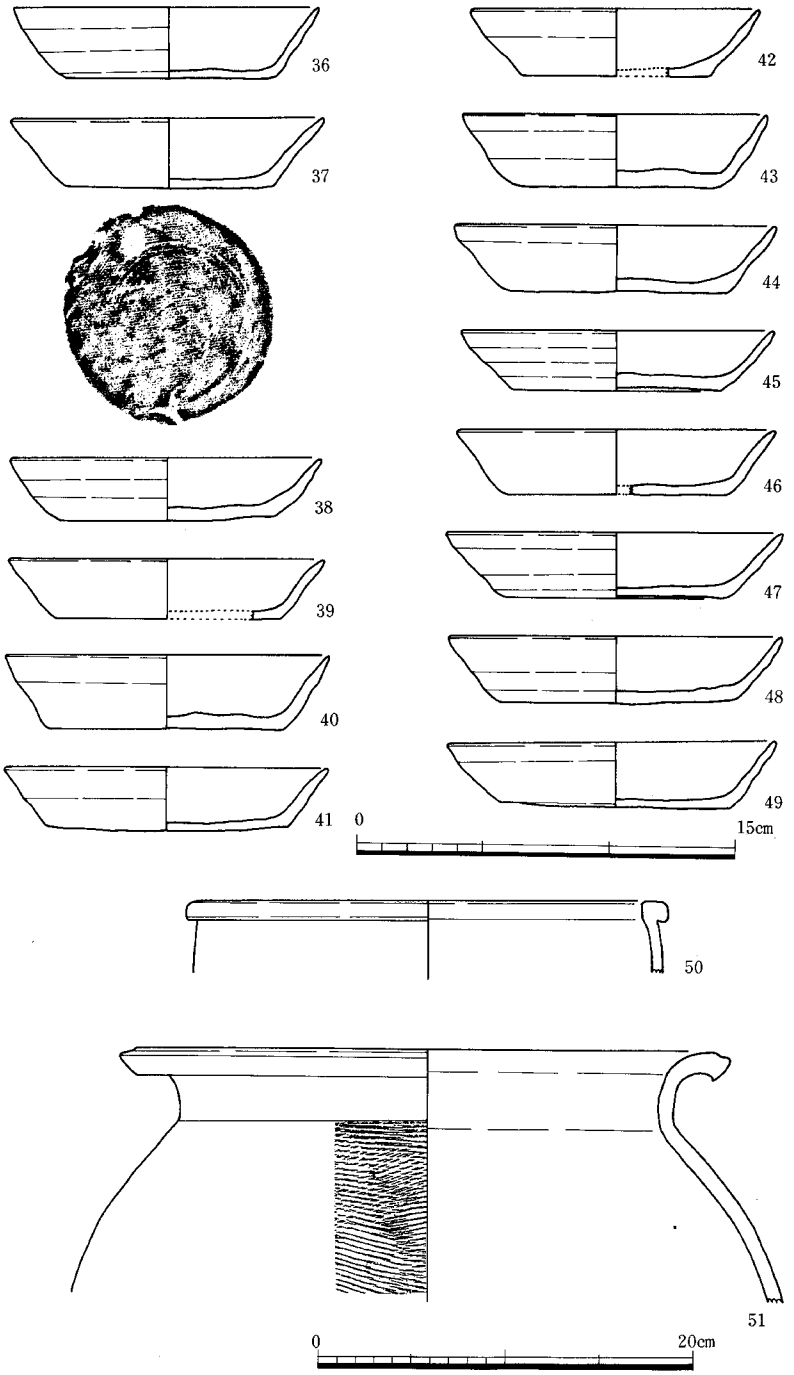


Fig.23　ＳＤ03出土土器実測図（縮尺 1/3, 1/4）

青磁片が２点，白磁片が１点出土している。

SD04出土の土器・陶磁器　(Fig.24～26, PL.25～27, tab.５～８)

土師器　皿・坏・擂鉢・鍋・釜

皿（52～79）　明確な基準を持って分類したのではないが、口径・器高・口縁部の違いを一つの基準として、A（52～54），B（55～56・58～62・64・77），C（57・63・65・67・69～71・74～75・78），D（68・72～73・76～77）の４つに分類できよう。Aは口径6.0～7.5cm，底径3.9～5.4cm，器高1.4～1.9cmである。53は口縁端部に炭化物が付着する。Bは口径7.9～9.3cm，底径6.0～7.7cm，器高1.2～1.5cmである。Cは口径8.3～9.8cm，底径5.3～7.6cm，器高1.5～2.2cmである。Dは口径9.2～10.1cm，底径6.5～7.5cm，器高1.7～2.3cmである。底部切り離しは、全て糸切りである。56・63・66の胎土は、他の皿の胎土と異なり金雲母を多く含む。底部外面に板目痕が残る。

坏（80～98）　口径11.0～14.2cm，底径6.5～10.3cm，器高2.0～3.2cmである。底部切り離しは全て糸切りである。81は器高が高く口径に比して底径が小さい。84・91は赤褐色土，88・94は金雲母をそれぞれ胎土に多く含み、他の坏の胎土と異なる。88・94の胎土は皿56・63の胎土とよく似ている。以上の坏の他に、高台付坏が２個体出土しているが全形は不明である。

擂鉢　２個体の擂鉢が出土しているが、全形のわかるものは無い。胎土は0.5～1.0mmの砂粒を僅かに含み、焼成は硬質である。体部内面は横方向の刷毛目調整後に５本単位の条線を刻む。体部外面にはナデを施す。

鍋（99・100）　口径25.9～29.9cmである。体部内面は横方向の刷毛目調整、外面は刷毛目調整後にナデを施す。口縁は「く」の字状に外反し、99はその度合が大きい。口縁端部で99は面を有し、100は丸味を有す。

以上の他に、口縁端部が玉縁状のものが出土している。胎土は0.5～1.0mmの砂粒を僅かに含み、焼成は硬質である。体部内面は横方向の刷毛目調整、外面は縦方向の刷毛目調整後にナデを施す。

釜　２個体出度しているが、全形は不明である。２つとも凸帯状の鍔部分である。鍔の幅は２cm前後で、その下面には煤が付着している。

瓦質土器　擂鉢・鉢

擂鉢　胎土は0.5～1.0mmの砂粒を僅かに含み、焼成は硬質である。体部内面は横方向の刷毛目調整後に３～６本単位の条線を刻む。外面は縦方向の刷毛目調整後にナデを施す。

鉢（101）　口縁部は直立し、外面に渦文・蛇行文を押印した後、渦文の上に珠文を押印する。

陶器　梅瓶・角坏・擂鉢

瓶子　いわゆる古瀬戸の梅瓶である。肩部の小破片が出土した。この小破片は、灰褐色砂質土層上面で遺構を検出した際に出土した瓶子（165, Fig.32, PL.32）と接合した。胎土は精選さ

れ、褐色を帯びた灰白色である。肩部外面にはヘラ先沈線が施され、11弁の菊花文を押印する。古瀬戸の梅瓶は、ＳＤ04の東に位置する柱穴（ＳＰ116）と、ＳＤ11からも出土している。

角杯（173）型作りの坏である。胎土は暗青灰色を呈し、暗緑灰色の釉が器面全体を覆う。口形は８角形と思われるが、７角形の可能性もある。口縁は平担な底面から直線状にやや外反して立つ。底面も角形を呈し、施文は認められない。底部外面にヘラ削りを施す。器面全体に細かい貫入がある。朝鮮半島で作られたものであろう。

擂鉢　２個体出土している。胎土は精選されており、僅かに0.5～1.0㎜の砂粒を含む。焼成は、硬質で焼き締まり、赤褐色を呈している。体部外面は横ナデ、内面は横ナデ調整後に10本単位の条線を刻む。

青磁　　碗

碗（174・175）　174の胎土は良精で灰白色である。釉は緑濁色を呈し、全面に厚く施す。畳付及び高台内面は露胎である。見込みには花文を刻む。龍泉窯であろう。175の胎土は灰褐色、釉は青色を帯びた緑灰色である。見込みには草花文を押印する。作りとしては粗雑である。高台内面に墨が厚く付着しており、転用が考えられる。

白磁　　碗

碗　胎土は灰白色，釉は灰白色を呈する。体部下半及び高台部は露胎。高台内面の削りは著しく浅い。見込みには削りの圏線を施す。

SD06出土の土器（Fig.27，PL.28，tab.８）

土師器　　皿・坏・鍋

皿（102～103）　器高が底い102と坏の小型的な103とに分かれる。102・103とも底部切り離しは糸切りによる。102の底部外面には板目圧痕が残る。胎土は２つとも赤褐色砂粒を含む。

坏（104）　口径12.4cm，底径8.9cm，器高2.4cmである。底部切り離しは糸切りによる。内面下半は赤褐色を呈しており、坏に液体を入れていたものと思われる。

鍋（105）　胎土は0.5～1.0㎜の砂粒を多く含む。口縁は緩やかに「く」の字状に外反し、端部は丸味をもつ。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整を施す。外面には口縁端部まで煤が付着している。

SD08出土の土器・磁器　（Fig.27，PL.28，tab.８）

土師器　　皿・坏

皿（106～111）　106～107と108～111とに分類できよう。106の胎土は金雲母を多く含む。107の口縁端部には炭化物が付着している。底部切り離しは全て糸切りである。

坏（112～114）　口径10.8～12.4cm，底径7.5～8.1cm，器高2.2～2.6cmである。底部切り離しは全て糸切りによる。112の胎土は、赤褐色を呈し粗い。113・114の胎土は赤褐色砂粒を多く含み、調査で出土した器形の類似する坏の胎土と異なる。

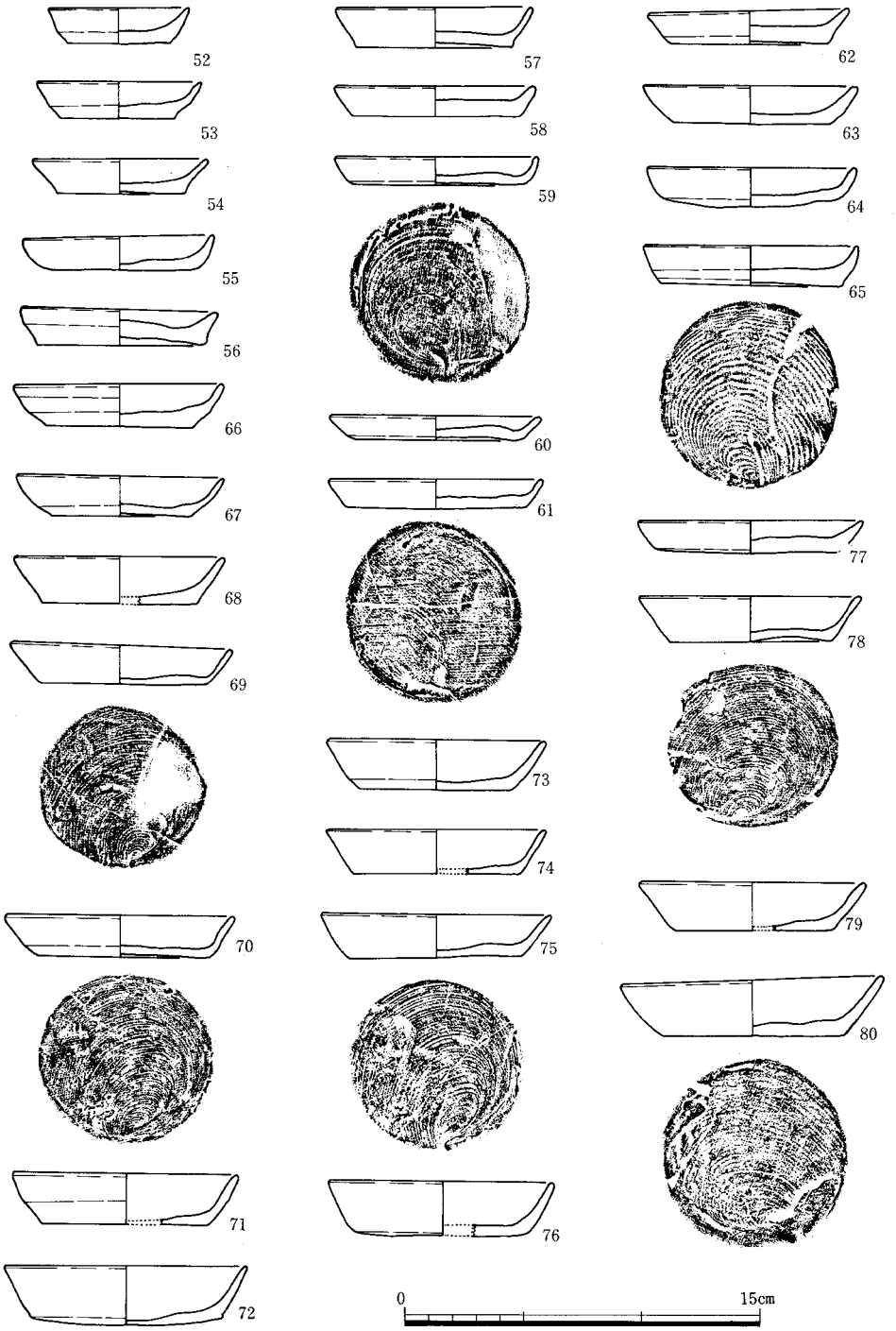


Fig. 24　ＳＤ04出土土器実測図（縮尺1/3）

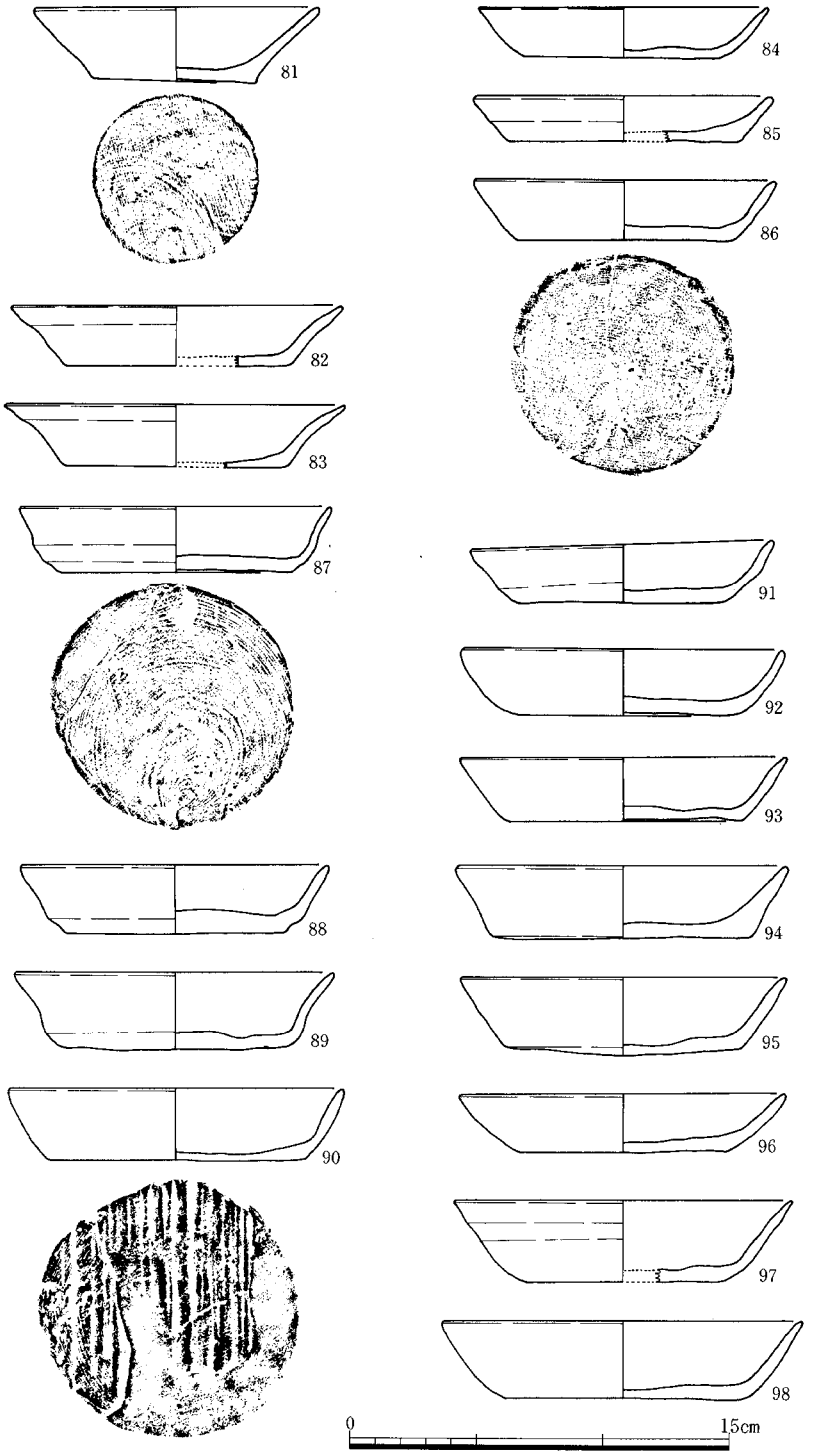


Fig.25　ＳＤ04出土土器実測図（縮尺1/3）

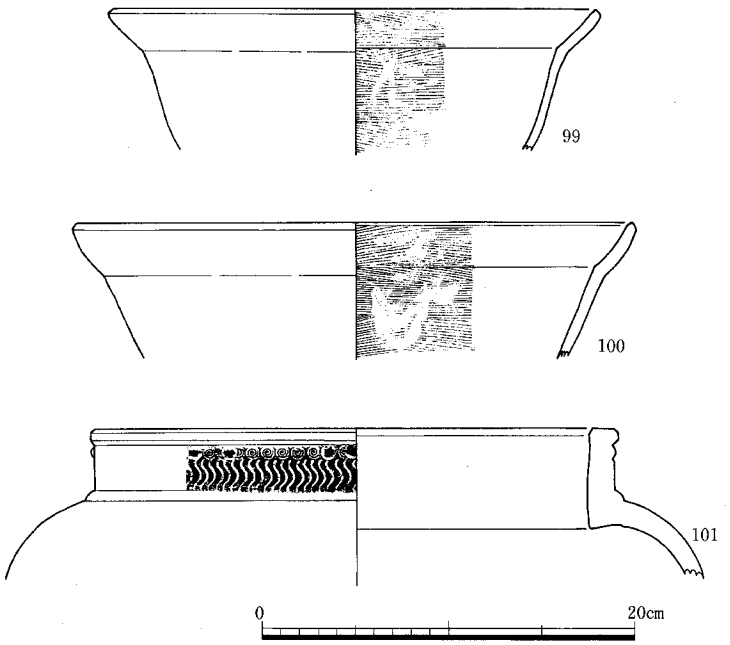


Fig.26　ＳＤ04出土土器実測図（縮尺1/4）

青磁　　碗

碗　胎土は灰白色を呈し、釉は青色を帯びた緑灰色である。口縁部外面には雷文が刻されている。

SD11出土の土器・陶磁器

土師器　　皿・坏・擂鉢・鍋

皿　15個体ほど出土しているが全形のわかるものは無い。胎土は良精のものと、0.5～1.0㎜の砂粒を多く含むものとがある。焼成はやや軟質である。色調は赤褐色～暗茶褐色を呈している。底部切り離しは全て糸切りによる。

坏　10個体ほど出土しているが全形のわかるものは無い。胎土・色調・焼成は皿と同じ様相を呈している。

擂鉢　胎土は良精で灰褐色を呈している。体部外面はナデ、内面は横方向の刷毛目調整を施し５本単位の条線を刻む。

鍋　小片で全形を知ることはできない。胎土は0.5～0.1㎜の砂粒を多く含む。体部内面は横方向の刷毛目調整を施す。

瓦質土器　　擂鉢

擂鉢　胎土は0.5～1.0㎜の砂粒を僅かに含む。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整を施し４本単位の条線を刻む。

陶器　瓶子

瓶子　いわゆる古瀬戸の梅瓶である。体部の小片が出土している。胎土・釉調・文様からＳＤ04出土の瓶子と同一個体と思われる。

白磁　碗

碗　口縁が玉縁のものと、口縁端部がいわゆる口禿げのものとが出土している。前者の釉は黄

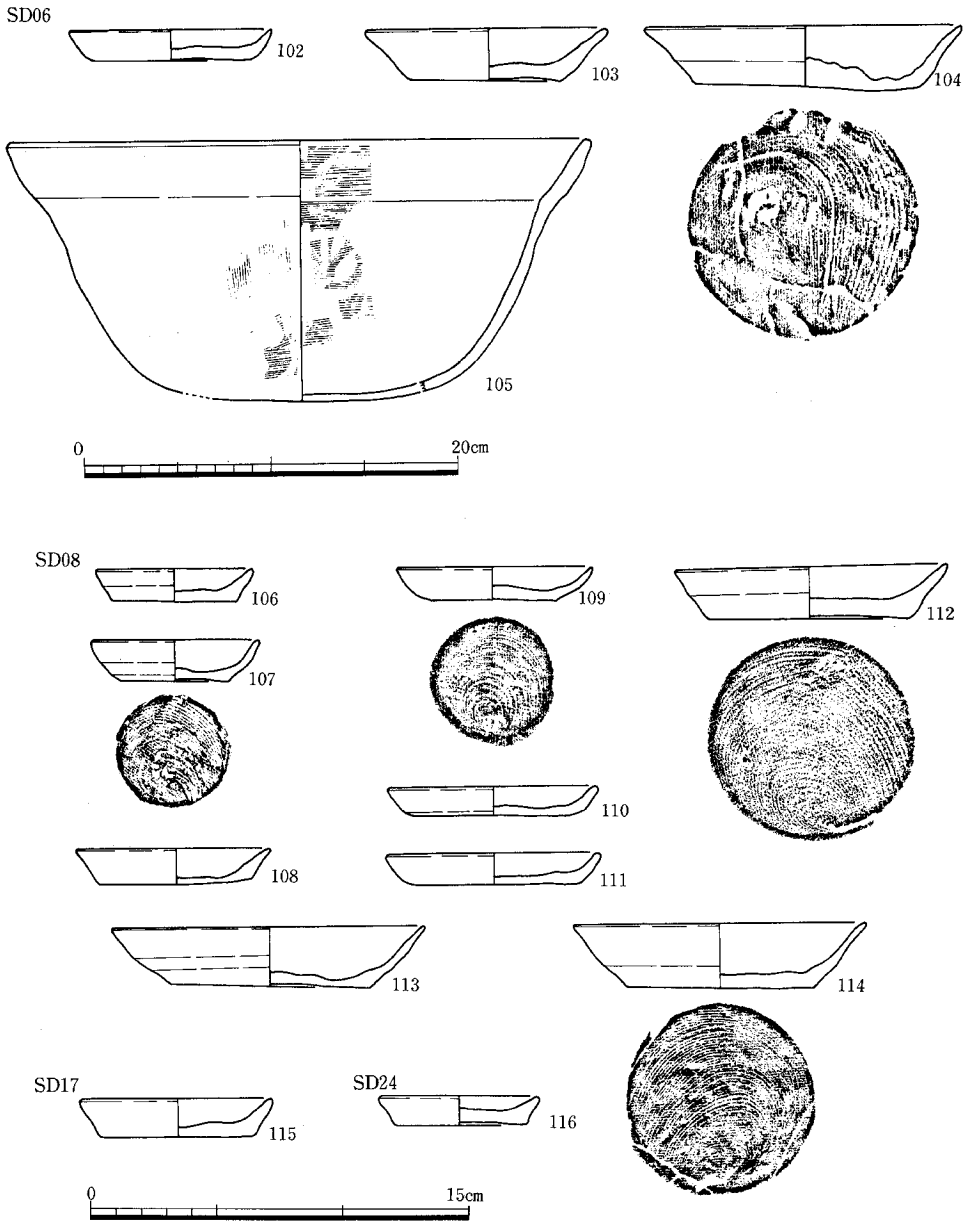


Fig.27　ＳＤ06･08･17･24出土土器実測図（縮尺 1/3, 1/4）

灰色を帯ており、後者は青灰色を帯ている。

SD 17 出土の土器・陶磁器 (Fig. 27, PL. 28, tab. 8)

土師器　皿・擂鉢

皿 (115)　口径7.9cm, 底経6.2cm, 器高1.5cmである。胎土は粗い。底部切り離しは糸切りによる。底部外面には板状圧痕が残る。

擂鉢　3個体出土しているが全形を知ることはできない。胎土は良精のものと、0.5～1.0mmの砂粒を多く含むものとがある。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整後に4本～7本単位の条線を刻む。外面に煤が付着しているものがあり、擂鉢を鍋としても用いていたと思われる。

陶器　擂鉢

擂鉢　底部の破片が1点出土している。胎土は1.0mm前後の砂粒を多く含む。内面には3本以上を単位とする条線を刻む。

青磁　碗

碗　10点ほどの破片が出土している。緑濁色・緑灰色・青灰色の釉を用いている。

白磁　皿

皿　平底皿破片が出土している。胎土は白色である。口縁端部は上へ少しつまみ出す。

SD 24 出土の土器 (Fig. 27, PL. 28, tab. 8)

土師器　皿・坏・擂鉢・鍋

皿 (116)　口径6.4cm, 底径5.3cm, 器高1.1cmである。底部切り離しは糸切りである。

坏　数点の破片が出土しているが、全形を知ることができる資料は無い。

擂鉢　4個体出土しているが全形のわかるものは無い。胎土は1.0～2.0mmの砂粒を多く含むものと、良精のものとがある。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は不明だが4本～6本単位の条線を刻む。外面に煤が付着しているものがある。

鍋　2個体出土しているが口縁部のみである。胎土は粗砂粒を多く含み生地が粗いものと、砂粒が少ないものとがある。2個とも赤褐色を呈している。体部外面には縦方向の刷毛目調整を施し煤が、付着する。内面は横方向の刷毛目調整を施している。口縁端部は直線的で、僅かに外反し、内面に稜線を持つ。

SD 28 出土の土器 (Fig. 28, PL. 29, tab. 8)

弥生土器　高坏

高坏 (117)　脚部が1個体出土した。坏部は欠損し全形を知ることはできない。外面は、刷毛目調整後に縦方向のヘラ磨きを施している。内面は刷毛目調整を施している。3ヶ所に直径5.5mmの穿孔がある。

土師器　甕

甕（118・119） 118の体部は球形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反して端部を上下につまみ出す。外面は刷毛目調整、内面は頸部までヘラ削りを施す。口縁部は横ナデを施す。外面には煤が全面に付着する。119の胎土は1.0㎜～2.0の砂粒を多く含む。内外両面とも調整は刷毛目調整である。以上の他に5個体の甕が出土しているが、全て底部は丸味を有する。外面は刷毛目調整を施し、内面はヘラ削りのものと刷毛目調整のものとがある。

SD31出土の土器・陶器 （Fig.30・32, PL.29・32, tab. 9・11）

土師器　坏・擂鉢・鍋

坏（120） 口径11.8cm，底径8.5cm，器高2.5cmである。胎土に赤褐色砂粒を含む。底部切り離しは糸切りによる。

擂鉢（122） 胎土は精選されており灰褐色を呈する。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は刷毛目調整後にナデを施し、7本を単位とする条線を刻む

鍋（123・124） 口径は直線的で僅かに外反し、内面には稜をもつ。体部外面は縦方向の刷毛目調整後にナデを施し、内面は横方向の刷毛目調整を施している。

黒色土器　坏

坏（121） 内面のみを黒色に燻した、いわゆる黒色土器の坏である。体部外面中位に明確な稜をもつ。稜から下部はナデ、上部は横ナデを施している。

陶器　皿

皿（176）口径9.3cm，高台口径4.4cm，器高2.9cmである。胎土は0.5～1.0㎜の砂粒を多く含み、灰褐色を呈している。釉は灰色である。底部内面と口縁との境には稜を有する。底部内面と高台畳付の4ヶ所に、いわゆる砂目が残る。朝鮮半島で作られたものであろう。

SE02出土の土器・磁器 （Fig.30, tab. 9）

土師器　坏

坏（125） 口径11.2cm，底径8.0cm，器高2.3cmである。底部切り離しは糸切りによる。

白磁　碗

碗 いわゆる口禿げの碗である。胎土は灰白色、釉は灰色を呈している。口縁は外反し、端部はさらに外反する。

SE07出土の土器

土師器　皿・坏

皿と坏が出土している。胎土は0.5～1.0㎜の砂粒を多く含む。底部切り離しは糸切りによる。坏の底部外面は板状圧痕が残る。

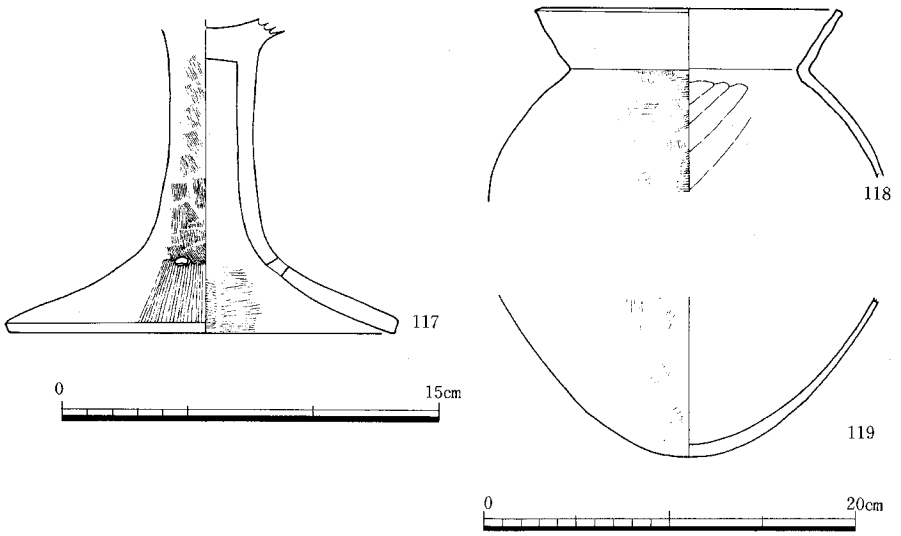


Fig.28　ＳＤ28出土土器実測図（縮尺1/3，1/4）

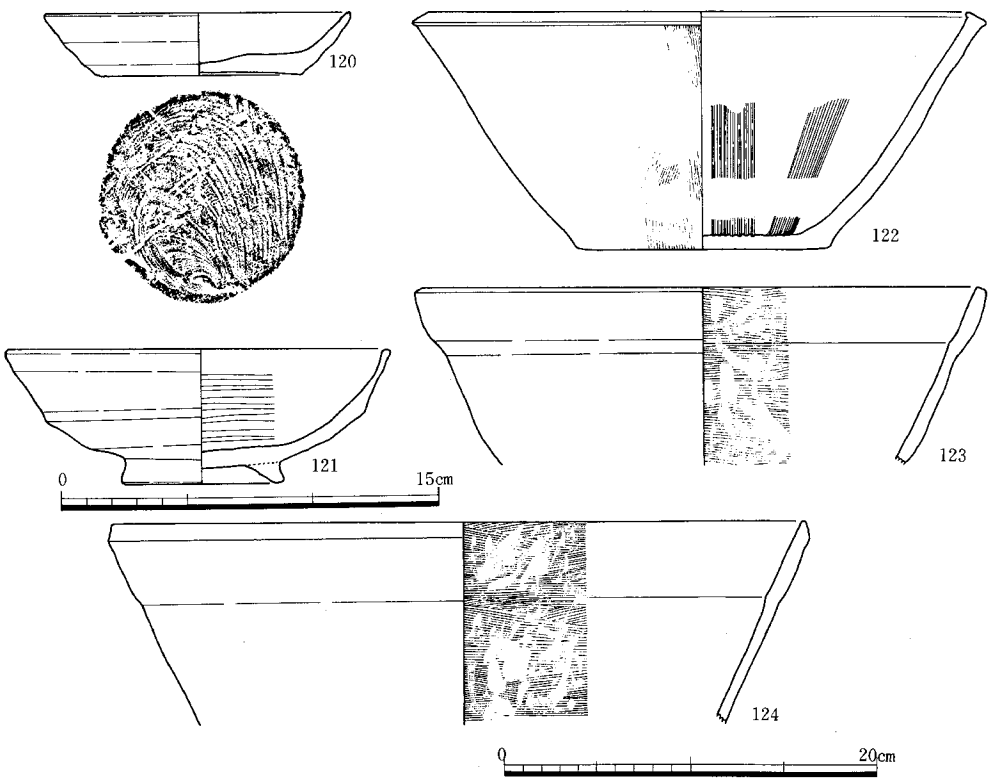


Fig.29　ＳＤ31出土土器実測図（縮尺1/3，1/4）

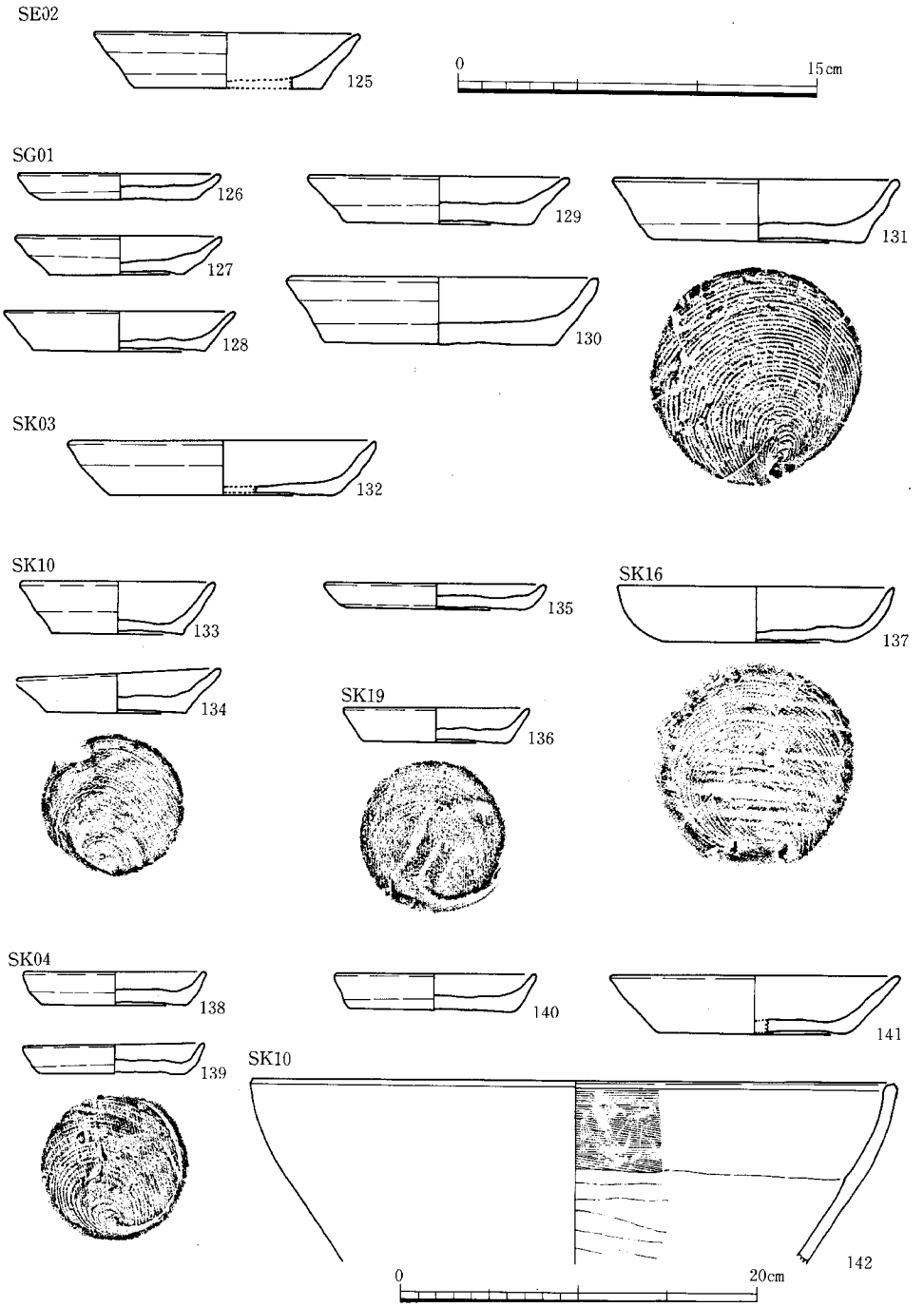


Fig.30　ＳＥ02, ＳＧ01, ＳＫ03･04･10･16･19出土土器実測図（縮尺1/3, 1/4）

SG 01 出土の土器・陶磁器 (Fig. 30・32, PL. 29・32, tab. 9・11)

土師器　皿・坏・擂鉢

皿 (126～128)　126は器高が底く、口縁の立ち上りは短い。128は器形的に坏と言える。127は126と128の中間的な皿である。126には底部外面に板目圧痕がある。

坏 (129～131)　129は胎土生地が粗く茶灰色を呈している。底部外面には、糸切り痕・板状圧痕が残る。色調を除く器形・胎土・調整技法において、ＳＤ08出土の坏 (112) と同じくする。高台付の坏も出土しているが、全形のわかるものは無い。

擂鉢　１個体出土している。胎土は0.5～1.0㎜の砂粒を僅かに含む。体部外面はナデ、内面は横方向の刷毛目調整後に４本を単位とする条線を刻む。

皿 (177)　古唐津の鉄絵皿である。胎土は粗く、茶灰色を呈している。釉は緑色を帯びた灰濁色を呈し、体部下位まで施す。口縁端部は「Ｓ」字状に屈曲する。

白磁　碗

碗　口縁端部に玉縁を有し、Ⅲ－２類に分類される。胎土は灰白色、釉は淡い緑色を帯びた灰白色である。器面は細かく貫入している。

染付

３個体出土しているが、全体のわかるものは無い。胎土は灰白色、釉は乳白色を呈する。コバルトによる唐草文が描かれている。

土壙出土の土器・陶器 (Fig. 30・32, PL. 30・32, tab. 9・10・11)

土師器　皿・坏・鉢

皿 (133～136・138～140)　口径7.5～8.6cm, 底径5.6～7.3cm, 器高1.1～2.4cmである。底部切り離しは全て糸切り。ＳＤ01を初め溝より出土した皿と胎土・色調・焼成・調整技法を同じくする。

坏 (132・137・141)　口径11.8～12.7cm, 底径7.8～9.3cm, 器高2.4～2.6cmである。底部外面には糸切り痕が残る。

鉢 (142)　ＳＫ10から出土している。口縁は端部近くでやや内弯する。体部内面下半は横方向のヘラ削り、上半は横方向の刷毛目調整を施している。外面の調整は、器面が剥離して不明である。

陶器　皿

皿 (178)　口径9.7cm, 高台口径4.4cm, 器高2.9cmである。胎土には0.5～1.0㎜の砂粒を多く含む。釉は灰色で器面全体に厚く施されている。器面は細かく貫入している。口縁は緩やかに立ち上がり、端部は丸味を有する。底部内面と高台畳付には、いわゆる砂目が４ヶ所に残る。朝鮮半島でつくられたものであろう。

柱穴出土の土器・陶磁器 (Fig. 31, PL. 30, tab. 10)

土師器　皿・坏・鍋

Ⅴ区調査区西北に位置する柱穴群を中心に出土している。皿・坏は、ＳＤ01・ＳＤ04等から出土した皿・坏と器形・胎土・焼成・調整を同じくする。鍋の破片も数個体出土している。

陶器　瓶子

瓶子　胴部の破片がⅤ区調査区北西に集中する柱穴、ＳＰ116から出土している。胎土・色調・釉調・調整技法ともＳＤ04出土の瓶子と同じくする。外面には稲穂が刻されている。ＳＤ04出土資料と接合しなかったが、同一個体の可能性は大きい。

黒釉陶器　壺

壺　底部の破片がⅤ区調査区北西ＳＰ104から出土している。胎土は精選されており、褐色を

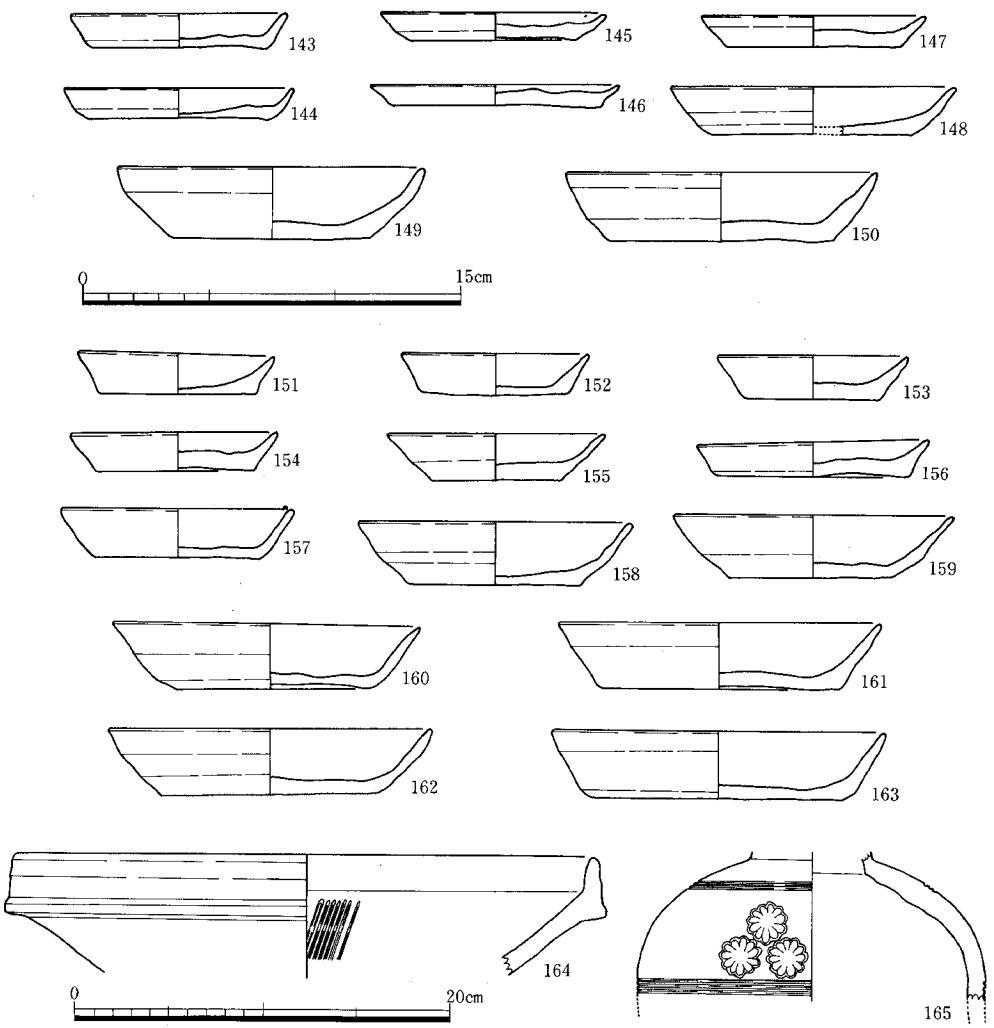


Fig.31　灰褐色砂質土上面出土土器・陶器実測図（縮尺1/3，1/4）

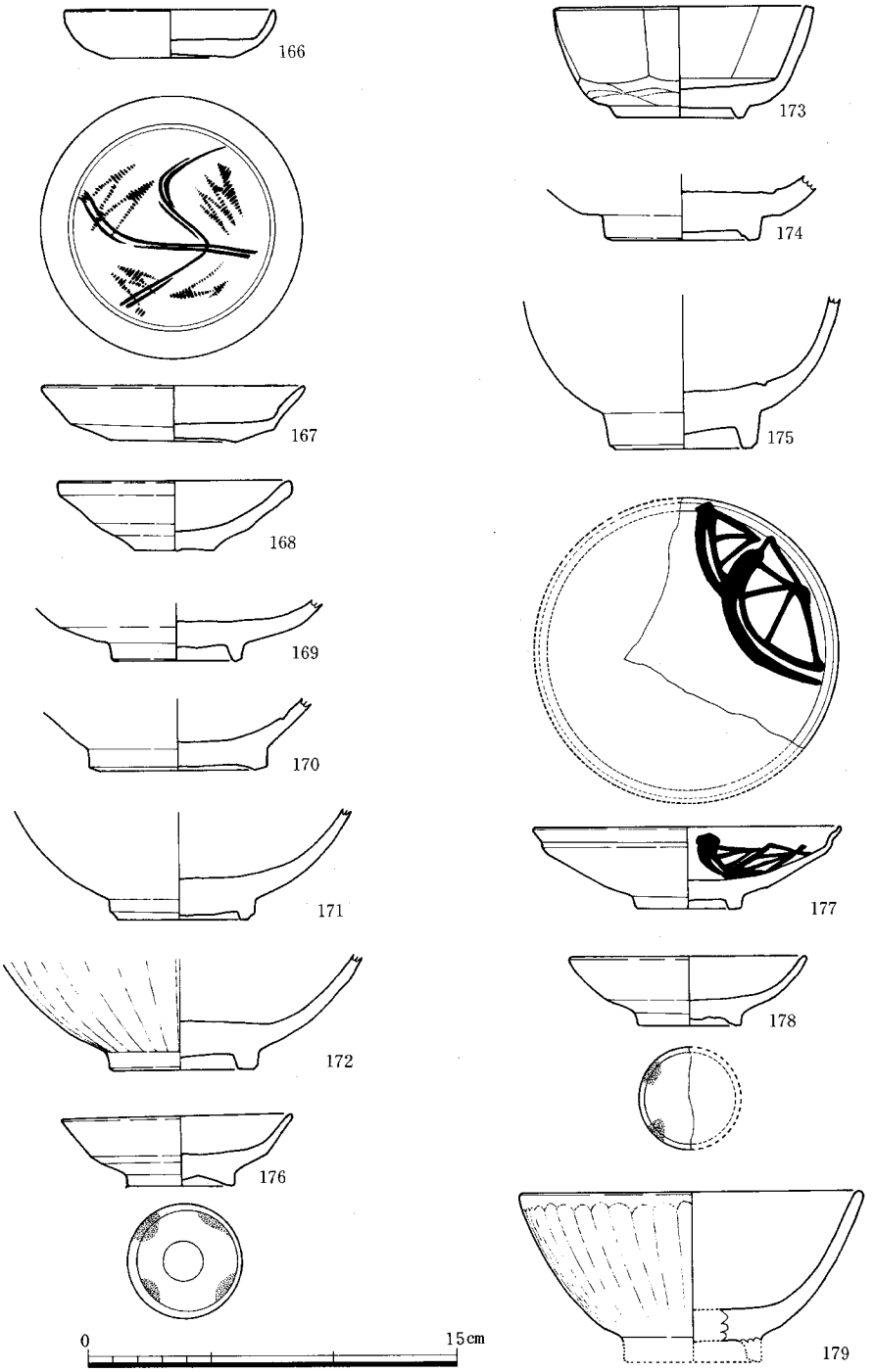


Fig.32　陶器・磁器実測図（縮尺1/3）

帯びた茶灰色を呈している。

青磁　碗

碗　越州窯青磁の碗である。Ⅴ区調査区北西ＳＰ104から出土した。胎土は灰白色、釉は緑濁色を呈する。釉は全面に施し、畳付部分を削り取る。底面と口縁との境には明確な稜を有する。

白磁　碗

碗　口縁に玉縁を有するⅣ類である。胎土は灰白色、釉は淡い緑灰色を呈する。

灰褐色砂質土上面出土の土器・陶器　(Fig.30, PL.31, tab. 9・11)

土師器　皿・坏

皿（151～157）　口径7.7～9.2cm，底径5.0～7.4cm，器高1.5～2.4cmである。底部外面には糸切り痕・板目圧痕が残る。

坏（158～163）　口径11.5～13.1cm，底径6.8～10.0cm，器高2.4～３．１cmである。底部切り離しは全て糸切りによる。

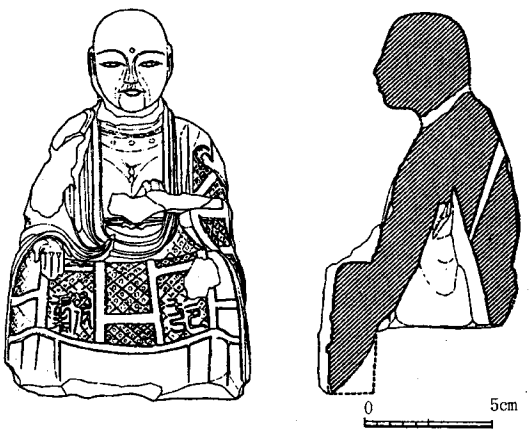


Fig.33 太宰府史跡第67次調査出土土製仏像(縮尺1/3)

陶器　擂鉢・瓶子

鉢　(164)　備前窯のものである。口縁端部は丸味を有する。調整は内外面とも横ナデである。内面の条線は７本以上を単位とする。

瓶子（165）　165は肩部の破片で、ＳＤ04出土片と接合した。

ｂ．土製仏像，瓦，土錘・石錘，金属製品，銅銭，石製品

土製仏像（Fig.33, PL.27）　ＳＤ04から脚部と腰部の一部とが出土した。地蔵菩薩像であろう。仏像は型作りで、瓦質的である。胎土

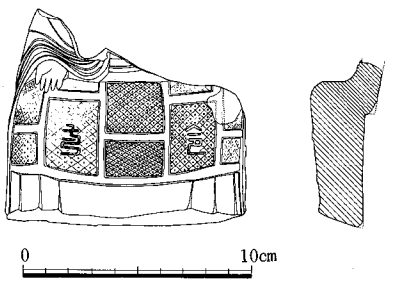


Fig. 34　SD04出土土製仏像実測図(1/3)

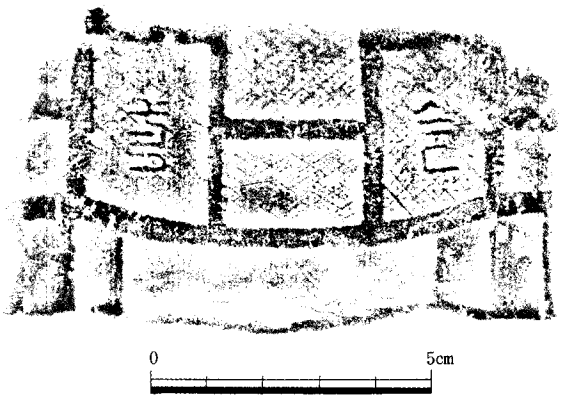


Fig. 35 SD04出土土製仏像拓影

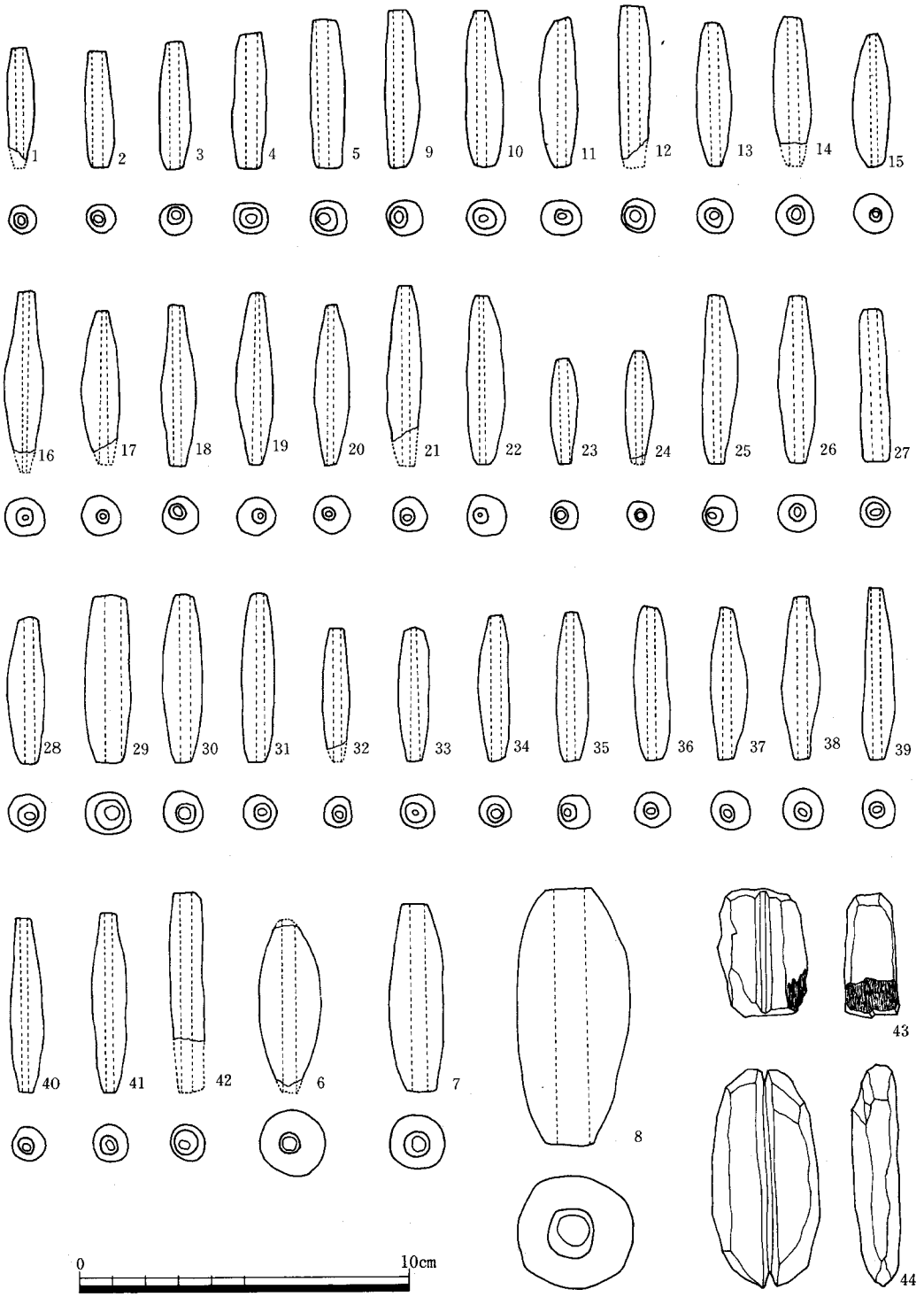


Fig.36 土錘・石錘実測図（縮尺1/2）

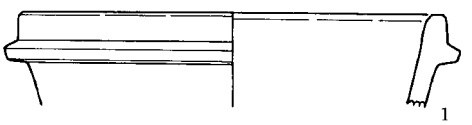
は0.5㎜～1.0㎜の砂粒を僅かに含む。脚部は黒灰色、その他は暗灰色を呈している。右手は、手の平を天に向けて、右膝の上に置いている。像の姿勢、着物の着装等は、大宰府観世音寺子院の調査で出土した土製仏像（Fig.33）と類以するが、像が一回り大きく、衣などの表現が写実的で、大宰府出土例より古い様式を程している。膝から前に垂らした袈裟には凸状の文字が認められる。文字は型に刻まれてる。「令(ママ)圍」と刻まれた文字は、「令弍」と判読できよう。

瓦　軒丸瓦の破片がＳＤ01から出土している。軒丸瓦は複弁蓮華文軒丸瓦で、縁に凸鋸歯文が配置されている。丸瓦は池・溝から２点出土している。凸面は格子叩き目を残すものと、叩目をすり消すものとがある。凹面は共に布目を残す。側面には分割破面が残り、面取りなどの調査は行われていない。平瓦は池・溝から数点出土している。凸面には、「警固」の文字叩き目が残るもの、格子叩き目が残るもの、叩き目をすり消している。瓦は周辺からの混入と思われる。瓦は奈良時代に比定される。

土錘・石錘　（Fig.36, PL.33・34, tab.12）　土錘は大半が溝から出土し、一部は柱穴埋土中より出土している。６～８を除けば、重量は2.0～8.8ｇと非常に軽い。全て土師質であるが、硬質のものと軟質のものとがある。石錘は２個体出土した。石材は滑石である。

金属製品（１～３，Fig.37, PL.34）　１の耳環はⅣ区調査区の灰褐色砂層から出土した。外径2.3cm、金鍍金を施している。腐食が著しい。２はⅤ区調査区西柱穴群のＳＰ26から出土した飾金具である。飾部は楕円形で小さい。釘部は断面形が長方形を呈している。３もⅤ区調査区西柱穴群のＳＰ36から出土した飾金具である。飾部は菱形で、釘部断面形は長方形を呈している。金具全体の腐食が著しい。

銅銭（１～５，Fig.38, PL.34）　溝，井戸，柱穴



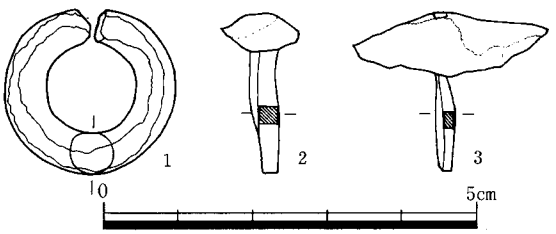


Fig.37　金属製品実測図（縮尺1/1）

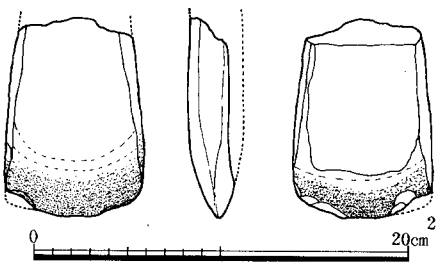
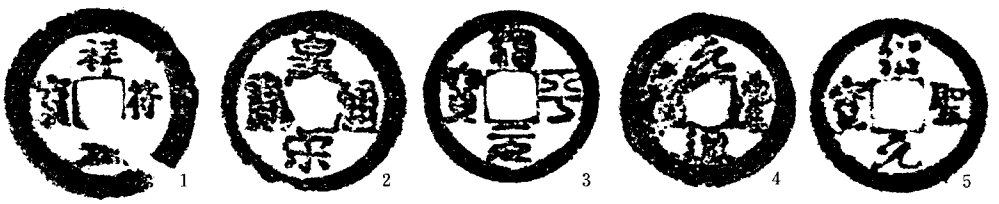


Fig.39　石鍋・石斧実測図（縮尺1/4）



祥符元寳　皇宋通寳　治平元寳　元豊通寳　紹聖元寳

Fig.38　銅銭拓影

から５枚出土した。１．祥符元寶（ＳＤ04），２．皇宋通寶（ＳＰ26），３．治平元寶（ＳＥ06），４．元豊通寶（ＳＰ19），５．紹聖元寶（ＳＰ27）である。

石製品（１～２，Fig.39）１は滑石を石材とする石鍋で、口径22.6cmを呈する。同様の石鍋は調査区から数個体出土している。出土遺構は、ＳＤ01・04，ＳＰ13である。石鍋の器壁の厚さは、0.9～1.1cmであるが、ＳＤ01から出土した石鍋は器厚2.4cmを呈し、他と異なる。２はＳＧ01から出土した磨製石斧で、基部は欠損しており全形は不明である。混入したものであろう。

Ｃ 木器

SD01出土の木製品（Fig.40，PL.42）

編錘（１・２）両端面には、丸太を蛇状のもので粗く切断した痕跡を残す。中央部は中央が深くなる「Ｖ」の字形状に打ち削り、器形は括状を呈している。端面近くは丸太面を残し、部分的には樹皮が残っている。１は全長13.5cm，直径4.2cmである。中央括部の断面形は円形で、直径2.6cmを測る。削りは粗く、器面に削面が明瞭に残る。２は全長17.4cm，直径5.2cm、中央括部の断面形は円形で直径2.1cmを測る。削り面を部分的に残すが、大半は摩滅している。本書でこの木製品を編錘とした根拠は民俗例[註3]にあるが、網などの浮きの可能性もある。

SD04出土の木製品

椀　高台付の漆塗り椀である。底部の一部が出土したが、全形は不明である。高台形は復原すると９cm～10cmになる。内外面には黒漆が塗られている。内面の底部と口縁との境は稜をもつ。

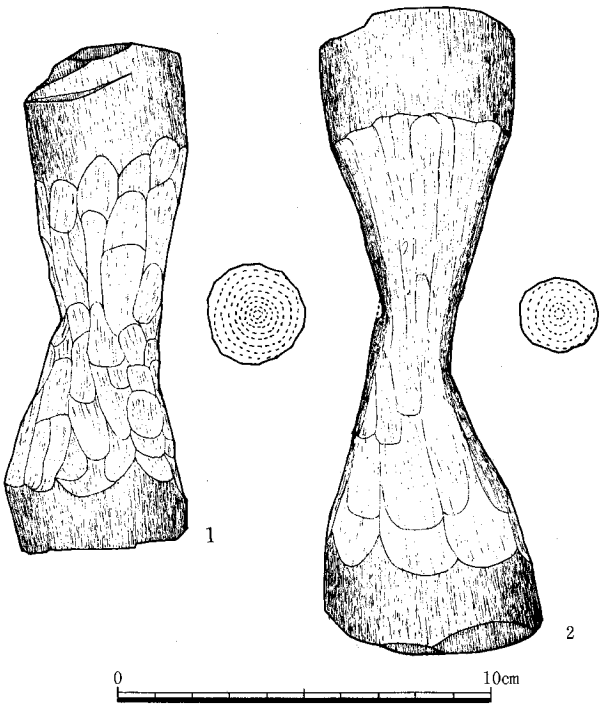


Fig.40　編錘実測図（縮尺1/2）

SD28出土の木製品（Fig.41～44，PL.35～38）

鍬（３～５）ＳＤ28から鍬は５点出土しており、全てニ又鍬である。３は全長42.2cm，全巾16.3cm，刃巾6.4cm，最大厚1.4cmを測る。刃部外縁は弧を描き、内縁は直線的である。柄孔は長5.5cm，巾3.3cmを測る。器面には打ち削った痕跡が明瞭に残る。木取りは征目取りである。４は柄孔を含む頭部を欠く。全長48.8cm＋ａ・全巾13.3cm，刃長40.5cm，刃巾5.0cm，最大厚1.4cmを測る。刃部側縁は内外縁とも直線的である。刃部内縁のみ刃を有し、外縁は角張っている。器面を打ち削った痕跡が片面に

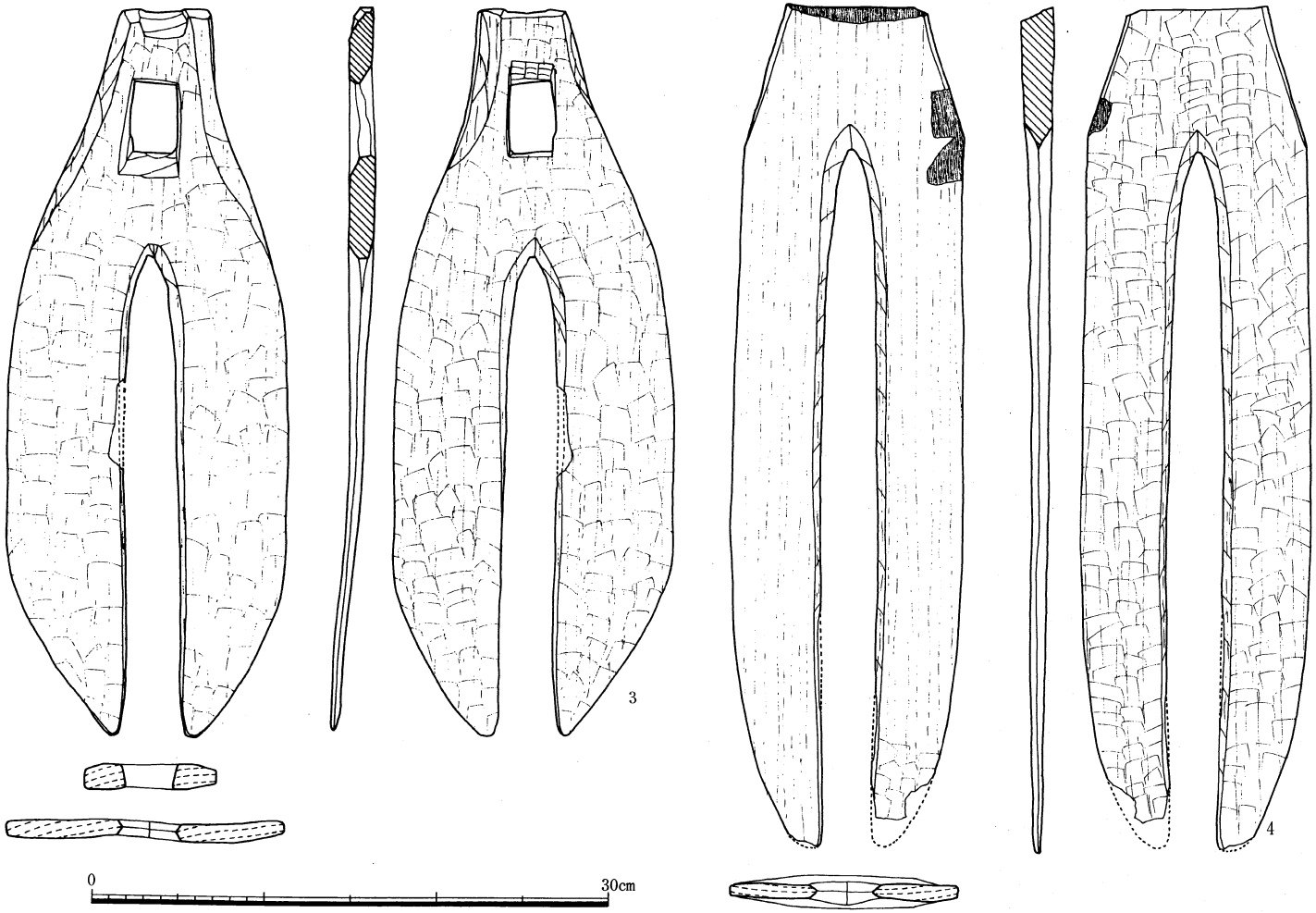


Fig. 41 ＳＤ28出土木器実測図 (1/4)

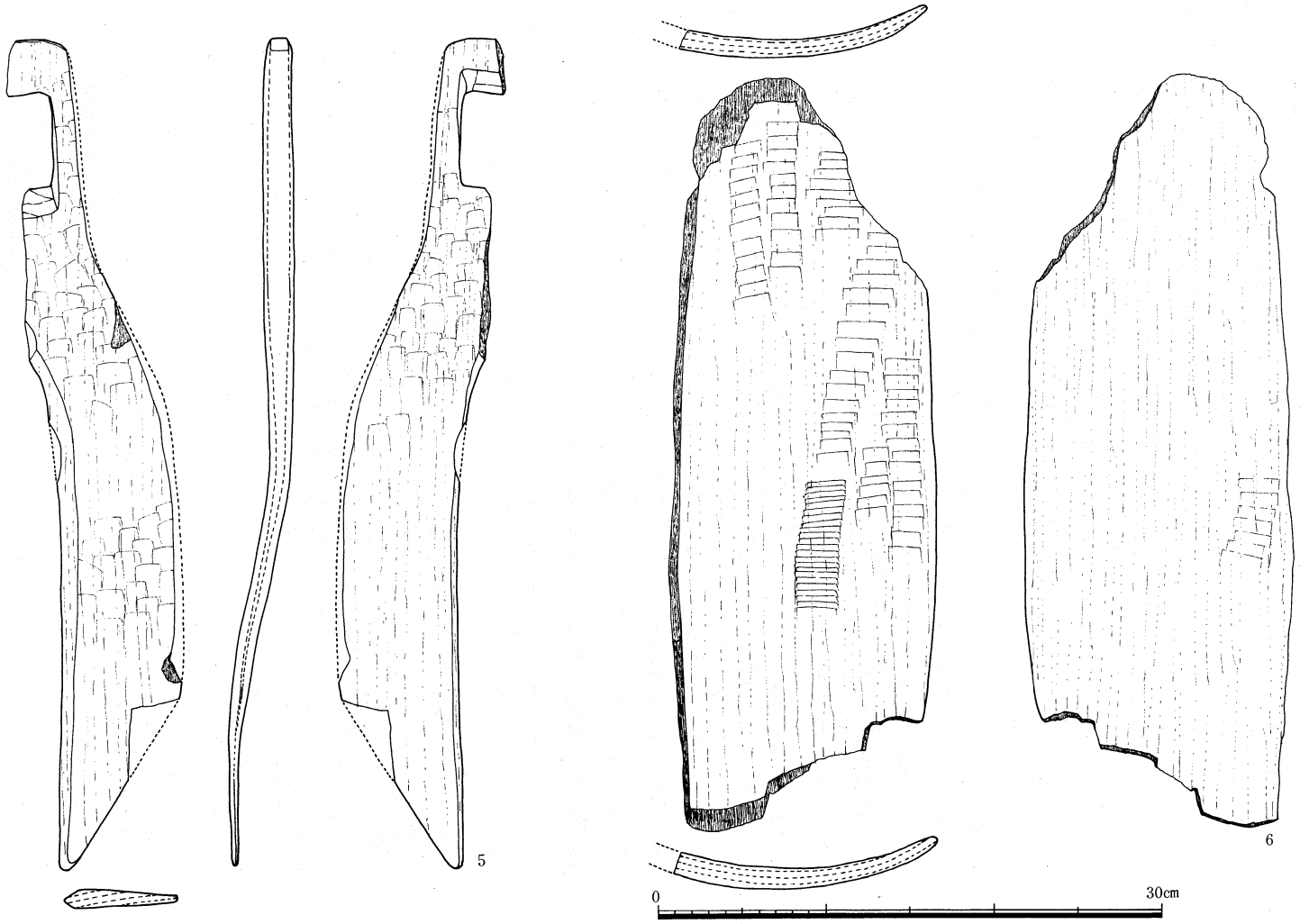


Fig. 42　ＳＤ28出土木器実測図(1/4)

は明瞭に残る。木取りは征目取り。5は半分を欠く。全長49.6cm，刃長30.7cm＋a，刃巾7.1cm，最大厚1.7cmを測る。刃部外縁は弧を描く。両面には、器面を打ち削った痕跡が明瞭に残る。木取りは征目取りである。

槽（6・7） 6は側板と推定され、その断面形は弧を描く。端部は丸味を持つ。残存する最大厚は1.4cmである。両面には手斧で打ち削ったと想定される痕跡が明瞭に残る。半裁した丸木を刳貫いて作られたものであろう。内面に焦げ跡がある。本書では槽としたが、丸木舟の一部である可能性も残る。7は側板が底板から直に立つ。内面には黒漆が全面に認められる。巾11.1cm，底厚0.6cm，側板厚は0.9cmを測る。

建築用部材（8） 柄孔を有する角材で両端は欠けている。残存長110.4cm・巾5.0cm・最大厚2.0cmを測り、4ヶ所の柄孔を有する。柄孔長4.5cm，巾1.5cm，孔間は31.2～33.0cmである。部材の断面形は平行四辺形を呈している。

板材（10） 残存長132.7cm，巾4.3cm，最大厚1.0cmを測る。一方の端は欠けているが、もう一方の端部は反り、丸く削られ焼けている。

梯子（9・10） 9は残存長103.5cm，全巾12.5cm，最大厚5.8cm，最小厚2.8cmを測る。段間は30～35cmである。一方の端部は欠けているので、本来は3段以上のものである。木の芯を中心に持っているので、丸木を粗割りし、さらに削ったものと思われる。11は完形品で全長187cm，最大径12.7cm，最小径9.7cmを測る。5ヶ所を丸木の半分まで削り取り、足をかける所を作る。一方の端部を板状に削っているのは、梯子を架けた時に安定さすためと思われる。

SD30出土の木製品（Fig.45～49，PL.39～41）

鋤（12～14） 柄が一体となる。いわゆるスコップ状の形態を呈している。12は全長73.0cm，全巾12.3cm，身部長20.5cmである。柄の部分は断面が円形を呈し、柄長52.5cm，径3.0cmを測る。握部は平面形が三角形を呈し、内巾6.6cmと狭い。13は柄を欠く。身部長30.5cm，巾13.5cm，最大厚1.7cmである。14は一方の面に馬蹄形状の段を有する。

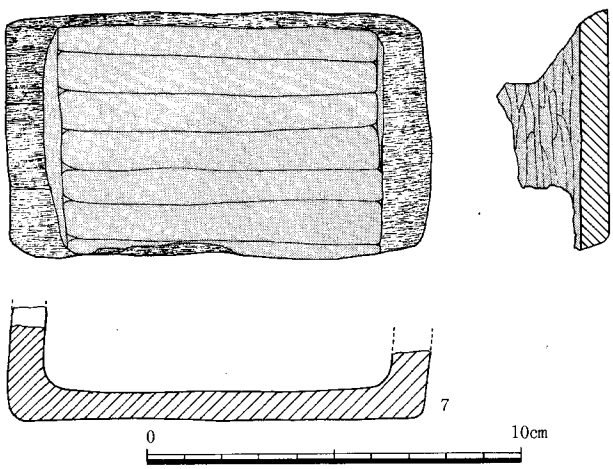


Fig.43 ＳＤ28出土木器実測図(1/2)

柄（15～17） いわゆるスコップ状を呈する鋤の柄である。15は残存長73.5cmを測り、握部内巾6.4cmである。柄の断

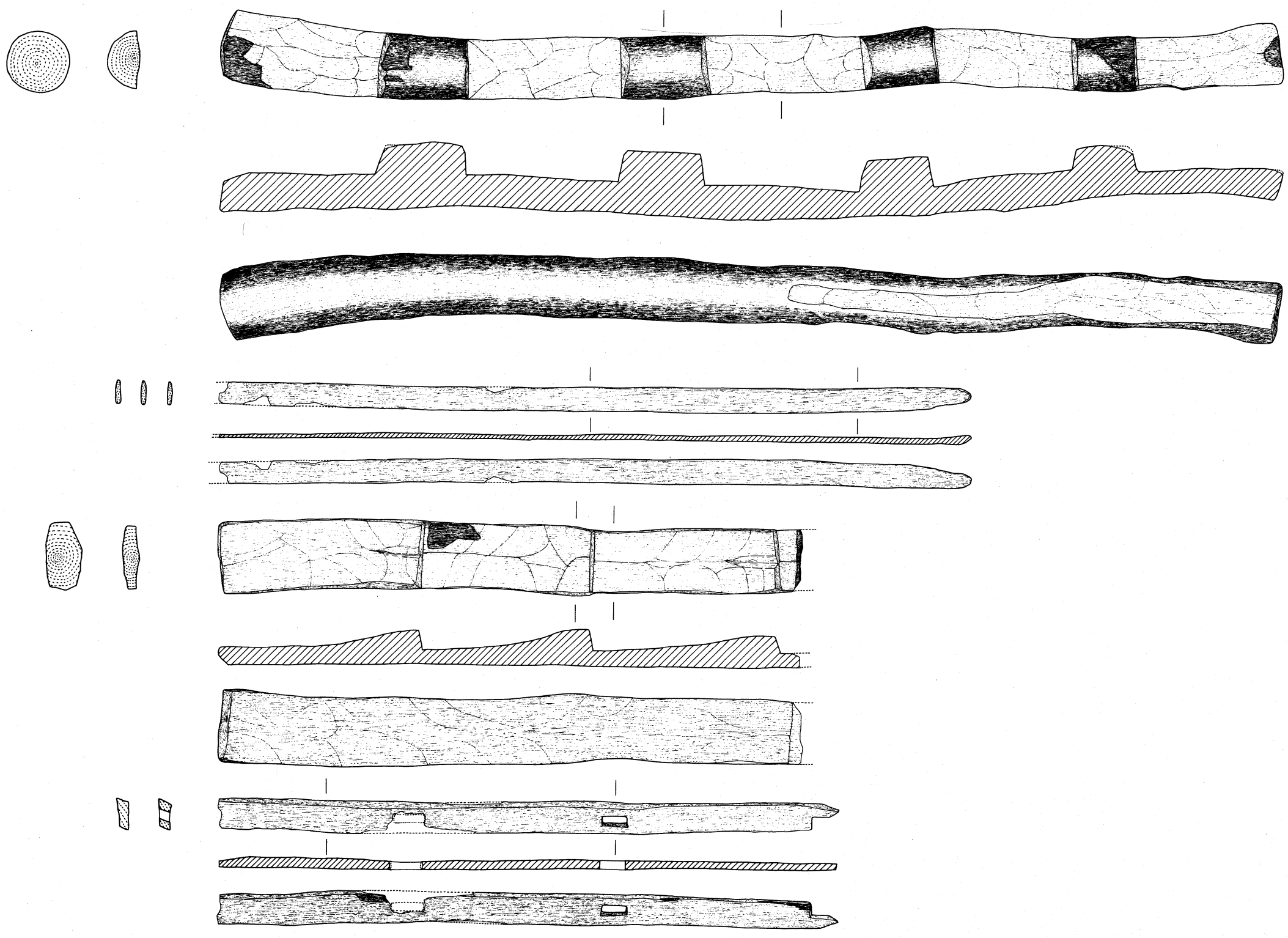


Fig.44　SD28出土建築部材・木器実測図（1/8）

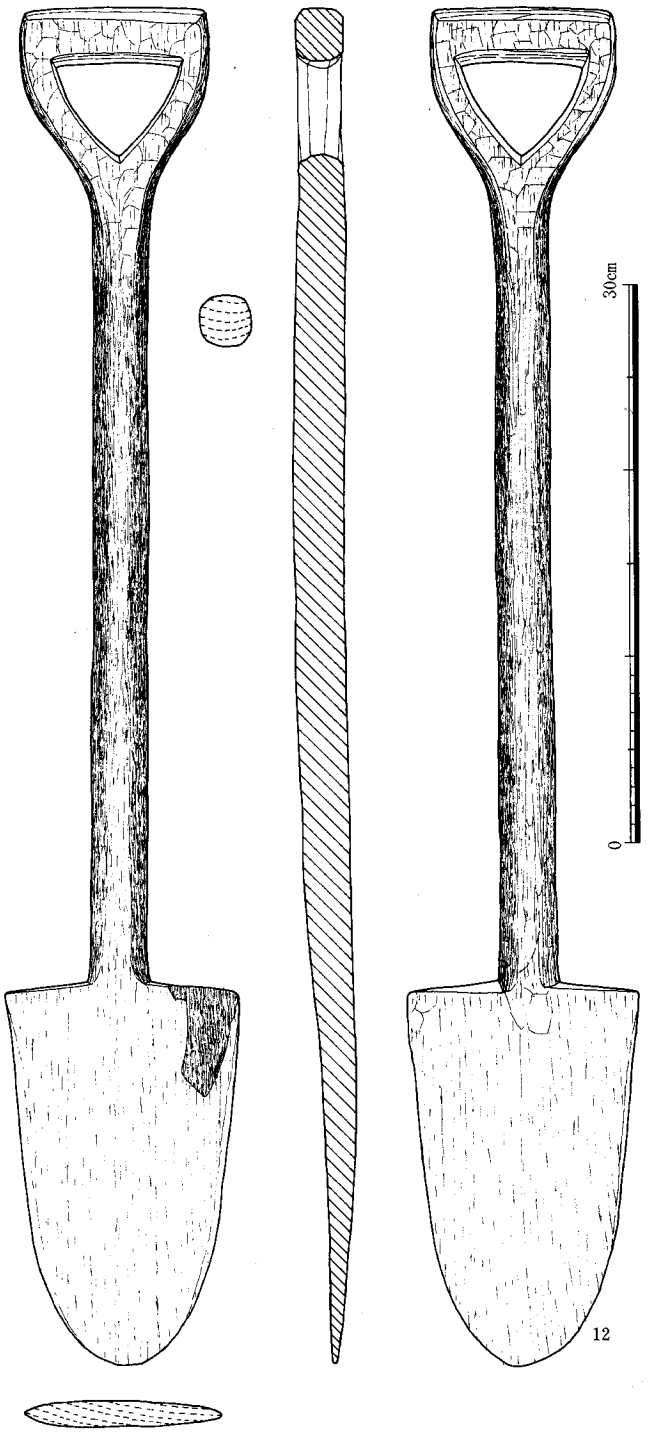


Fig. 45　ＳＤ30出土木器実測図 (1/4)

面は楕円形を呈する。16は残存長50.5cmを測り、握部内巾5.9cmである。柄の断面は円形を呈し、径2.4cmを測る。17は握部も欠く。残存長49.5cm、柄の断面は径2.4cmの円形である。

鍬 (18～20)　全て平鍬である。18は刃部を欠く。巾1.1cm，深さ1.3cm断面が半円形の溝を表に６条・裏に１条刻している。溝の性格は不明である。19はバチ形を呈し、全長30.8cm，全巾14.5cm，最大厚1.3cmを測る。器面には打ち削った痕跡が明瞭に残る。20は全長34.7cm，復原全巾10cmを測る。刃部は検出時に他の部分と色が異なり、鉄刃を先に装着させていたことが考えられる。

椀　漆椀である。底部と口縁の細片で全形はわからない。底部の見込みと口縁外面には、器面に黒漆を塗った後に朱漆で文様を施している。ＳＥ05から出土した漆椀と同様の椀ではないかと考えられる。

SD31出土の木製品 (Fig. 50, PL. 42)

箆 (21)　匙状部、それと一体の柄の部分から成るが、柄の端部は欠けている。残存長

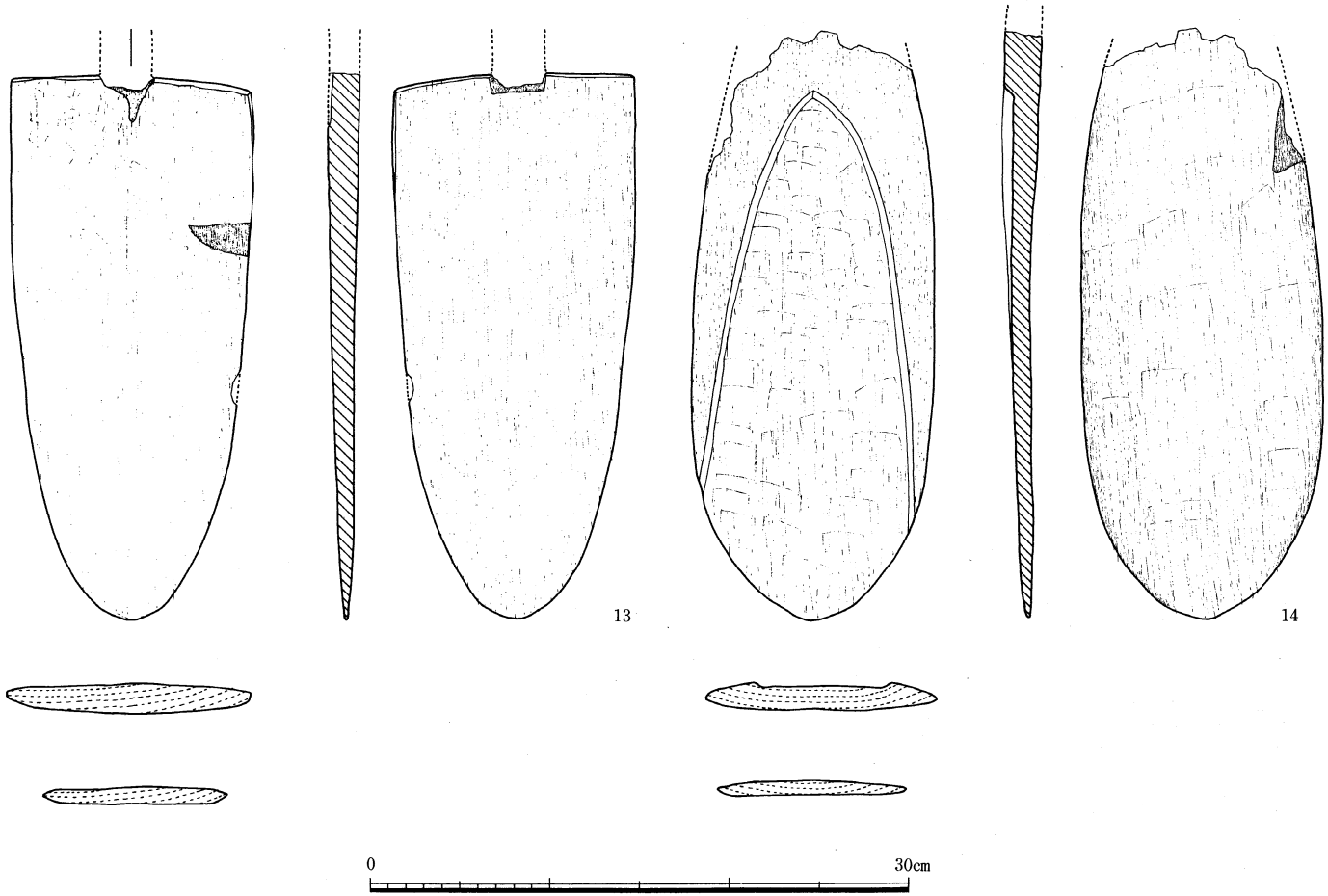


Fig. 46　ＳＤ30出土木器実測図 (1/4)

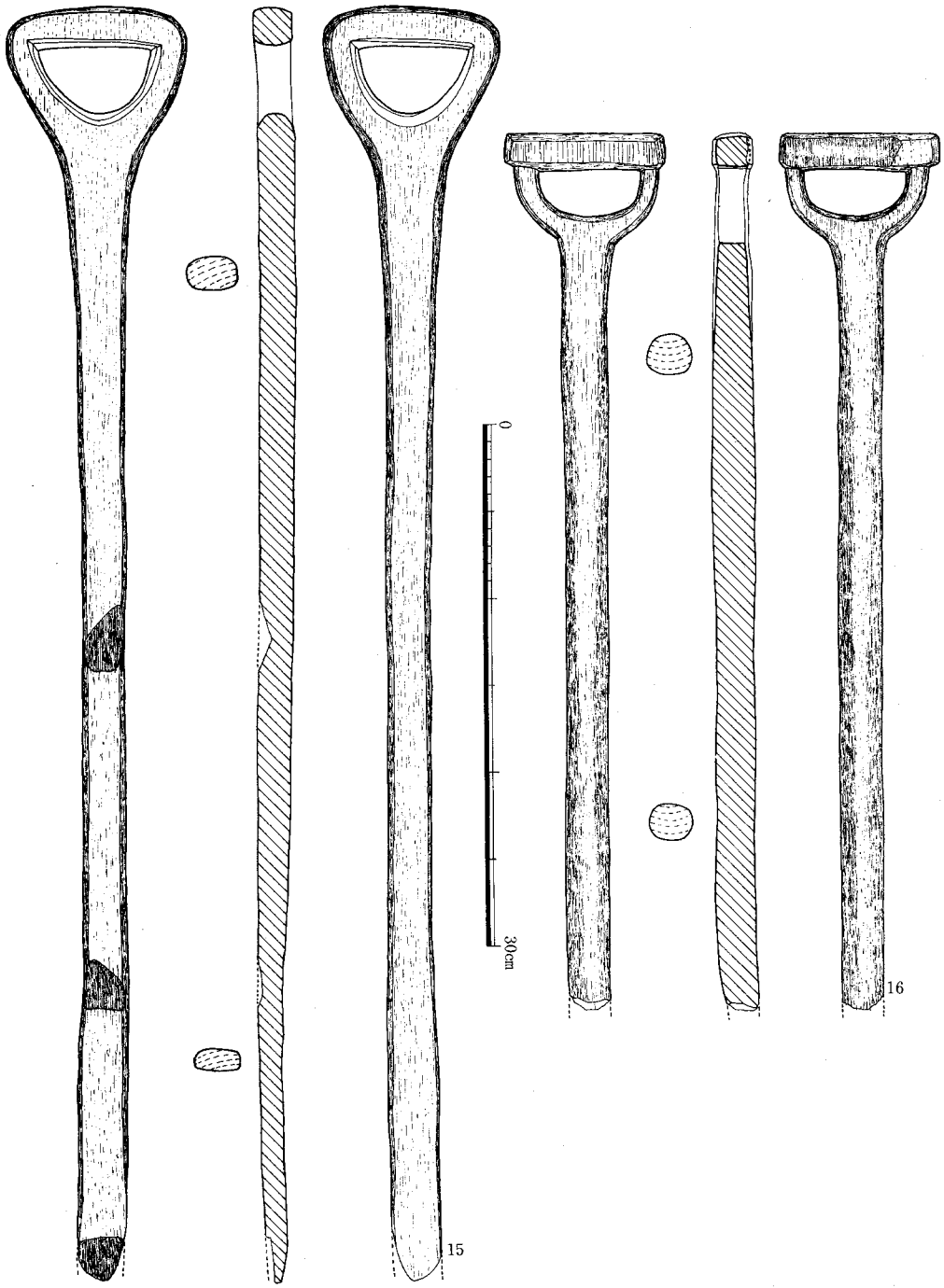


Fig. 47　ＳＤ30出土木器実測図 (1/4)

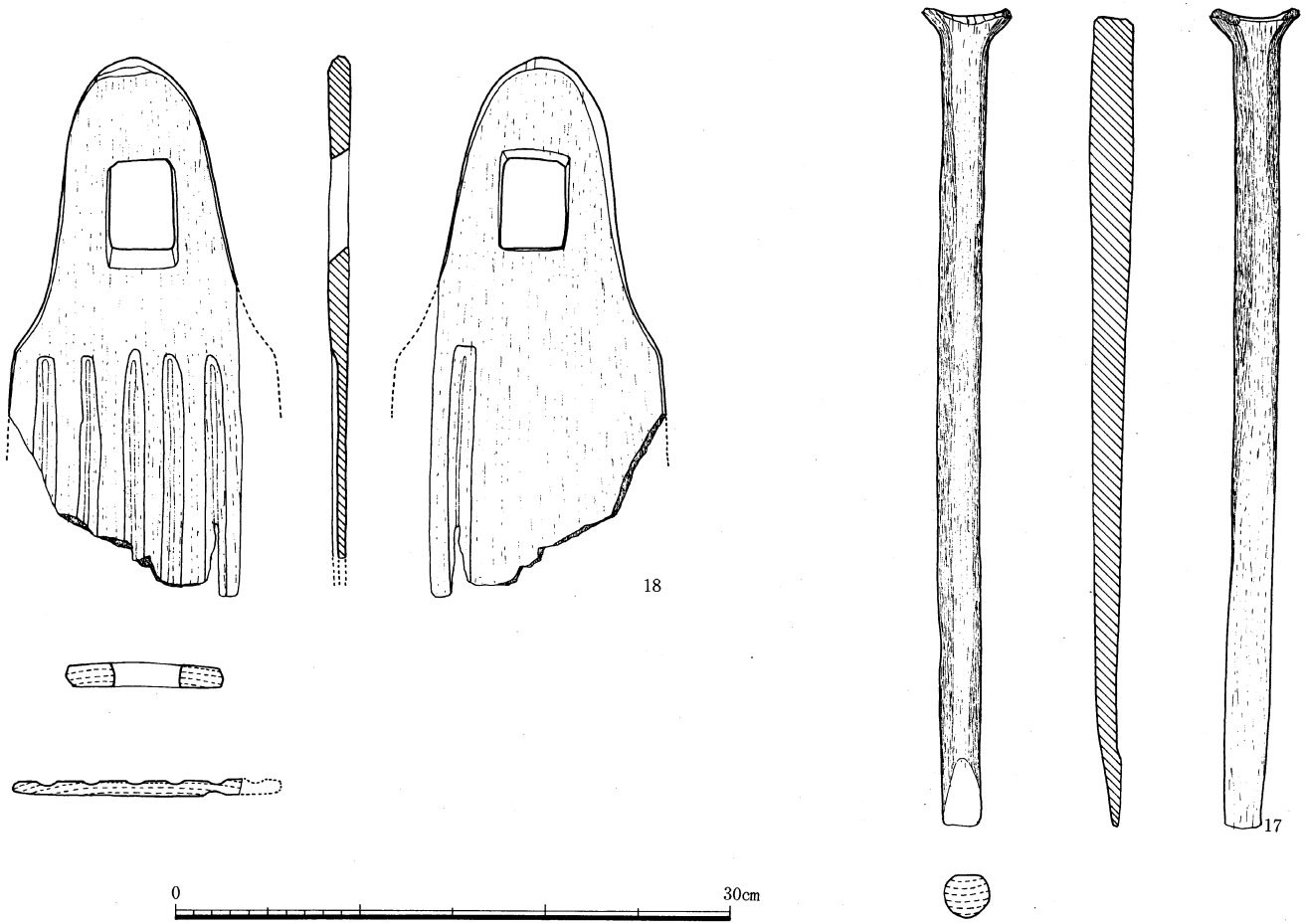


Fig. 48　ＳＤ30出土木器実測図 (1/4)

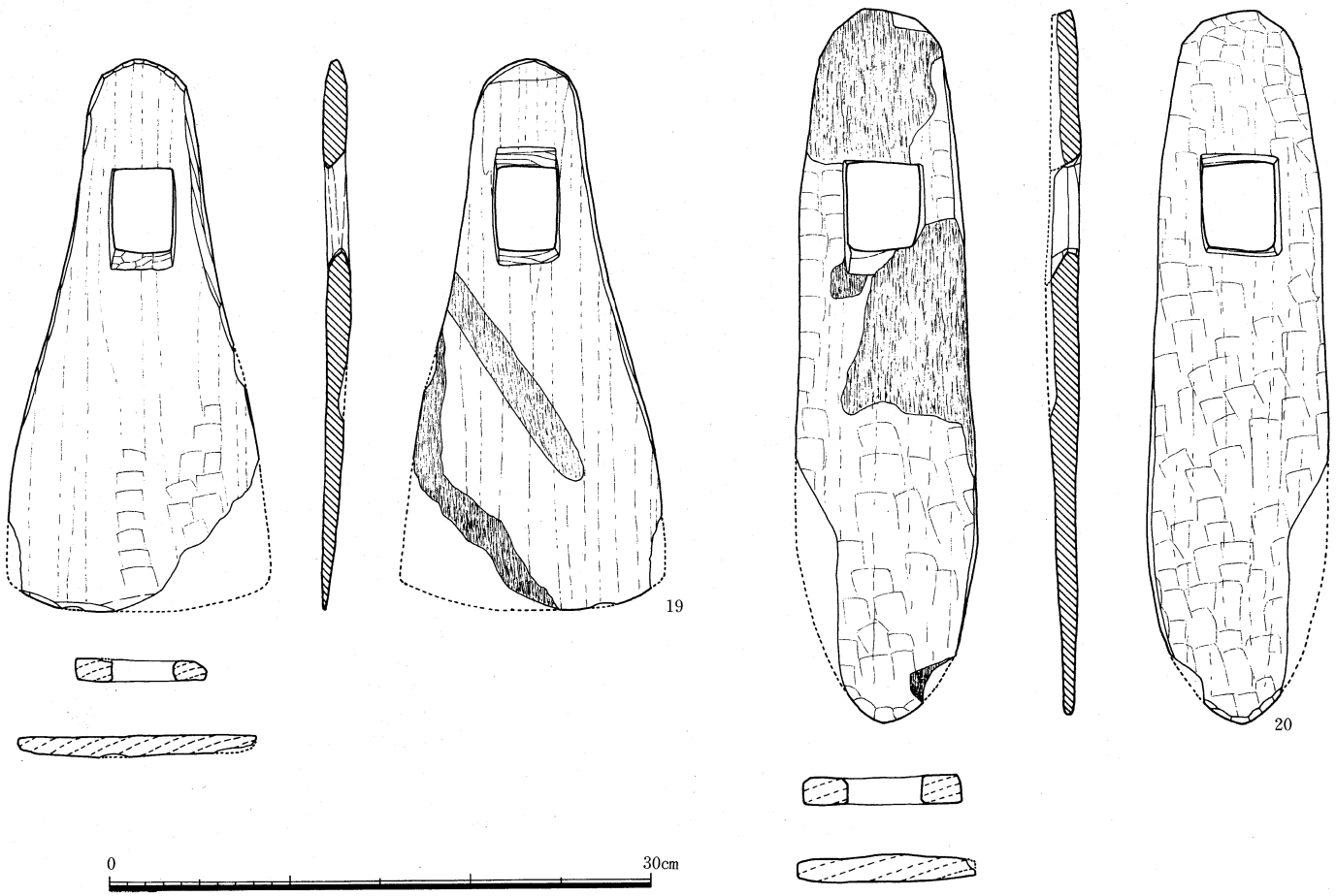


Fig.49　ＳＤ30出土木器実測図 (1/4)

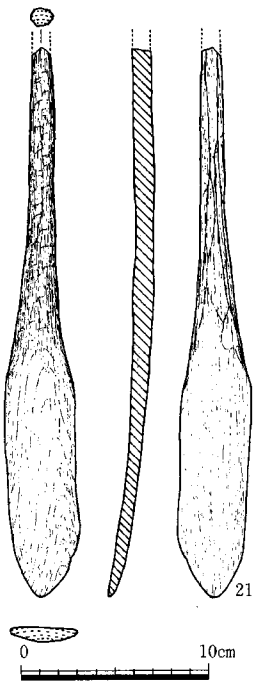


Fig.50 SD31出土木器実測図 (1/4)

29.4cmである。匙状部は長12cm，巾3.8cm，厚0.7cmを測り、やや反っている。周縁は薄く、刃状になっている。柄の部分は断面形が円形を呈している。

SE05出土の木製品 (Fig.51，巻頭写真)

椀 (22)　口径10.5cm，高台口径5.3cm，器高5.6cmである。内面底部と口縁との境は認められず、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げている。器面には黒漆が全面に塗られ、その上から朱漆で文様を描いている。文様は、見込みと体部外面に4ヶ所の計5ヶ所に施されている。文様は、花を横から投影したものと考えられる。

SG01出土の木製品 (Fig.52，PL.42)

下駄 (23)　二枚の歯を差し込むものであるが、台のみである。全長23.1cm，巾11.5cm，台厚3.1cmである。鼻緒孔は、表の縁近くから裏の中央へ向って斜めに開けている。前部鼻緒孔の縁には、足指の摩り痕が残る。

註1. 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和55年度発掘調査概報」1981年

註2. 福岡市教育委員会「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集　1984年

註3. 現在でも藁などを材料として畚等を編む時に用いられている。

註4. 純粋な砂だけを用いたものではなく、1㎜程の砂粒を多く含む粘砂的なものである。

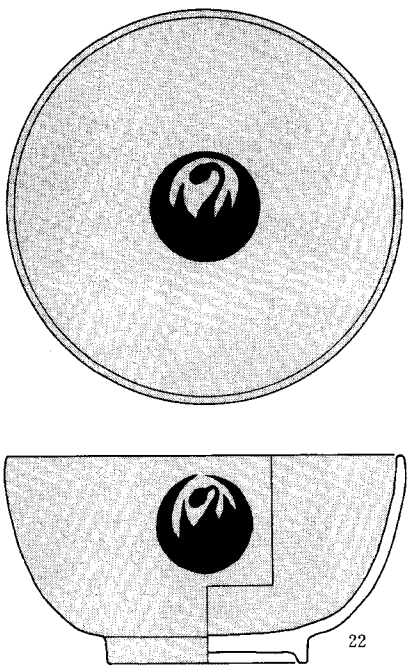


Fig.51 SE05出土塗椀実測図 (1/2)

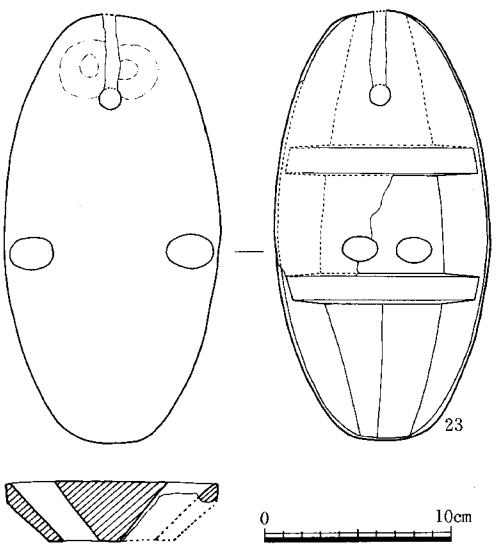


Fig.52 SG01出土下駄実測図 (1/4)

第五章　ま　と　め

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物２棟，柵２条，井戸７基，溝・河川31条，水田，池，土壙，柱穴群等である。これら遺構の年代は、ＳＤ２８・２９を除けば室町時代が中心を成すものである。しかし、これらの成果を持って下山門地域における中世史を明らかにしたとは言えない。本章では、遺構の年代と変遷及びそれらに係わる問題をとりあげ、今後の調査地周辺における調査・研究を進める上での手掛りとしたい。

SD28

川幅が20m前後を呈すると考えられる自然流路である。この自然流路は、室見川の支流もしくは十郎川の先駆的な姿として考えられよう。川が流路としての姿を呈していた期間は不明であるが、出土土器から５世紀前半には存在していることは明らかである。土器と共伴して木製農耕具・梯子・尖頭形に削った丸太木が出土していること、北岸に護岸用の杭列が認められることから、５世紀前半頃の調査地周辺には、農業生産を生活の基盤とし漁業を副次的とする集落が存在していたことが充分想像される。また、丸太木の用途としては堰等の施設が考えられよう。同時期の木製農耕具は、当調査地の南西１㎞に位置する拾六町ツイジ遺跡[註1]から、鍬・鋤を始めとして数多く出土している。この拾六町ツイジ遺跡との関係解明は、５世紀代における海浜地区の土地利用及び、生活様式を知る上で重要と思われ、今後の大きな課題と言ええよう。

SD30・31

ＳＤ３０においては、年代を比定できうる遺物が出土していないが、層位的にＳＤ３１と時間的に大差なく存在していると考えられることから、上限を15世紀に求めることができよう。ＳＤ３０からは木製農耕具が一ヶ所に集中して出土しており、意図的な所作によるものか、自然条件に起因するのかは不明で今後の課題である。

水田（ＳＸ０１・０２）

ＳＤ２８・ＳＤ３１の上層に位置することから15世紀より古くはならない。水田区画の不規則性は自然地形に影響されたものであろうが、水田の使用期間を含めて解明すべき点は多い。

柱穴群

Ⅱ・Ⅲ区調査区で検出した、柱穴群の建物規模は不明であるが、建替えが行なわれていたようである。埋土からは、12世紀～16世紀に生産された遺物が出土しているが、遺構の中心をなす年代としては、14世紀後半～16世紀前半を想定している。坏・皿・擂鉢を始めとする日常雑器が豊富に出土していることを柱穴群は集落であるとする一つの根処としている。

井戸

７基検出したが、全て住居に伴うものであろう。井戸枠が残っているのは、ＳＥ０１・０２・

０５の３基である。また、ＳＥ０２・０７においては、井戸廃棄の神事に使われた竹管が出土している。ＳＥ０１・０２において桶が井戸枠として用いられていたのは、構築の方法として簡易なためであろう。ＳＥ０５からは漆椀が出土している。井戸の年代は、柱穴群に併行するもので14世紀後半～１６世紀前半を堆定している。

溝

溝は30条検出したが、ＳＤ０５・０８・１５・１７・１９・２４の各溝は、単に流路としてではなく、区画的性格を有していると思われる。区画する対象は不明であるが、ＳＤ０５・０８では住居と考えられる。溝の年代は14世紀後半～16世紀前半を堆定している。

池

池は１基出土したが、大土壙の可能性も強い。池内からは、弥生時代からの遺物が含まれているが、その中で新しい時期の遺物は16世紀末に比定される唐津焼の鉄絵皿である。この池がどのような性格を有しているのかは不明であるが、一度に埋められている。

寺院

寺院に関係する遺構は検出しなかったが、土製仏像（地蔵菩薩座像）の出土は、当調査地の周辺に寺院が存在していたことが充分考えられる。また、調査地から南西５０ｍ離れた水田の土中から室町時代末の木製仏像[註2]が出土していることから、室町時代末には寺院が存在していたのではないかと考えている。

今回の調査で検出した遺構は、ＳＤ２８・２９を除けば中世の室町時代後半に位置する。これらの遺構が、下山門荘に関係するかは不明であるが、明らかに当地域において農業を生活の基盤の中心として生活が営まれていたと考えられる。しかし、遺物の中から漁具の一部である土錘・石錘が出土していることから、小魚を取るなどの漁業も副次的に行われていたことが言えよう。この集落の規模は明らかではないが、調査地の北西へも集落が広がっているものと思われる。調査地において、集落が存在していたのは14世紀前半～16世紀末を堆定しているが、上限が古くなる可能性もある。集落が17世紀には存在していないことは、幕藩体制の確立による村の再編成と関係するのかもしれない。

今回の調査では、中世における海浜地区の集落の存在を確認したが、その性格を始め下山門荘と関連ある積極的な資料を得ることができなかった。多くの問題点は今後の周辺地域における調査に託したい。

以上、下山門乙女田遺跡の発掘調査の報告を行なったが、時間的制約から全ての資料を発表できず、また発表した資料に関しても充分な検討を加えることができなかった。木製品の樹種鑑定を始め、その他においては別の機会に報告したい。

註１　福岡市教育委員会「拾六町ツイジ遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集、１９８３年
註２　福岡市西区下山門の要心寺に現在管理されている。

参考文献

福岡市教育委員会　「羽根戸古墳群」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集　1980年

福岡市教育委員会　「羽根戸遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書134集　1986年

福岡市教育委員会　「下山門遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集　1973年

福岡市教育委員会　「草場古墳群・斜ヶ浦瓦窯址」　1974年

住宅都市整備公団　「十郎川」　1982年

福岡市立歴史資料館　「福岡平野の歴史」　1977年

九州歴史資料館　「大宰府史跡昭和55年度発掘調査概報」　1981年

竹田理三　「荘園分布図」　1976年

池田末則　「地名伝承学序説」　1976年

小学館　「世界陶磁全集７　江戸（二）」　1980年

小学館　「世界陶磁全集３　日本中世」　1977年

下山門乙女田遺跡周辺主要調査遺跡報告書

福岡市教育委員会　「福岡市野方中原遺跡調査概要」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集　1974年

福岡市教育委員会　「野方中原遺跡の遺物（１）－Ａ溝出土の土器－」　福岡市立歴史資料館研究報告第２集　1978年

福岡市教育委員会　「羽根戸古墳群」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集　1980年

福岡市教育委員会　「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集　1986年

福岡市教育委員会　「広石古墳群」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集　1977年

福岡市教育委員会　「牟田田遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集　1974年

福岡県労働者住宅生活協同組合　「宮の前遺跡Ａ～Ｄ地点」　1971年

福岡市教育委員会　「宮の前遺跡Ｆ地点」　福岡市埋蔵文化財調査報告書13集　1971年

福岡市教育委員会　「下山門遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集　1973年

福岡市教育委員会　「金武古墳群発掘報告」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集　1971年

福岡市教育委員会　「福岡市影塚１号墳発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集　1971年

福岡市教育委員会　「草場古墳群・斜ヶ浦瓦窯址」　1974年

福岡市教育委員会　「重要遺跡確認調査報告書１」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集　1981年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第１集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集　1980年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第２集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集　1982年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第３集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集　1982年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第４集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集　1983年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第５集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集　1984年

福岡市教育委員会　「鶴町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集　1976年

福岡市教育委員会　「原深町遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書71集　1981年

福岡市教育委員会　「高柳遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集　1981年

福岡市教育委員会　「福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告書１」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集　1981年

福岡市教育委員会　「田村遺跡Ⅱ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集　1984年

福岡市教育委員会　「拾六町ツイジ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集　1983年

福岡市教育委員会　「次郎丸高石遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集　1981年

福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書（１）」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集　1977年

福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書（２）」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集　1978年

福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書（３）」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集　1980年

福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書（４）」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集　1981年

福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書（５）」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集　1983年

福岡市教育委員会　「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書（１）藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集　1981年

福岡市教育委員会　「県道大野二丈線関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第74集　1981年

福岡県教育委員会　「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第１集」　1970年

福岡県教育委員会　「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第３集」　1973年

福岡県教育委員会　「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第４集」　1976年

福岡市教育委員会　「福岡市埋蔵文化財遺跡地立表第１集―福岡西部地域（早良平野以西）の遺跡分布調査の概要―」　1969年

福岡市教育委員会　「福岡市文化財分布図（西部Ⅰ）」　1979年

観　察　表

土器番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
					口径	器高	底径				
1	Fig.21	P L.22	S D01	皿	7.3	1.2	5.5	1~2㎜程の長石・石英砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
2	〃	〃	〃	〃	7.4	1.4	5.3	2㎜以上の砂粒は含まない	酸化炎硬	暗灰色	底部糸切
3	〃	〃	〃	〃	8.5	1.2	6.3	1㎜程の長石・石英砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
4	〃	〃	〃	〃	7.9	1.2	6.1	1~2㎜程の長石・石英砂粒を含む	酸化炎やや軟	赤褐色	底部糸切
5	〃	〃	〃	〃	8.6	1.8	6.4	赤褐色の砂粒を含む	酸化炎やや軟	灰褐色	
6	〃	〃	〃	〃	9.8	1.5	8.0	僅かに0.5~1㎜の砂粒を含む	酸化炎硬	茶灰色	底部糸切 板目痕
7	〃	〃	〃	〃	8.8	2.0	6.0	1㎜程の長石・石英砂粒を含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切 板目痕
8	〃	〃	〃	〃	9.1	1.4	6.1	1~2㎜程の長石・石英砂粒を含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切
9	〃	〃	〃	〃	9.3	1.1	6.6	2㎜前後の長石砂粒を含む	酸化炎やや軟	赤褐色	底部糸切 板目痕
10	〃	〃	〃	坏	12.4	2.3	8.2	赤褐色砂粒を僅かに含む	酸化炎やや軟	黒灰色	
11	〃	〃	〃	〃	12.5	2.8	8.8	2㎜程の長石・石英砂粒を含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切 板目痕
12	〃	〃	〃	〃	12.3	3.1	7.0	砂粒を含まない	硬	外面：灰褐色 外面：一部黒色	底部糸切
13	〃	〃	〃	〃	12.8	2.4	8.6	1~2㎜程の長石・石英砂粒を含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切
14	〃	〃	〃	〃	11.3	2.3	6.8	0.5~1㎜程の砂粒を含む	酸化炎	灰褐色	底部糸切
15	〃	〃	〃	〃	12.3	2.4	9.5	1~2㎜程の長石・石英砂粒を含む	酸化炎やや軟	赤褐色	
16	〃	〃	〃	〃	12.8	2.3	9.0	赤褐色砂粒を含む	酸化炎	赤褐色	底部糸切 板目痕
17	〃	—	〃	〃	12.9	2.8	8.7	2~3㎜程の長石・石英粒を多く含む	酸化炎やや軟	赤褐色	底部糸切
18	〃	—	〃	〃	13.1	3.1	9.9	1㎜程の長石砂粒を含む	酸化炎やや軟	赤褐色	底部糸切
19	〃	—	〃	擂鉢	18.2	—	—	砂粒をほとんど含まない	硬	内面：暗セピア色 外面：黒茶色	
20	〃	—	〃	〃	—	—	11.9	1~2㎜程の砂粒を含む	須恵質	灰色	

Tab. 3　　S D01出土土器観察表

土器番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
21	Fig.22	PL.23	SD03	皿	8.9	1.2	7.8	1㎜以下の砂粒	酸化炎 やや軟	灰褐色	底部糸切
22	〃	〃	〃	〃	9.5	1.3	7.5	赤褐色砂粒を含む	酸化炎 やや軟	灰褐色	底部糸切 板目痕
23	〃	〃	〃	〃	9.5	1.3	8.2	2~3㎜の長石 砂粒を含む	酸化炎 軟	灰褐色	
24	〃	〃	〃	〃	8.8	1.2	7.6	1㎜以上の砂粒 を含まない	酸化炎 硬	一部黒色 暗灰色	底部糸切 板目痕
25	〃	〃	〃	〃	8.4	1.4	6.9	1～2㎜の砂粒を 僅かに含む	酸化炎 やや軟	灰褐色 板目痕	底部糸切
26	〃	〃	〃	〃	8.7	2.2	6.4	1㎜以上の砂粒を 含まない	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切 板目痕
27	〃	〃	〃	〃	9.0	2.2	6.0	1㎜程の砂粒を 僅かに含む	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切
28	〃	〃	〃	〃	9.8	2.3	7.3	0.5㎜程の長石・ 石英砂粒を含む	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切 板目痕
29	〃	〃	〃	〃	9.4	2.1	7.6	1~2㎜程の砂粒 を僅かに含む	酸化炎 やや軟	灰褐色	底部糸切 板目痕
30	〃	〃	〃	〃	9.1	2.0	6.8	0.5㎜以下の砂粒 を僅かに含む	酸化炎 硬	暗灰褐色	底部糸切 板目痕
31	〃	〃	〃	〃	9.5	2.0	7.1	1㎜以下の砂粒 を含む	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切 板目痕
32	〃	〃	〃	〃	9.5	2.2	7.4	1~2㎜以下の砂粒 を僅かに含む	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切
33	〃	〃	〃	〃	9.2	2.1	6.8	0.5㎜以下の砂粒 を含む	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切
34	〃	〃	〃	〃	9.6	1.7	7.2	赤褐色砂粒を含む	酸化炎 硬	茶褐色	底部糸切
35	〃	〃	〃	〃	9.8	1.8	7.3	2㎜以上の砂粒を 含まない	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切 板目痕
36	Fig.23	〃	〃	坏	12.2	2.8	8.4	1～2㎜程の砂粒 を僅かに含む	酸化炎 硬	茶灰色	底部糸切 板目痕
37	〃	PL.24	〃	〃	12.5	2.9	8.5	1~2㎜程の長石・ 石英砂粒を含む	酸化炎 硬	赤褐色	底部糸切
38	〃	〃	〃	〃	12.5	2.6	8.7	1~2㎜程の長石・石 英砂粒を多く含む	酸化炎 軟	赤褐色	底部糸切 板目痕
39	〃	—	〃	〃	12.6	2.4	9.0	2㎜程の長石・ 石英砂粒を含む	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切 板目痕
40	〃	PL.24	〃	〃	12.9	3.0	9.7	2㎜程の長石・石英 砂粒を僅かに含む	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切 板目痕

Tab. 4　　SD03出土土器観察表

土器番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
41	Fig.23	P L.24	S D03	坏	13.0	2.8	9.0	2~3㎜程の長石･石英砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色一部黒色	板目痕
42	〃	—	〃	〃	11.4	2.7	7.8	2~3㎜の長石.石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	暗灰色	底部糸切
43	〃	P L.24	〃	〃	12.2	3.2	8.4	1~2㎜の長石･石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	暗灰色一部黒色	底部糸切板目痕
44	〃	〃	〃	〃	12.8	2.8	9.0	3㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
45	〃	〃	〃	〃	12.7	2.6	8.1	1~3㎜程の長石･石英砂粒を多く含む	酸化炎軟	灰褐色	底部糸切
46	〃	—	〃	〃	12.8	2.6	9.0	1㎜程の砂粒をを僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
47	〃	P L.24	〃	〃	13.3	2.7	9.2	1～3㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
48	〃	〃	〃	〃	13.1	2.8	9.2	1~3㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切板目痕
49	〃	〃	〃	〃	13.1	2.7	9.2	1～2㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	板目痕
50	〃	—	〃	甕	内径23.6 外径25.4	—	—	1~2㎜程の長石･石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	黒灰色	
51	〃	P L.24	〃	甕	内径30.8 外径32.4	—	—	1~2㎜の長石・石英砂粒を含む	還元(いぶし)硬	暗灰色	東播磨窯
52	Fig.24	P L.25	S D04	皿	6.0	1.5	3.9	0.5㎜以下の砂粒を含む	酸化炎やや軟	灰褐色	底部糸切
53	〃	〃	〃	〃	7.0	1.9	4.6	2㎜程の長石・石英砂粒を含む	酸化炎やや軟	灰褐色	底部糸切
54	〃	〃	〃	〃	7.5	1.4	5.4	0.5㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
55	〃	〃	〃	〃	7.9	1.4	6.0	赤褐色砂粒を含む	酸化炎軟	灰褐色	底部糸切板目痕
56	〃	〃	〃	〃	8.3	1.5	7.3	1~3㎜程の長石･石英砂粒を含む	酸化炎やや軟	褐色	底部糸切の後なで
57	〃	〃	〃	〃	8.3	1.7	5.3	0.5㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰色	底部なで
58	〃	〃	〃	〃	8.4	1.4	7.3	1㎜程の長石砂粒が僅かに含む	酸化炎やや軟	灰褐色	底部糸切
59	〃	〃	〃	〃	8.6	1.2	7.0	0.5㎜程の長石砂粒を含む	酸化炎硬	暗灰色	底部糸切
60	〃	〃	〃	〃	8.9	1.0	6.9	1㎜前後の砂粒を含む	酸化炎硬	暗灰色	底部糸切

Tab. 5　S D03・04出土土器観察表

土器番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
61	Fig.24	PL.25	SD04	皿	9.0	1.2	7.3	0.5mm程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切板目痕
62	〃	〃	〃	〃	8.5	1.2	6.9	0.5mm程の砂粒を含む	酸化炎やや軟	灰褐色	底部糸切板目痕
63	〃	〃	〃	〃	8.9	1.6	6.8	1~2mm程の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎やや軟	灰褐色	底部糸切板目痕
64	〃	〃	〃	〃	8.9	1.4	7.2	赤褐色の砂粒を含む	酸化炎やや軟	灰褐色	底部糸切
65	〃	〃	〃	〃	9.0	1.5	7.6	0.5mm程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰色	底部糸切
66	〃	〃	〃	〃	8.7	1.8	6.1	2~3mm程の長石砂粒を含む	酸化炎やや軟	褐色	底部糸切板目痕
67	〃	〃	〃	〃	8.8	1.7	5.9	0.5mm程の長石・石英砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切板目痕
68	〃	—	〃	〃	9.3	1.7	6.6	僅かに1~2mmの砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切板目痕
69	〃	PL.26	〃	〃	9.3	1.6	6.7	0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰色	底部糸切
70	〃	〃	〃	〃	9.8	1.7	7.1	1mm程の石英砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
71	〃	—	〃	〃	9.4	2.2	7.0	1~2mmの砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
72	〃	PL.26	〃	〃	10.1	2.3	7.5	1~2mmの砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
73	〃	〃	〃	〃	9.2	2.1	6.5	2mm程の石英砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	
74	〃	—	〃	〃	9.0	1.9	7.0	1mm程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	暗灰色	底部糸切板目痕
75	〃	PL.26	〃	〃	9.6	1.8	7.2	0.5mm以下の砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
76	〃	〃	〃	〃	9.3	2.3	7.3	1mm程の長石砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切板目痕
77	〃	〃	〃	〃	9.3	1.4	7.7	1mm程の長石砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切板目痕
78	〃	〃	〃	〃	9.7	2.0	6.9	1~2mm程の石英砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
79	〃	〃	〃	〃	9.8	2.2	6.9	赤褐色砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
80	〃	〃	〃	坏	11.0	2.4	7.6	1~2mm程の長石・石英砂粒を含む	酸化炎硬	暗黒灰色	底部糸切

Tab. 6　SD04出土土器観察表

土器番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
					口径	器高	底径				
81	Fig.25	PL.26	SD04	坏	11.2	2.3	6.5	3㎜程の砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色(一部黒色)	底部糸切
82	〃	—	〃	〃	13.1	2.5	9.0	1㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切板目痕
83	〃	—	〃	〃	13.4	2.6	9.0	1㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰色	底部糸切板目痕
84	〃	PL.26	〃	〃	11.7	2.0	8.7	赤褐色の砂粒を含む	酸化炎	褐色	底部糸切
85	〃	—	〃	〃	12.0	1.8	9.1	1~3㎜程の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切板目痕
86	〃	PL.26	〃	〃	12.0	2.4	8.6	0.5㎜程の長石砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
87	〃	〃	〃	〃	12.7	2.1	9.4	1㎜前後の長石砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
88	〃	〃	〃	〃	12.2	2.9	8.5	砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
89	〃	〃	〃	〃	12.8	3.2	9.4	2~3㎜程の石英砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
90	〃	PL.27	〃	〃	13.7	2.7	10.3	1~2㎜程の長石砂粒を含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切板目痕
91	〃	〃	〃	〃	12.2	2.3	8.2	赤褐色砂粒を含む	酸化炎やや軟	褐色	
92	〃	〃	〃	〃	13.0	2.6	8.8	金雲母を多く含む	酸化炎やや軟	灰色	底部糸切
93	〃	〃	〃	〃	13.2	2.6	9.5	1~2㎜程の長石砂粒を含む	酸化炎やや軟	灰褐色	底部糸切
94	〃	〃	〃	〃	13.2	2.9	10.2	2~3㎜程の長石・石英砂粒を含む	酸化炎やや軟	灰褐色	底部糸切板目痕
95	〃	〃	〃	〃	13.0	3.0	9.2	1~2㎜程の石英砂粒を含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
96	〃	〃	〃	〃	13.0	2.4	9.1	砂粒をほとんど含まない	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
97	〃	—	〃	〃	13.4	3.3	8.0	2~3㎜の長石・石英砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
98	〃	PL.27	〃	〃	14.2	3.1	9.4	僅かに1㎜程の長石砂粒を含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切
99	Fig.26	〃	〃	鍋	25.9	—	—	2㎜前後の砂粒を含む	酸化炎硬	黒灰色	
100	〃	—	〃	鍋	29.9	—	—	1㎜程の長石砂粒を含む	酸化炎硬	外面黒色内面赤褐色	

Tab. 7　　SD04出土土器観察表

土器番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
101	Fig. 26	—	SD04	鉢	内径25.0 外径28.0	1.2	7.3	大きい砂粒を含まない	燻す	黒灰色	瓦質土器
102	Fig. 27	PL. 28	SD06	皿	7.9	1.2	6.2	赤褐色砂粒を僅かに含む	酸化炎 軟	赤褐色	底部糸切 板目痕
103	〃	〃	〃	〃	9.5	2.1	5.9	赤褐色砂粒を多く含む	酸化炎 軟	赤褐色	底部糸切
104	〃	〃	〃	坏	12.4	2.4	8.9	1~2㎜の長石・石英砂粒を僅かに含む	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切
105	〃	〃	〃	鍋	内径30.0 外径31.2	14.0	12.8	0.5㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎 硬	外面:黒色 内面:赤褐色	
106	〃	〃	SD08	皿	6.2	1.4	4.9	1~2㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎 硬	赤褐色	底部糸切
107	〃	〃	〃	〃	6.6	1.7	4.4	1㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎 硬	灰褐色	口縁部に炭化物付着 底部糸切
108	〃	〃	〃	〃	7.6	1.4	5.9	1~2㎜の長石・石英砂粒を僅かに含む	酸化炎 硬	灰褐色	底部糸切
109	〃	〃	〃	〃	7.6	1.4	4.8	1~3㎜の砂粒を僅かに含む	酸化炎 硬	赤褐色	底部糸切
110	〃	〃	〃	〃	8.3	1.2	7.0	1㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎 軟	灰褐色	底部糸切
111	〃	—	〃	〃	8.2	1.2	6.3	1~2㎜の砂粒を僅かに含む	酸化炎 軟	灰褐色	
112	〃	PL. 28	〃	坏	10.8	2.2	8.0	0.5~1㎜の砂粒を多く含む	酸化炎 硬	赤褐色	底部糸切
113	〃	〃	〃	〃	12.4	2.5	8.1	赤褐色砂粒を僅かに含む	酸化炎 硬	赤褐色	底部糸切
114	〃	〃	〃	〃	11.4	2.6	7.5	赤褐色砂粒を多く含む	酸化炎 軟	赤褐色	底部糸切
115	〃	〃	SD17	皿	7.9	1.5	6.2	2~4㎜の砂粒を僅かに含む	酸化炎 軟	赤褐色	底部糸切 板目痕
116	〃	〃	SD24	〃	6.4	1.1	5.3	2㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎 硬	茶褐色	底部糸切
117	Fig. 28	PL. 29	SD28	高坏	—	—	15.4	大きい砂粒を多く含まない	酸化炎 硬	赤褐色	
118	〃	〃	〃	甕	内径15.7 外径16.3	—	—	1㎜程の砂粒を多く含む	酸化炎 硬	外面:黒色 内面:暗茶褐色	
119	〃	〃	〃	〃	—	—	—	2~3㎜の砂粒を多く含む	酸化炎 硬	暗茶褐色	
120	Fig. 29	—	SD31	坏	内径29.8 外径11.8	2.5	8.5	0.5~1㎜の赤褐色砂粒を僅かに含む	酸化炎 硬	茶褐色	底部糸切

Tab. 8　SD04・06・08・17・24・28・31出土土器観察表

土器番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
121	Fig.29	P L.29	S D31	埦	15.0	5.4	6.6	2~3㎜の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	外面：灰色 内面：黒色	内面へらみがき
122	〃	〃	〃	擂鉢	29.1	12.7	13.4	0.5㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	
123	〃	〃	〃	鍋	内径29.8 外径30.8	—	—	0.5~1㎜程の砂粒を含む	酸化炎硬	外面：黒色 内面：暗茶褐色	
124	〃	〃	〃	〃	36.8	—	—	2~3㎜程の砂粒を多く含む	酸化炎硬	内面：茶褐色 外面：下段黒灰色 下段黒灰色	
125	Fig.30	—	S E02	坏	11.2	2.3	8.0	赤褐色砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	
126	〃	P L.29	S G01	皿	8.2	1.3	6.3	2㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切板目痕
127	〃	〃	〃	〃	8.6	1.6	5.7	1~3㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
128	〃	〃	〃	〃	9.7	2.0	7.4	1㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	茶灰色	底部糸切
129	〃	〃	〃	坏	10.9	2.0	7.9	0.5~1㎜の砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰色	底部糸切板目痕
130	〃	〃	〃	〃	13.0	2.9	9.7	1~2㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切板目痕
131	〃	〃	〃	〃	11.8	2.7	8.9	1~2㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	暗茶褐色	底部糸切
132	〃	—	S K03	〃	12.7	2.6	9.3	1~2㎜の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切
133	〃	P L.30	S K10	皿	8.0	2.4	5.6	3㎜程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	黒灰色	底部糸切
134	〃	〃	〃	〃	8.5	1.7	6.0	1~2㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
135	〃	〃	S K09	〃	8.6	1.1	7.3	1~2㎜の砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
136	〃	〃	S K19	〃	7.9	1.6	6.0	0.5~1㎜の砂粒を多く含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切板目痕
137	〃	〃	S K16	坏	11.8	2.4	8.0	赤褐色砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切板目痕
138	〃	〃	S K04	皿	7.5	1.4	6.0	1~2㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
139	〃	〃	〃	〃	7.6	1.3	6.0	1~2㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
140	〃	〃	〃	〃	8.3	1.8	6.6	1~3㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切

Tab. 9　S D31, S E02, S G01, S K03・04・09・10・16・19出土土器観察表

土器番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
141	Fig. 30	—	SK04	坏	11.9	2.5	7.8	1~3mmの長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切
142	〃	PL. 30	SK10	鉢	36.0	—	—	1~2mm程の砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	外面：茶褐色 外面：上段茶灰色 下段黒	
143	Fig. 31	〃	SP42	皿	8.6	1.5	7.2	1~3mmの長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切
144	〃	〃	SP47	〃	8.7	1.3	7.0	2mm程の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	茶灰色	底部糸切
145	〃	〃	SP101	〃	8.9	1.2	6.4	1~2mmの長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎軟	赤褐色	底部糸切
146	〃	〃	SP11	〃	10.1	1.0	8.1	1~2mmの長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎軟	灰褐色	
147	〃	—	SP184	〃	9.0	1.3	7.0	0.5~1mmの砂粒を多く含む	酸化炎軟	赤褐色	底部糸切
148	〃	—	〃	坏	11.0	1.9	8.0	1~3mmの長石・石英砂粒を僅かに含む	酸化炎軟	赤褐色	底部糸切
149	〃	PL. 30	SP190	〃	11.8	2.8	8.0	1~3mmの長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切 板目痕
150	〃	〃	SP192	〃	11.9	2.7	9.0	1~2mmの長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	暗灰色	底部糸切
151	〃	PL. 31	灰褐色砂質土上面	皿	7.7	1.7	6.1	赤褐色砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
152	〃	〃	〃	〃	7.8	1.8	5.9	赤褐色砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	
153	〃	〃	〃	〃	7.8	1.8	5.6	赤褐色砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	
154	〃	〃	〃	〃	7.9	1.6	6.2	0.5~1mmの砂粒を多く含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切 板目痕
155	〃	〃	〃	〃	8.4	2.4	5.0	1~2mmの長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
156	〃	〃	〃	〃	9.1	1.5	7.4	1~2mmの長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切
157	〃	〃	〃	〃	9.2	2.2	6.7	1~3mmの長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎軟	灰褐色	
158	〃	〃	〃	坏	11.5	2.7	7.0	0.5~1mmの砂粒を僅かに含む	酸化炎硬	茶灰色	底部糸切
159	〃	〃	〃	〃	11.5	2.4	6.8	赤褐色砂粒を多く含む	酸化炎軟	赤褐色	底部糸切
160	〃	〃	〃	〃	12.0	2.6	8.0	1~2mmの長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	灰褐色	底部糸切 板目痕

Tab. 10　SK04・10, SP11・42・47・101・184・190・192, 灰褐色砂質土出土土器観察表

土器番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
161	Fig.31	PL.31	灰褐色砂質土上面	坏	12.6	3.1	9.5	1~3㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	赤褐色	底部糸切
162	〃	〃	〃	〃	12.8	3.1	8.8	1~4㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎軟	灰褐色	底部糸切
163	〃	〃	〃	〃	13.1	2.7	10.0	1~3㎜の長石・石英砂粒を多く含む	酸化炎硬	茶褐色	
164	〃	〃	〃	擂鉢	30.7	—	—	1~3㎜の長石・石英砂粒を含む	還元焼成硬	暗青灰色一部茶褐色	備前焼
165	〃	〃	〃	瓶子	—	—	—	0.5~1㎜の砂粒を僅かに含む	還元焼成硬	灰色	緑灰色の釉
166	Fig.32	PL.32	SD01	皿	5.7	1.4	3.4		硬	青灰濁色	青磁 底部外面の釉を削り取る
167	〃	〃	〃	皿	7.1	1.5	3.3		硬	緑灰濁色	青磁
168	〃	〃	〃	〃	9.4	2.8	3.3	0.5㎜程の砂粒を僅かに含む	硬	暗茶褐色	陶器 底部ヘラ切り
169	〃	—	〃	〃	—	—	4.8		硬	緑灰色	青磁
170	〃	—	〃	碗	—	—	6.3		硬	緑灰色	白磁
171	〃	—	〃	〃	—	—	5.3	灰白色	硬	緑灰色	青磁
172	〃	—	〃	〃	—	—	5.7	灰白色	硬	暗緑灰色	青磁
173	〃	—	SD04	〃	10.3	4.5	5.3	0.5㎜程の砂粒を含む	硬	緑濁色	陶器・角碗 緑濁色の釉
174	〃	—	〃	〃	—	—	5.4		硬	暗緑灰色	青磁
175	〃	—	〃	〃	—	—	5.6	粗	硬	緑褐色	陶器 青磁を模倣したもの
176	〃	PL.32	SD31	皿	9.3	2.9	4.4	0.5~1mの砂粒を多く含む	硬	灰褐色	陶器・砂目 灰色の釉
177	〃	〃	SG01	〃	12.5	3.3	4.3		硬	暗灰色	陶器・鉄絵 唐津焼
178	〃	〃	SK05	〃	9.7	2.9	4.4	0.5~m程の砂粒を多く含む	硬	褐色	陶器・砂目 灰色の釉
179	〃	〃	灰褐色砂質土	碗	13.8	6.9	—	青灰色	硬	青灰濁色	青磁

Tab.11　灰褐色砂質土、SD01・04・31，SG01，SK05出土土器・陶磁器観察表

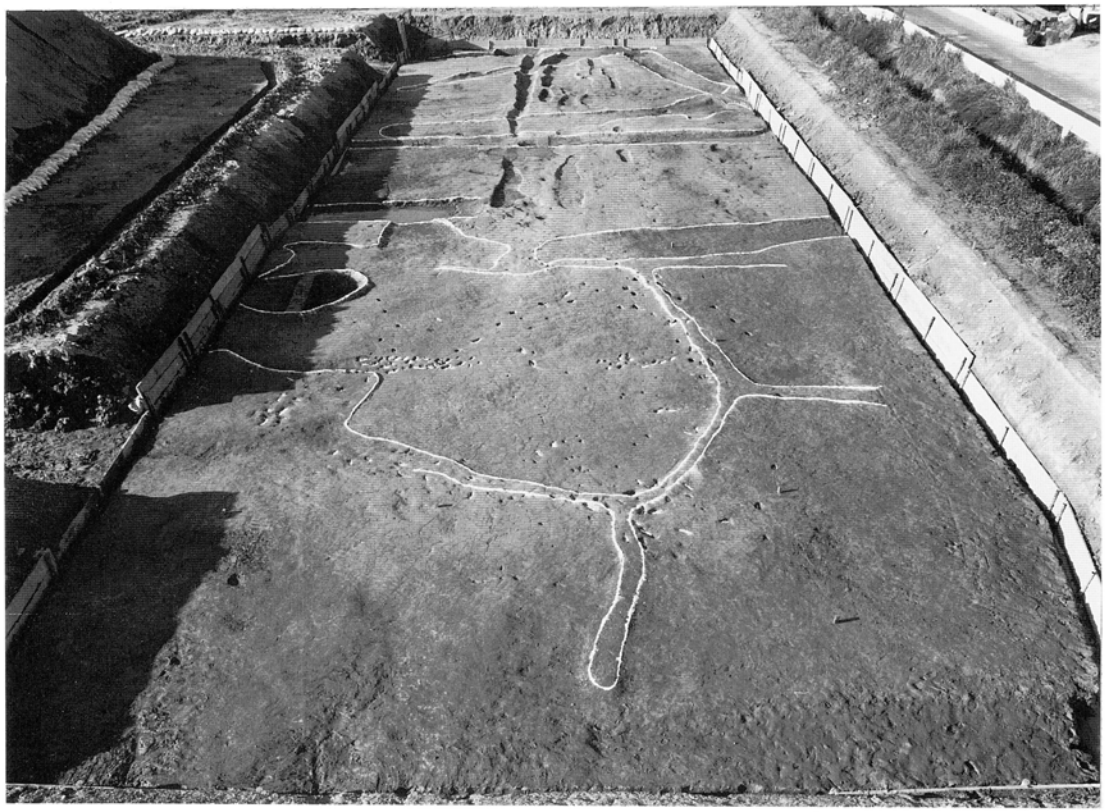
番号	出土遺構	法量(cm・g)			色調	番号	出土遺構	法量(cm・g)			色調
		長さ	最大径	重量				長さ	最大径	重量	
1	SD01	—	0.7	2.0	暗赤褐色	22	SD05	5.2	1.1	6.2	赤褐色
2	〃	3.5	0.8	2.7	暗赤褐色	23	SD24	3.2	0.8	—	赤褐色
3	〃	3.9	0.9	3.0	暗赤褐色	24	〃	—	0.8	2.0	赤褐色
4	〃	4.1	1.0	3.6	赤褐色	25	SE05	5.2	1.1	4.9	黒灰色
5	〃	4.5	1.1	6.2	黒灰色	26	〃	5.2	1.1	5.0	灰褐色
6	〃	—	1.9	15.0	灰褐色	27	SP16	4.6	0.8	4.3	暗灰色
7	〃	5.7	1.6	16.8	灰褐色	28	SP73	4.5	1.1	5.7	暗灰色
8	〃	7.9	3.4	60.6	赤褐色	29	〃	5.1	1.4	8.8	黒灰色
9	SD04	4.8	1.1	4.2	灰褐色	30	SP113	5.1	1.2	7.2	灰褐色
10	〃	4.8	1.1	5.9	灰褐色	31	SP150	5.2	1.0	5.6	灰褐色
11	〃	4.5	1.2	5.6	灰褐色	32	灰褐色砂質土上面	—	0.8	2.8	茶灰色
12	〃	—	1.0	4.6	黒灰色	33	〃	4.1	0.9	3.9	灰色
13	〃	4.4	1.1	4.0	灰褐色	34	〃	4.5	0.9	4.0	灰褐色
14	〃	—	1.1	5.2	赤褐色	35	〃	4.5	1.0	4.8	暗灰色
15	SD05	4.1	1.1	4.5	赤褐色	36	〃	4.7	1.0	5.7	茶灰色
16	〃	—	1.2	4.3	灰褐色	37	〃	4.7	1.1	4.8	赤褐色
17	〃	—	1.1	4.1	暗赤褐色	38	〃	4.9	1.2	5.0	灰褐色
18	〃	4.9	1.1	4.2	灰褐色	39	〃	5.2	1.0	4.4	灰褐色
19	〃	5.2	1.1	4.5	灰褐色	40	〃	5.3	1.0	4.8	暗茶褐色
20	〃	4.9	1.1	5.0	赤褐色	41	〃	5.5	1.0	5.3	茶灰色
21	〃	—	1.0	4.3	灰褐色	42	〃	—	1.0	5.9	赤褐色

Tab. 12　土錘観察表

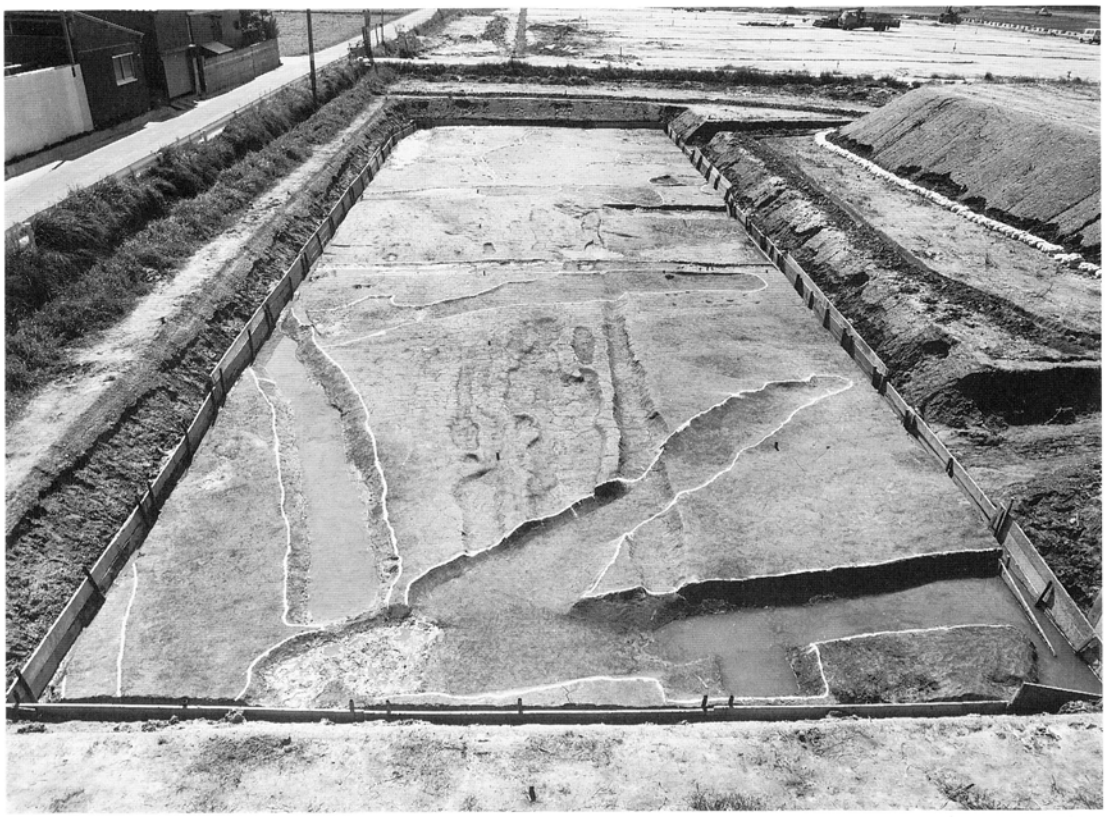
P L A T E S

図　版

調査区遠景（南から）



1. Ⅰ区調査区全景（南から）

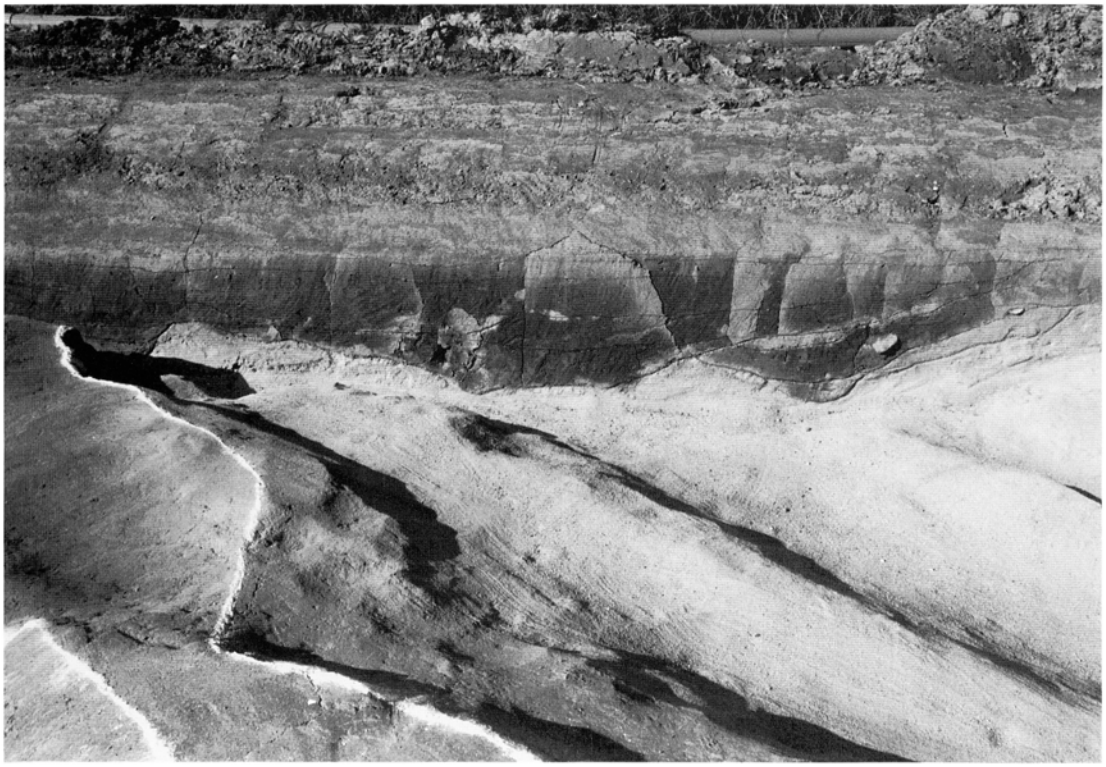


2. Ⅰ区調査区全景（北から）

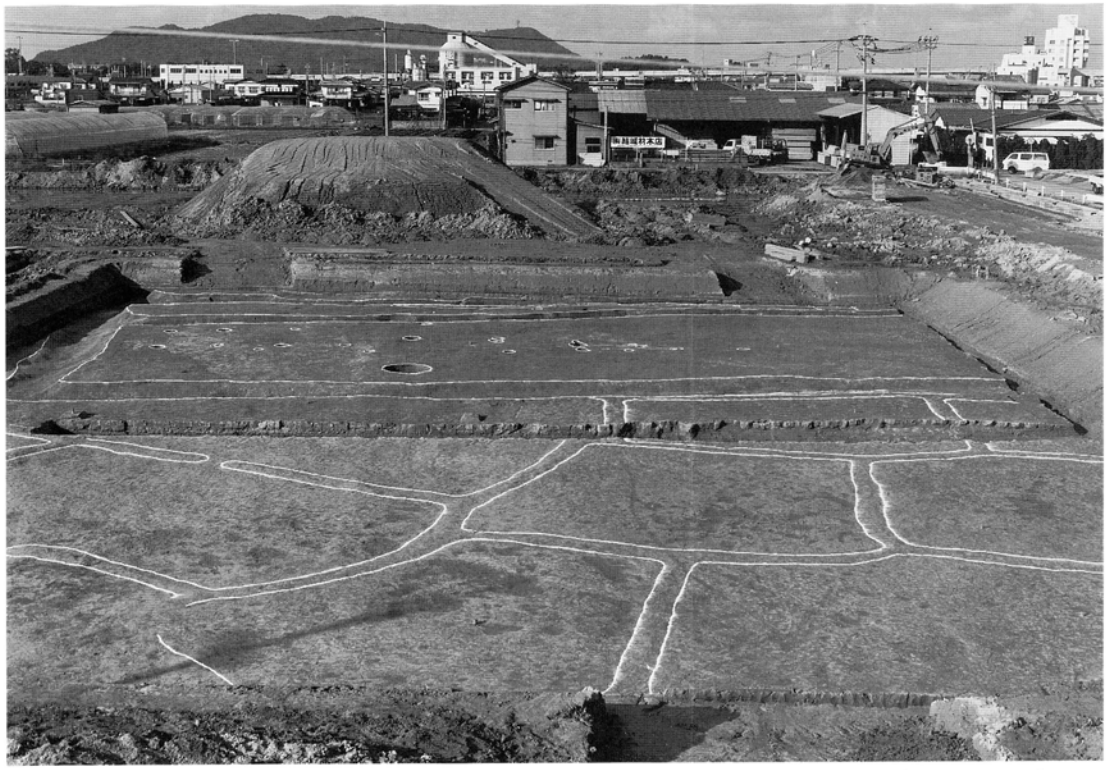
1. II区調査区全景（東から）

2. SD 09・11（北から）

1. SD 01・02・09（北から）

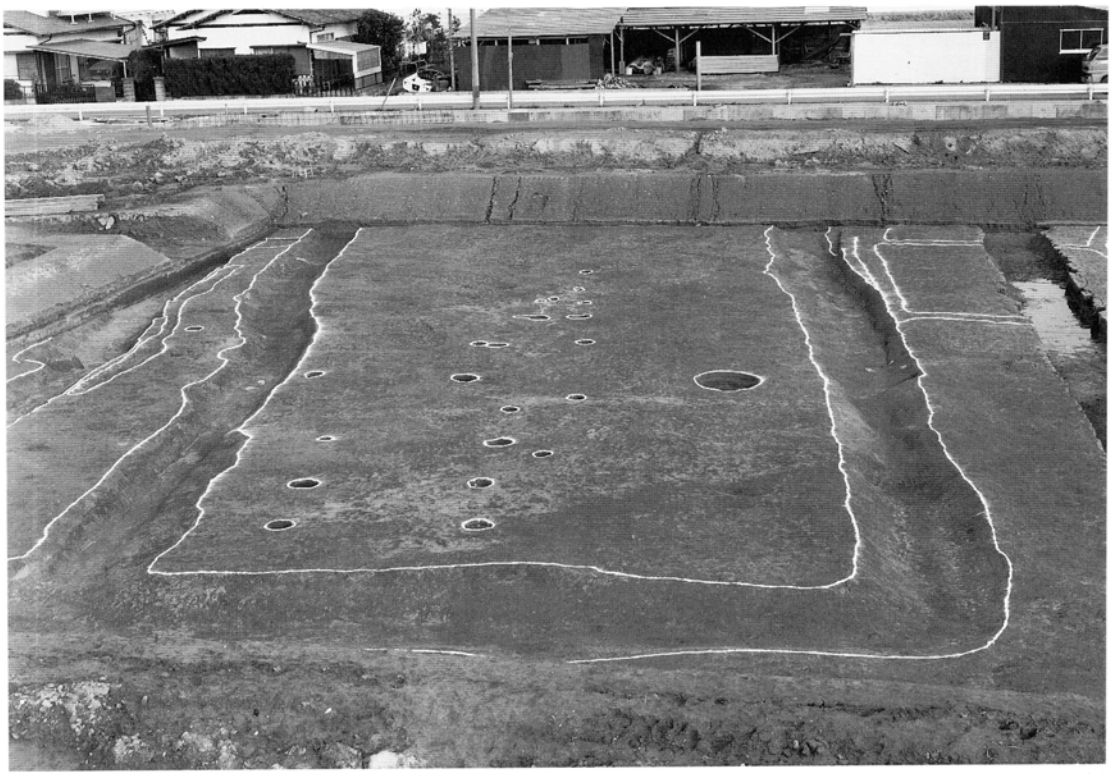


2. SD 01 土層（西壁）

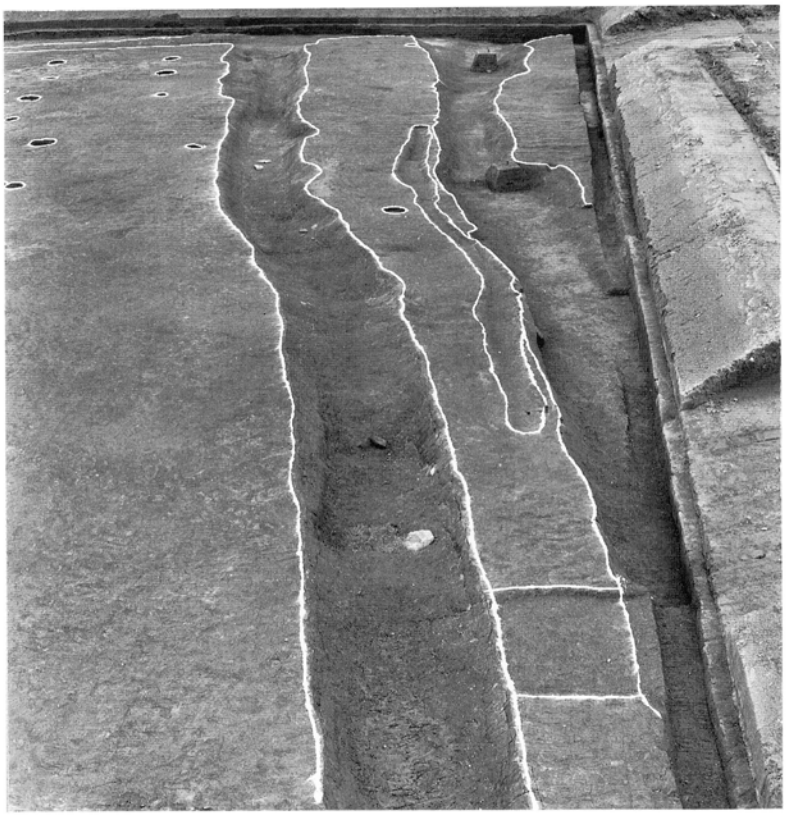


1. Ⅲ区調査区上層遺構（南から）

2. SX 01（北から）

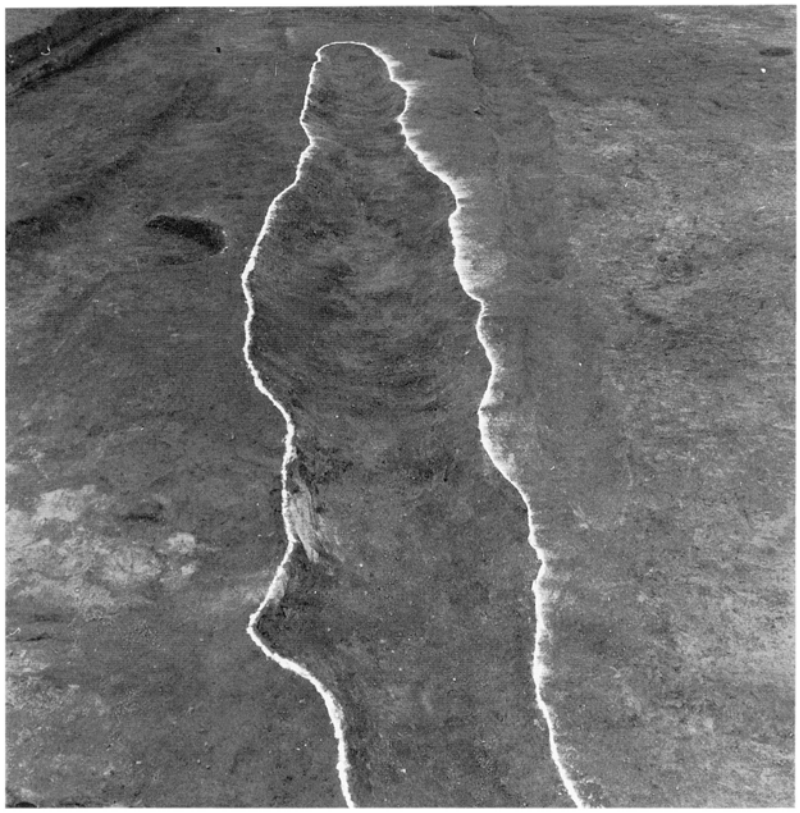


1. Ⅲ区調査区上層遺構北半部（西から）



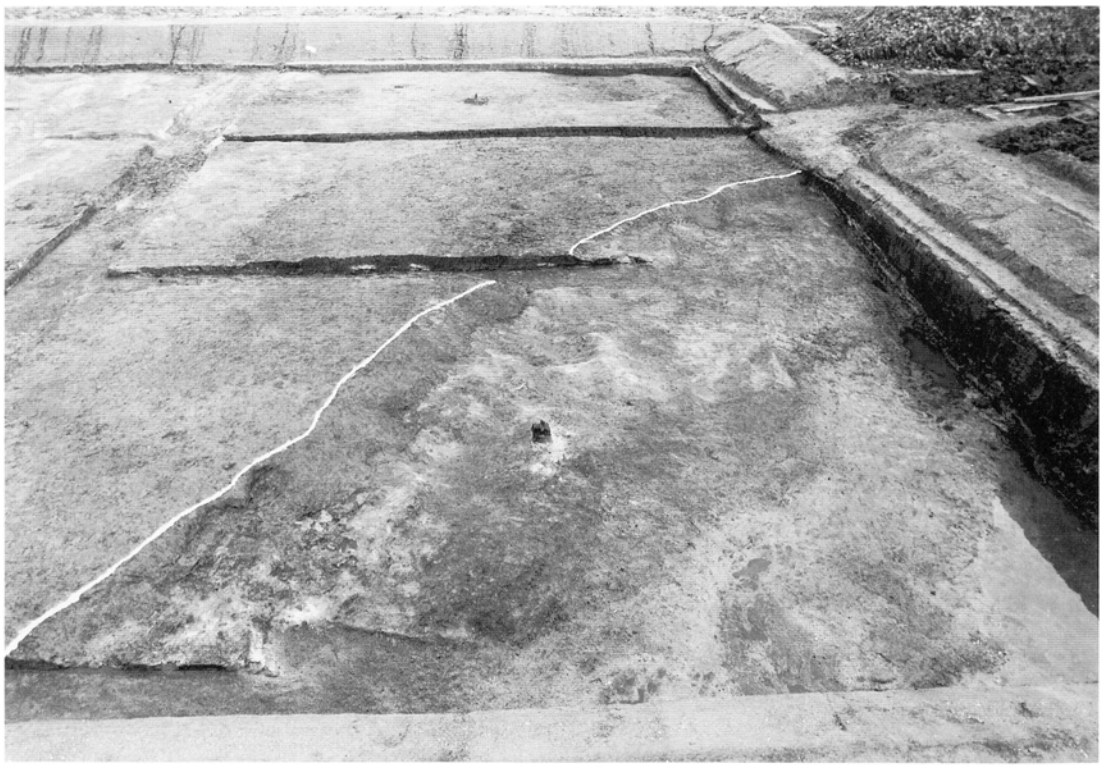
2. SD 17・19（東から）

1．Ⅲ区調査区下層遺構全景（北から）



2．SD 29（西から）

1. SD 28木材出土状況（西から）



2. SD 28（西から）

1. SD 28木材出土状況（南から）

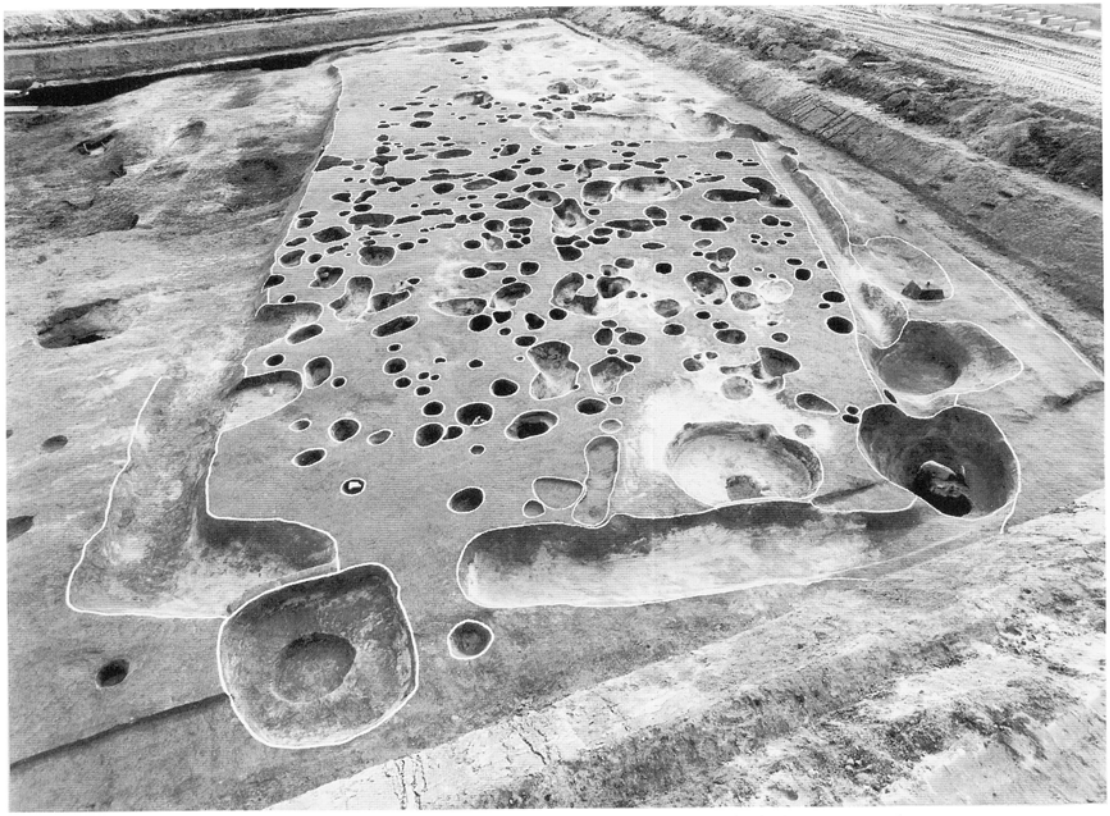
2. SD 28木材出土状況（南東から）

1. Ⅳ区調査区全景（北から）

2. SB 01, SX 02（南から）

1. SD 14・15・16（南から）

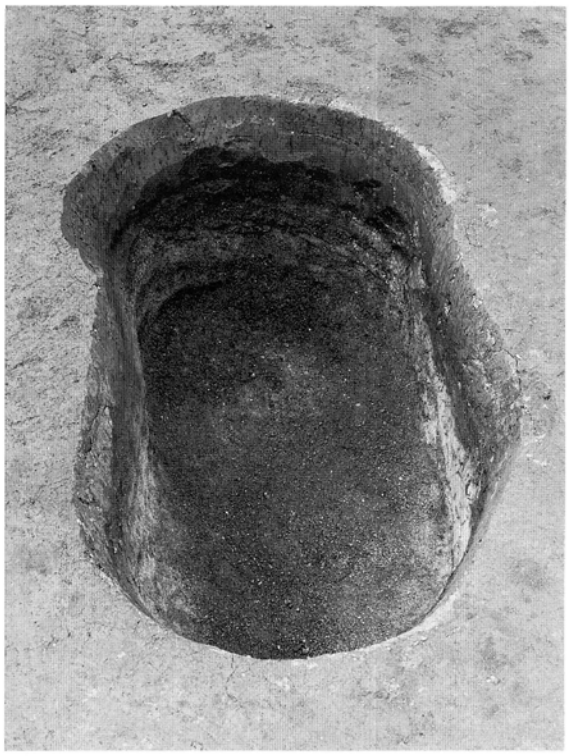
2. SD 31（北から）



1. V区調査区西半部（北から）

2. SD 30（北から）

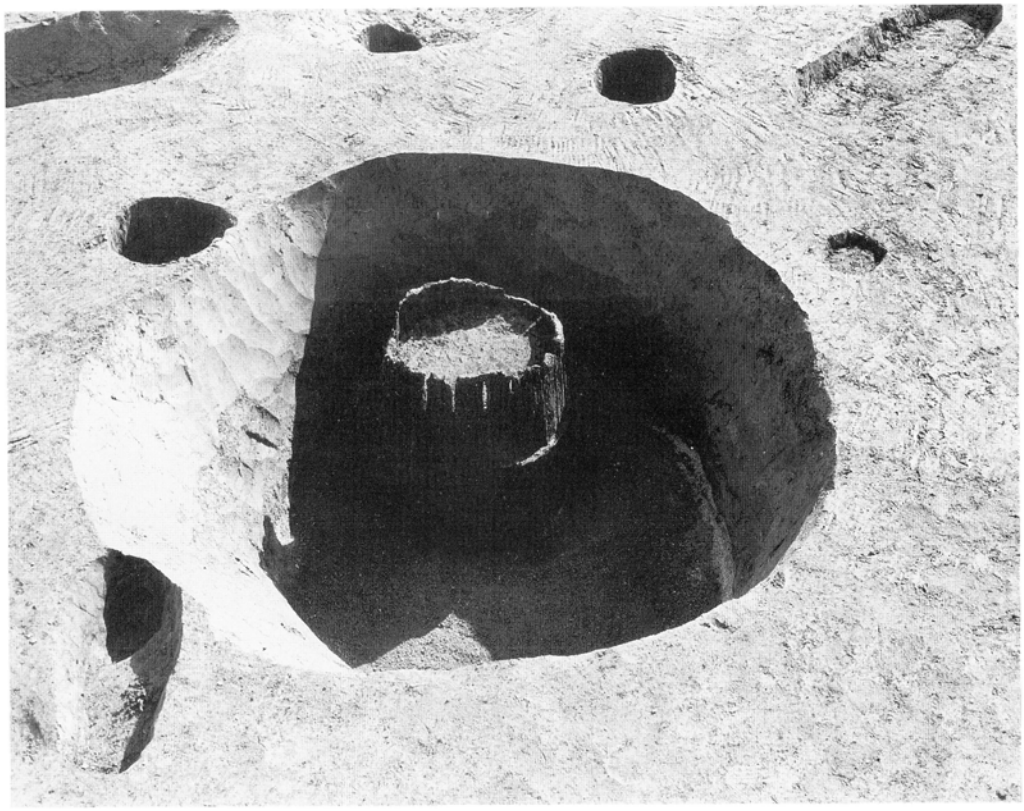
1. SE 01（南から）



2. SE 01掘形（南から）

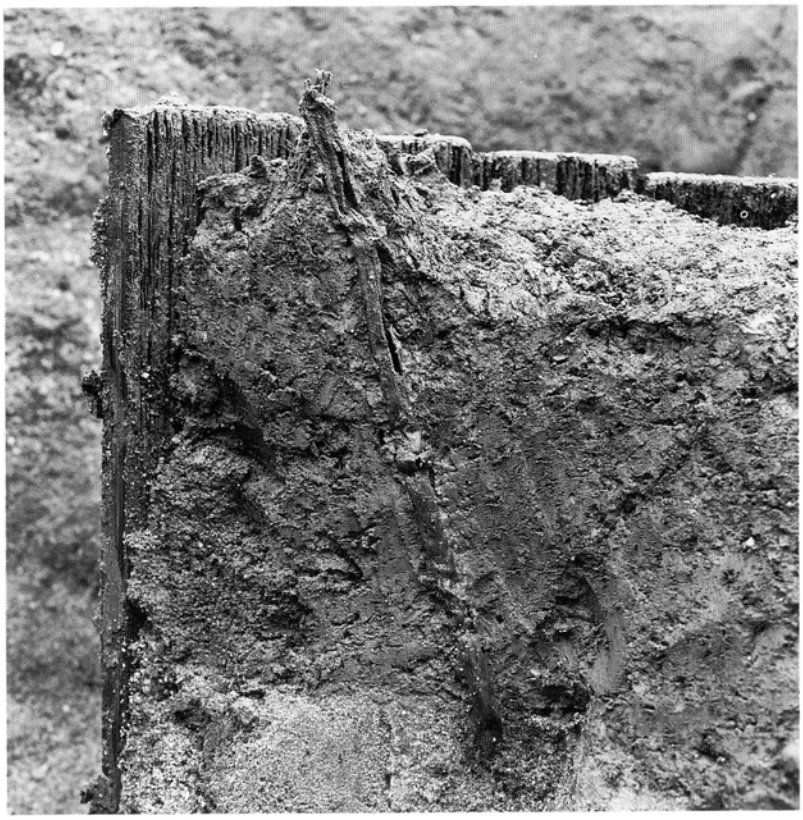
3. SE 01井戸枠（南から）

4. SE 01井戸枠内堆積状況

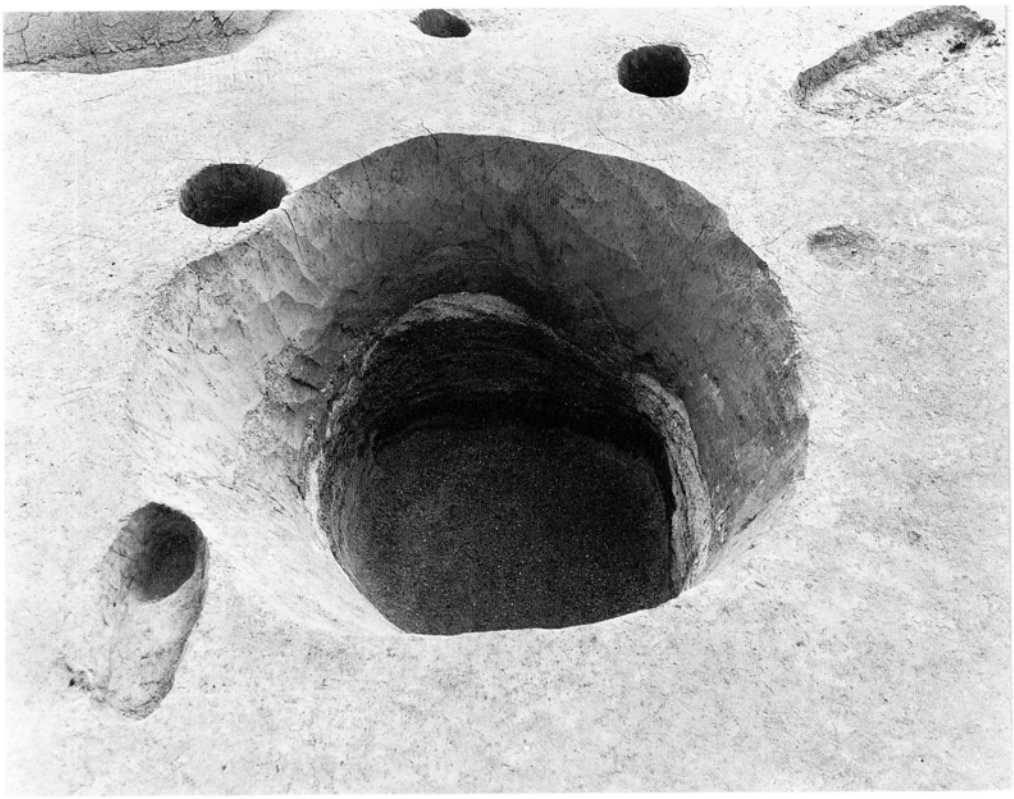


1. SE 02（西から）

2. SE 02井戸枠内堆積状況（西から）

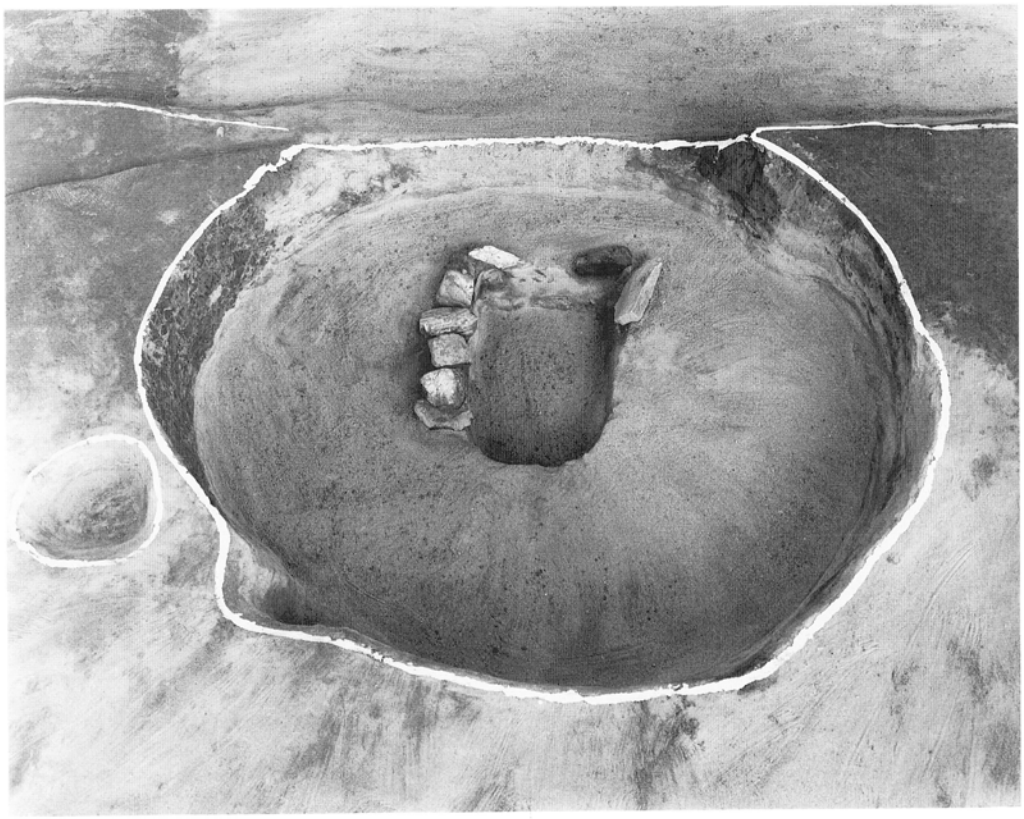


1. SE 02井戸枠内竹筒出土状況（西から）

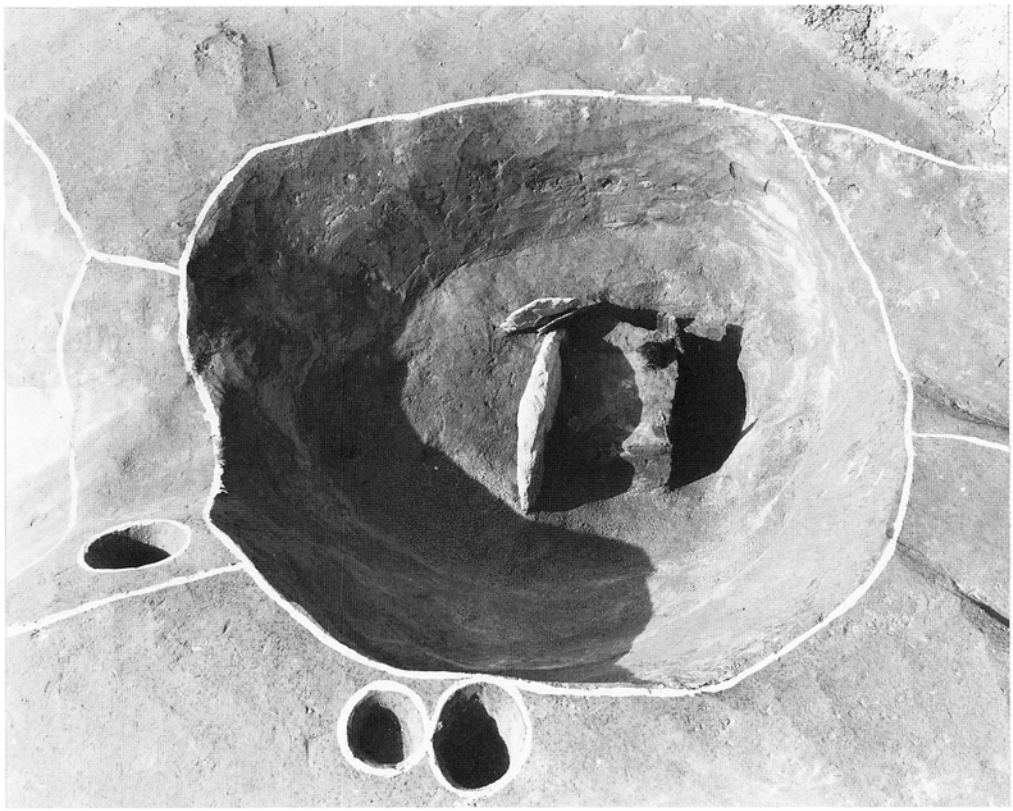


2. SE 02掘形（西から）

1. SE 03（東から）

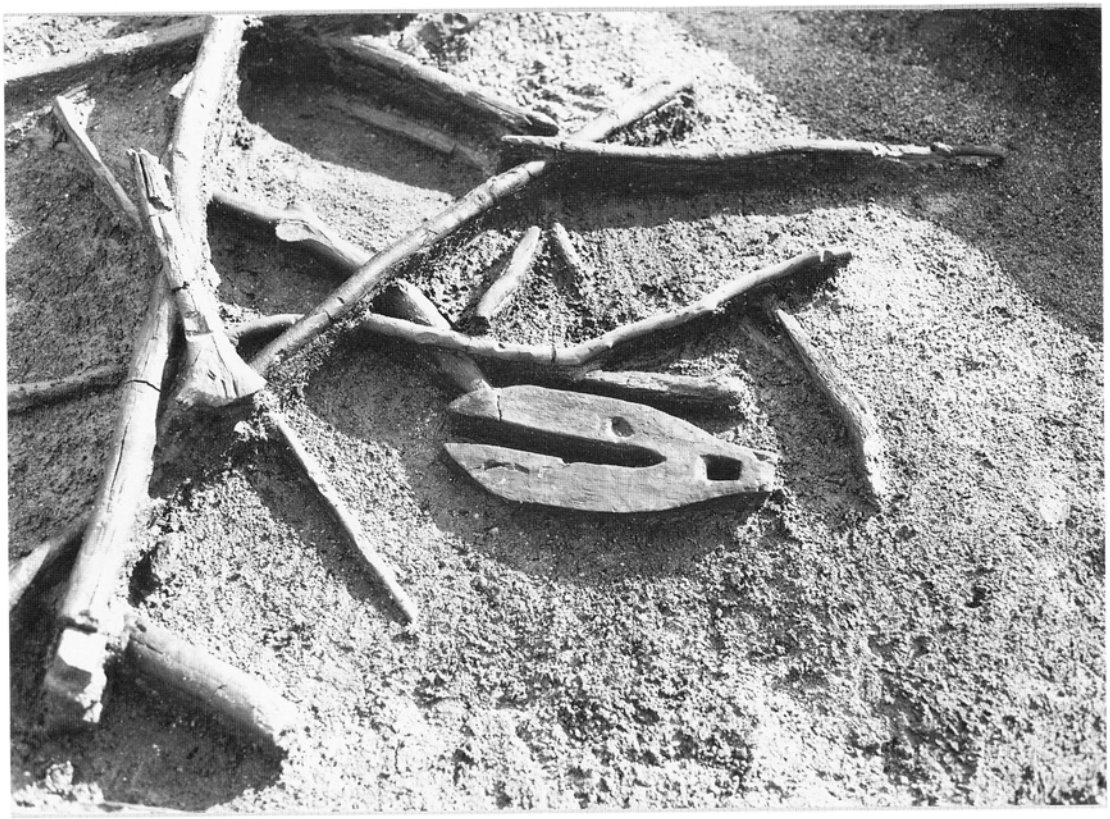


2. SE 04（南から）



1. SE 05（東から）

2. SE 06（東から）

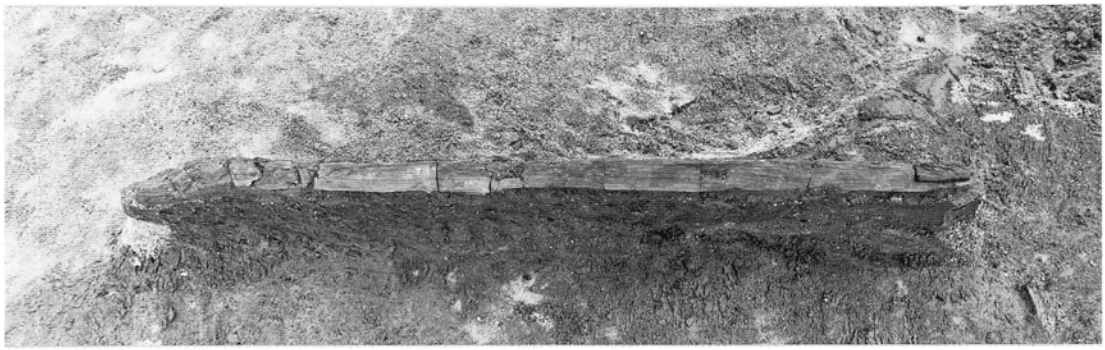


1. SD 28鍬出土状況（北から）

2. SD 28槽出土状況（東から）

1. SD 28梯子出土状況（西から）

2. SD 28梯子出土状況（北から）



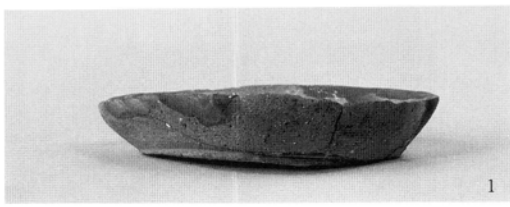
1. SD 28建築部材出土状況

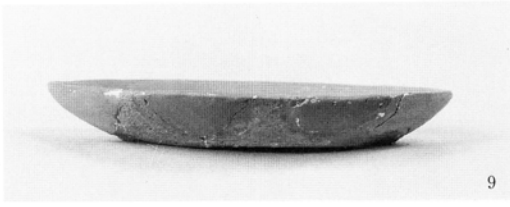
2. 枘孔部拡大

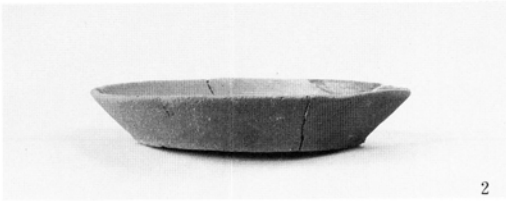
3. SD 28漆塗槽出土状況

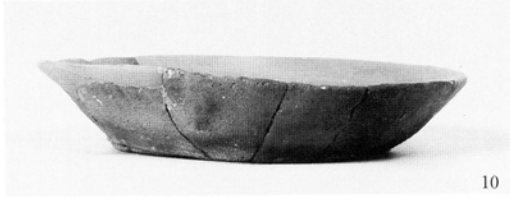
1. SD 30木製農耕具出土状況

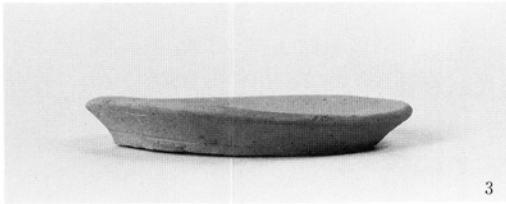
2. SD 30木材出土状況（東から）


1

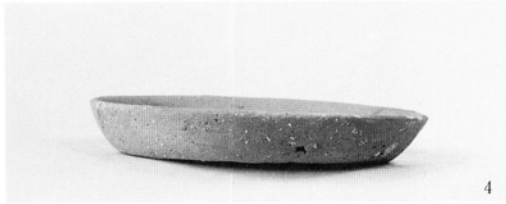

9


2


10


3

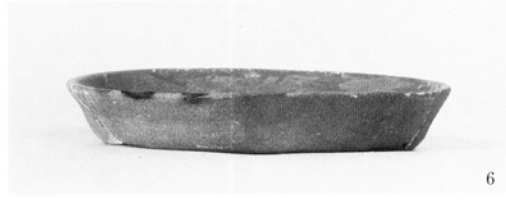
11


4

12

5

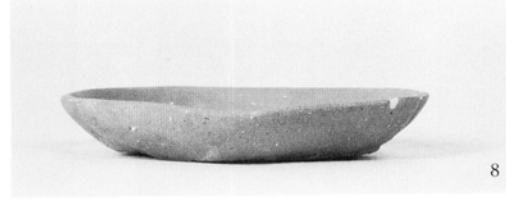
13

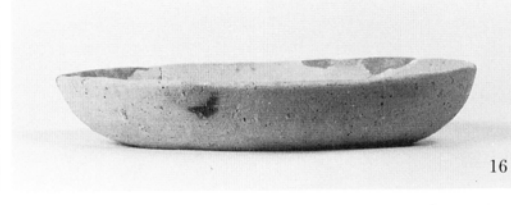

6

14

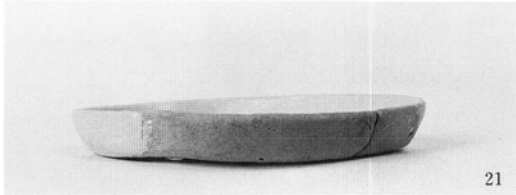
7

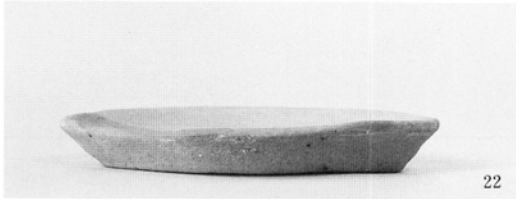
15

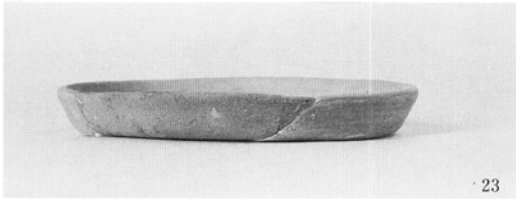

8

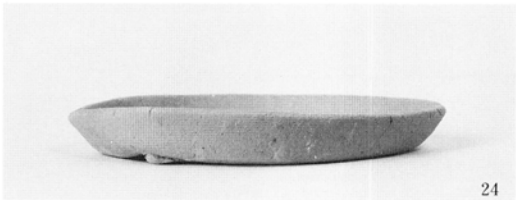

16

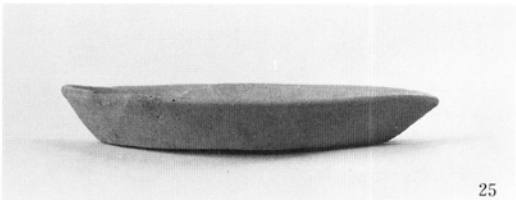
SD 01出土土器

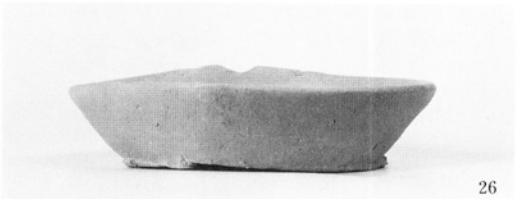

21

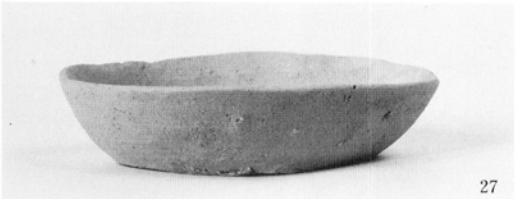

22


23


24


25


26


27

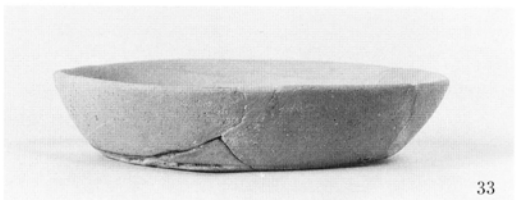
28

29

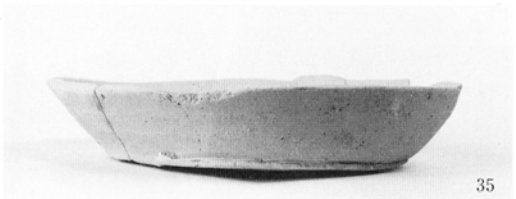
30

31

32

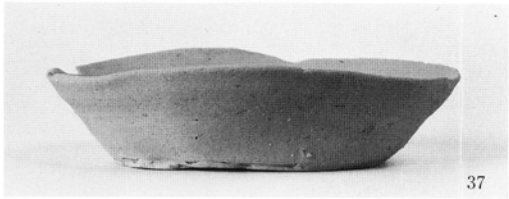

33

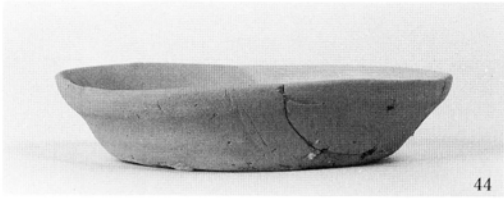
34

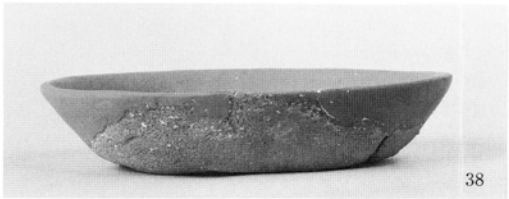

35

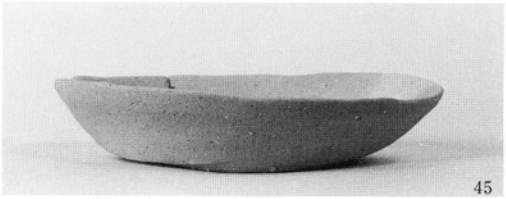
36

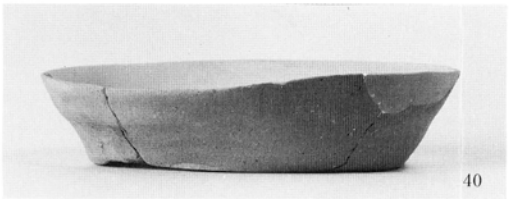
SD 03出土土器

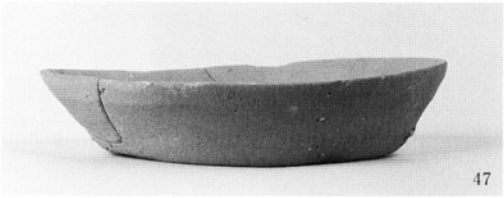

37

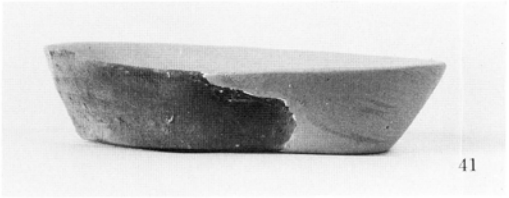

44

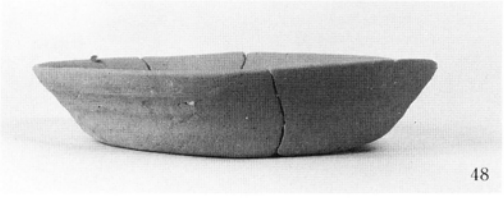

38

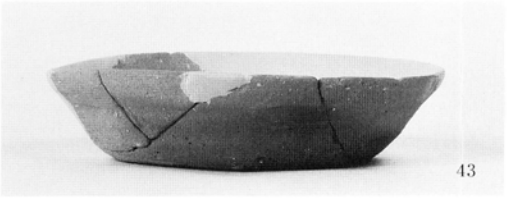

45

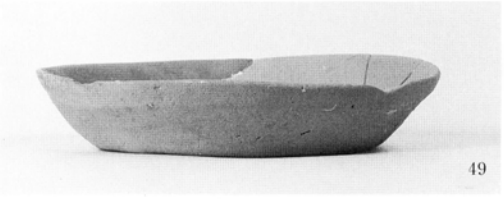

40


47


41


48


43


49

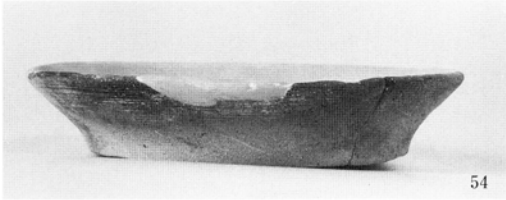
51

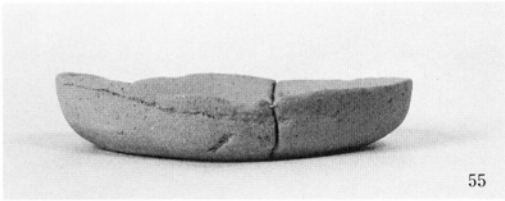
51

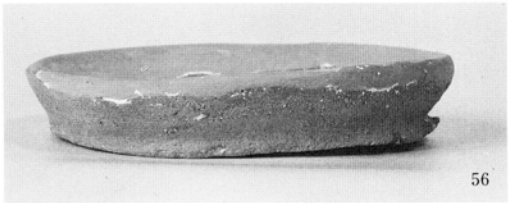
SD03出土土器

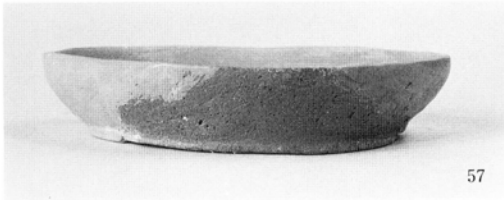
52

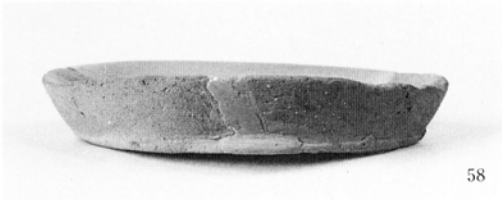
53


54


55

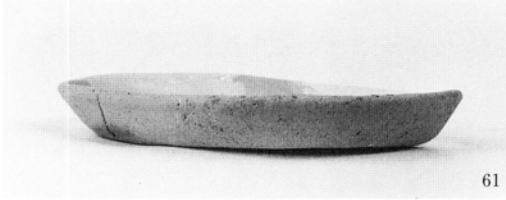

56

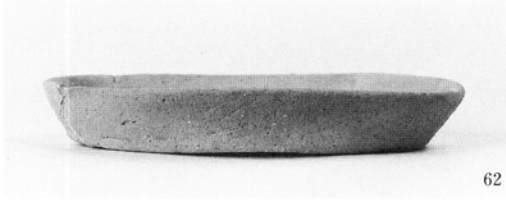

57


58

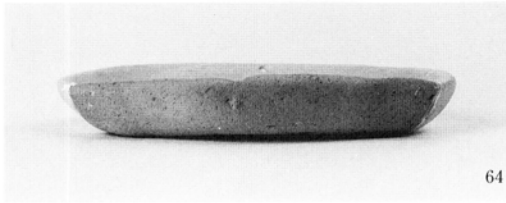
59

60

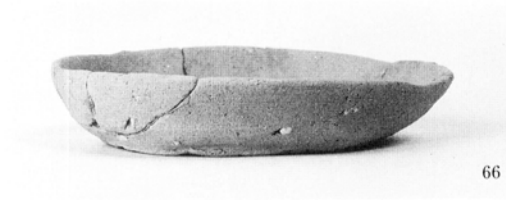

61


62

63

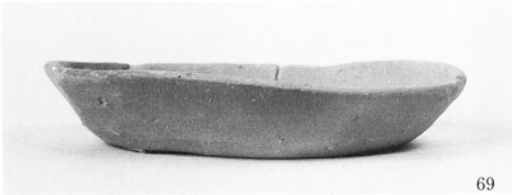

64

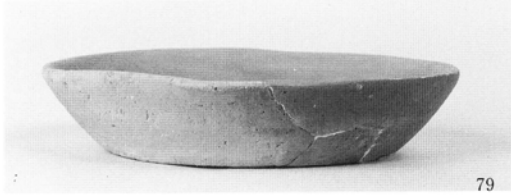
65


66

67

SD 04出土土器

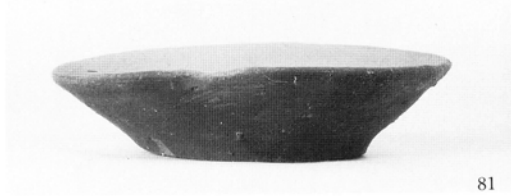

69


79

70

80

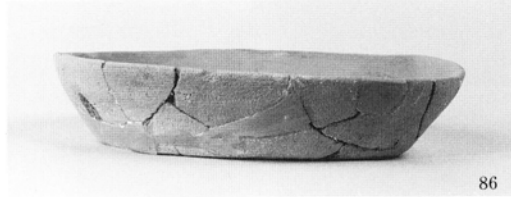
72


81

73

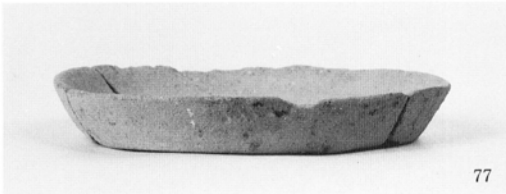
84

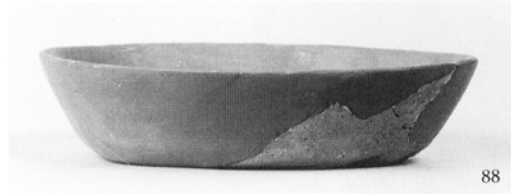
75

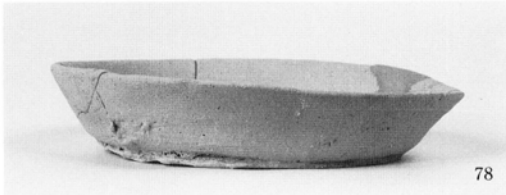

86

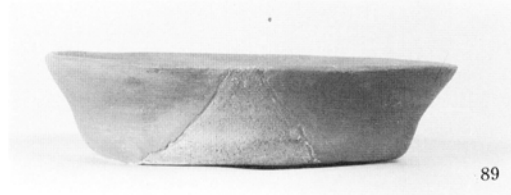
76

87


77

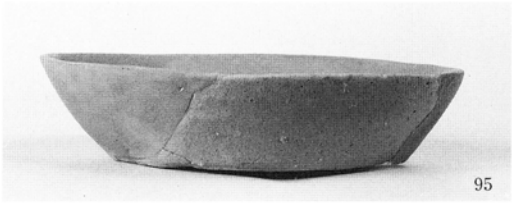

88

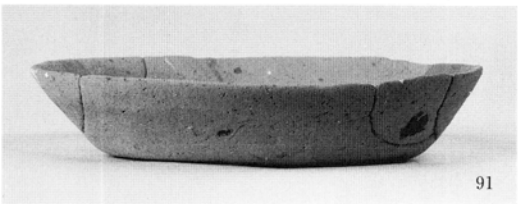

78


89

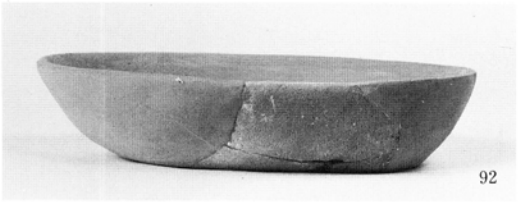
SD04出土土器

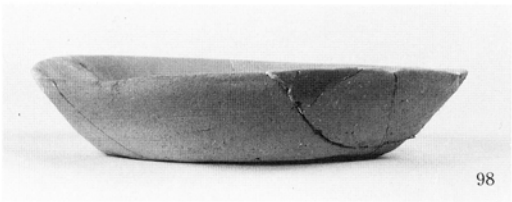
90


95


91

96


92


98

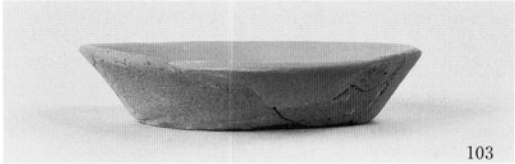
93

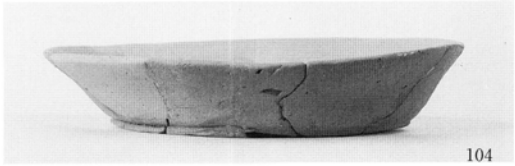
94

101

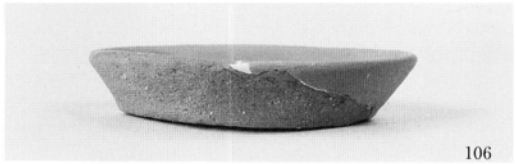
SD04出土土器、土製仏像

102

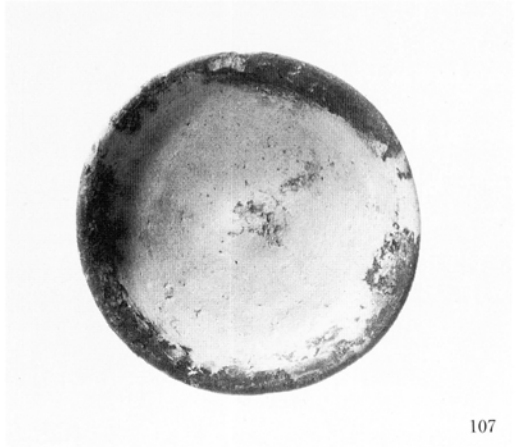

103

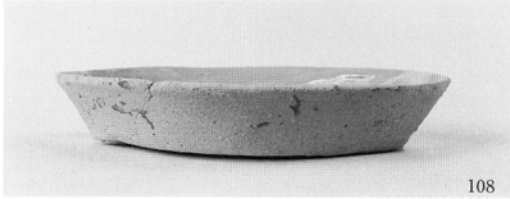

104

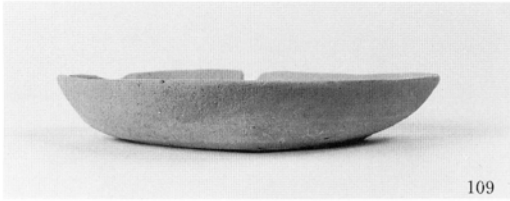
105


106

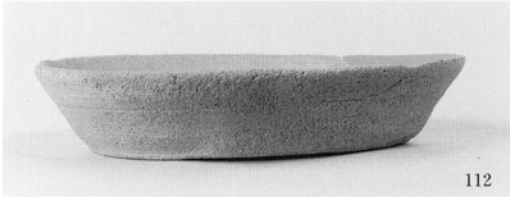
107

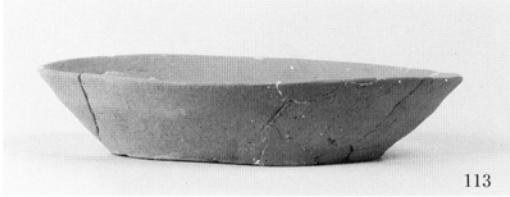

107

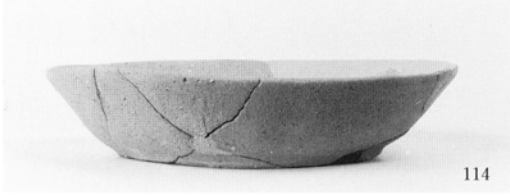

108

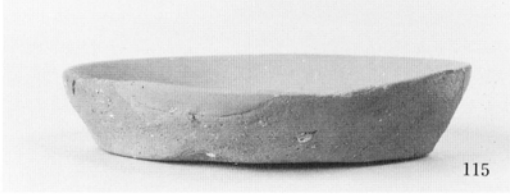

109

110


112


113


114


115

116

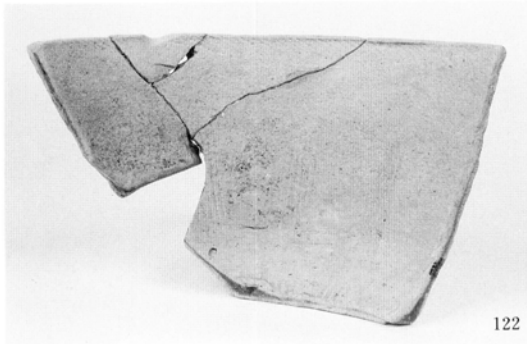
SD 06・08・17・24出土土器

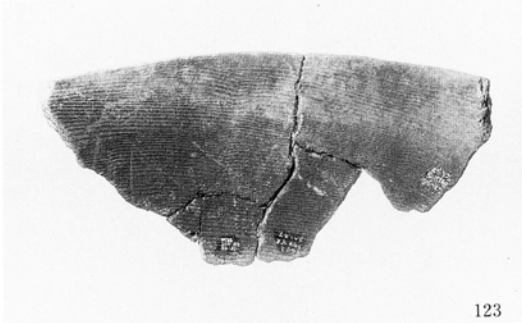
117

118

121

122


122


123

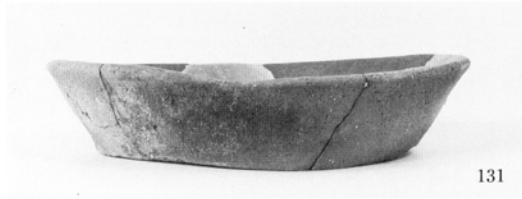
126

127

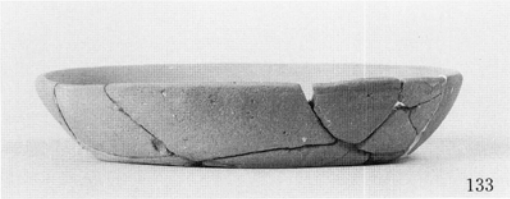
128

129

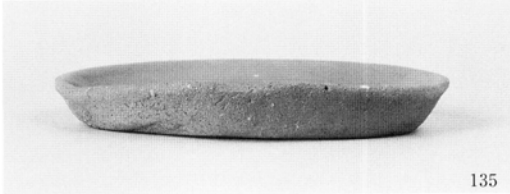
130

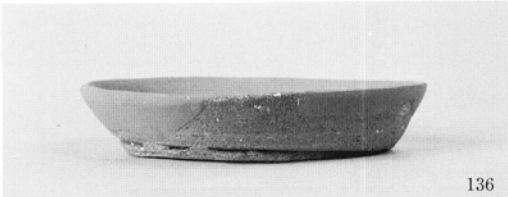

131

SD 28・31，SG 01出土土器

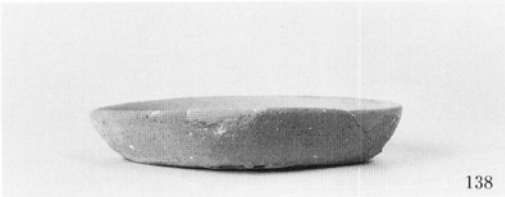

133

134


135


136

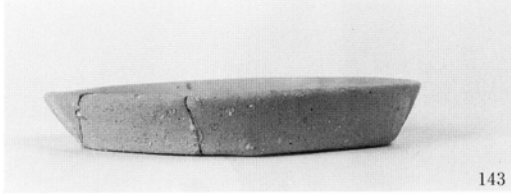
137

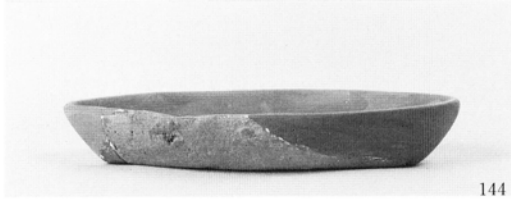

138

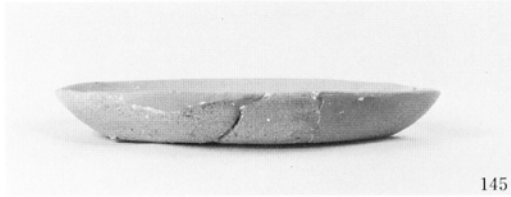
139

140

142


143


144


145

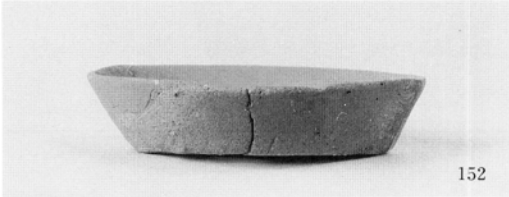
146

147

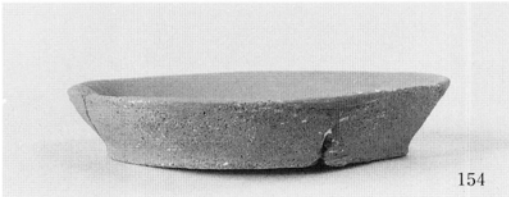
148

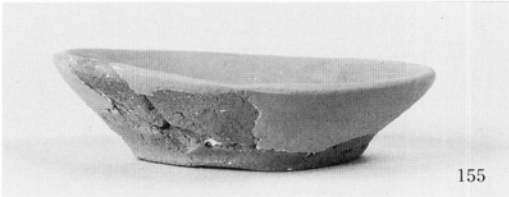
SK 04・10・16・19, SP 11・42・47・101・133出土土器

151


152

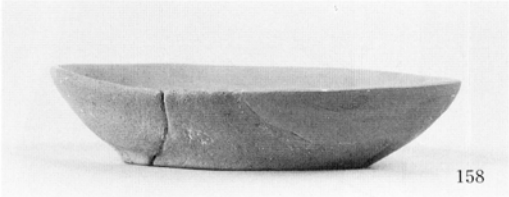
153

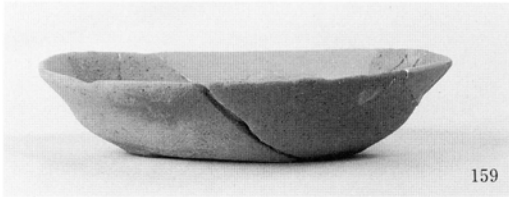

154


155

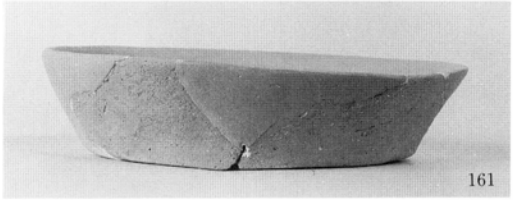
156

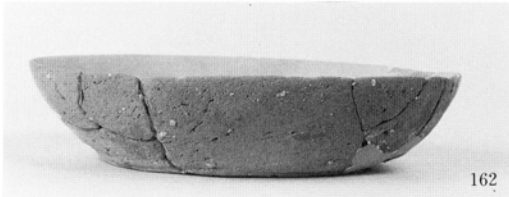
157

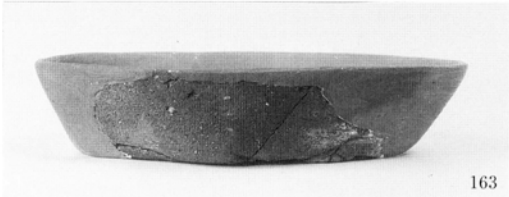

158


159

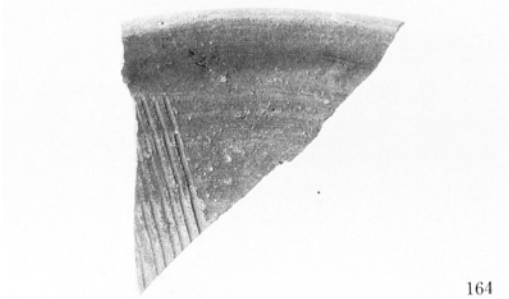
160


161


162


163

165


164

灰褐色砂質土上面出土土器・陶器

167

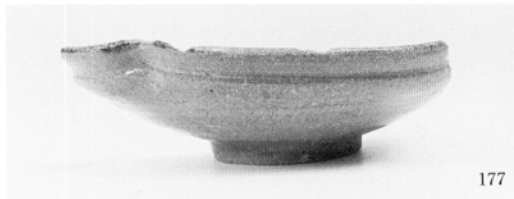
168

173

166

176

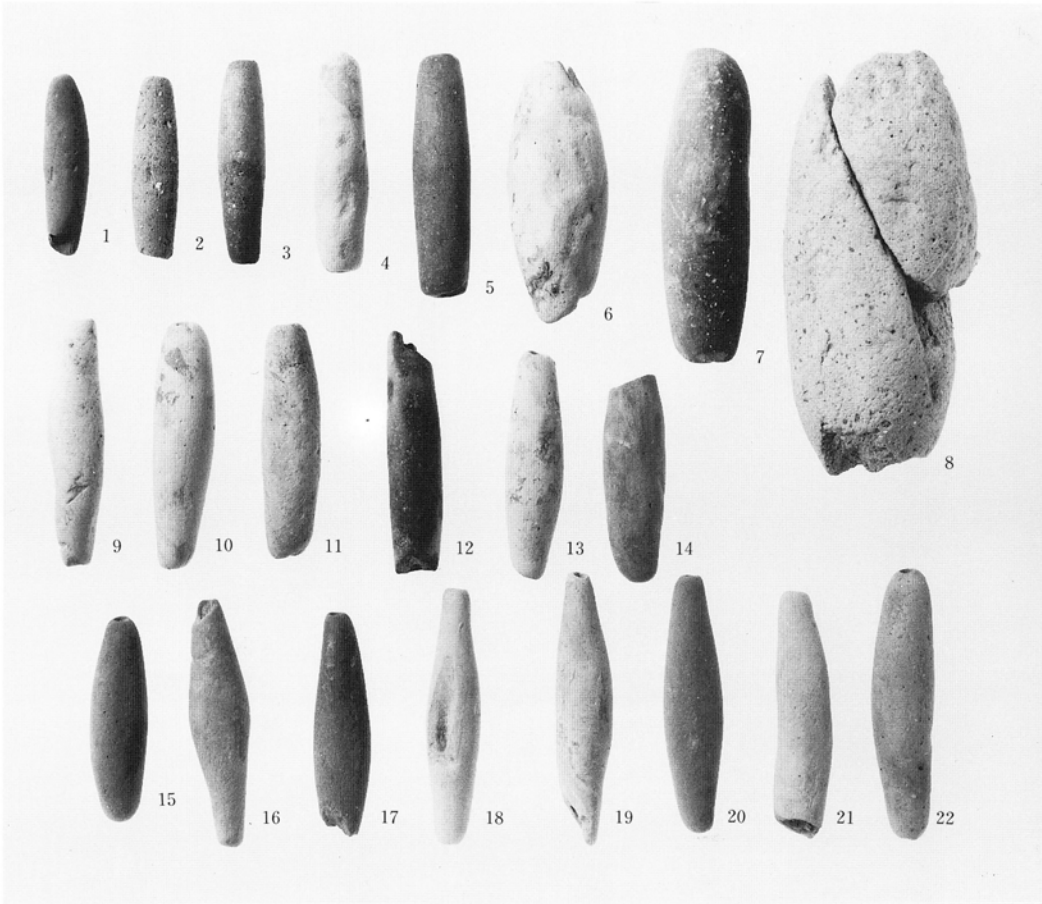
178

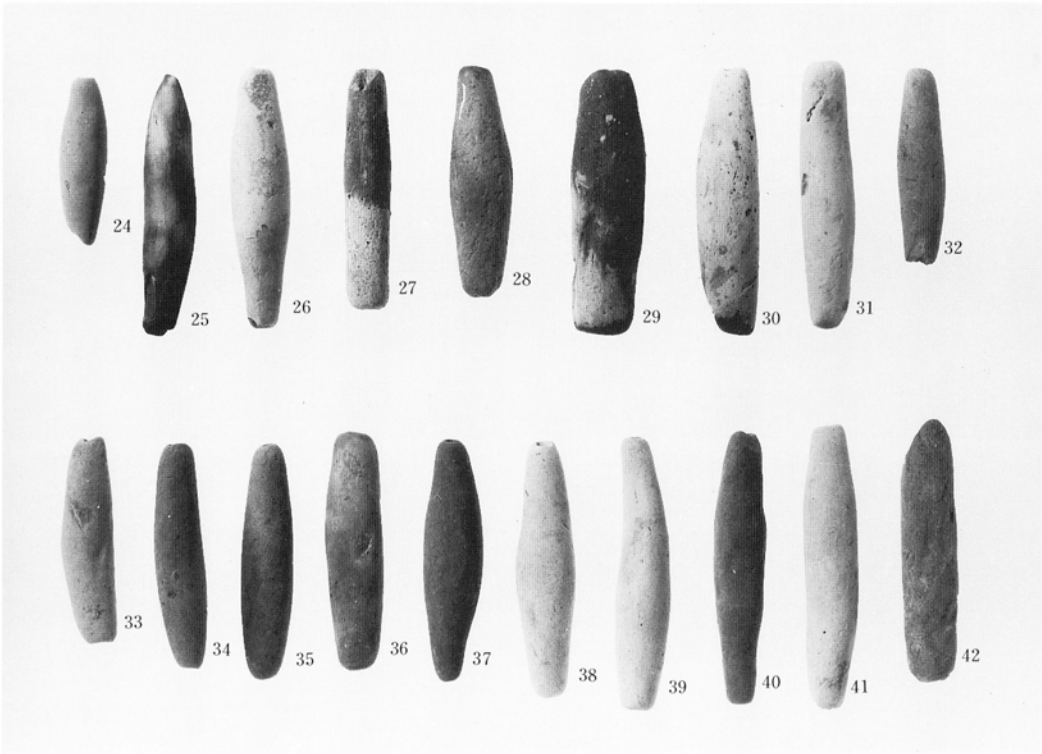


177

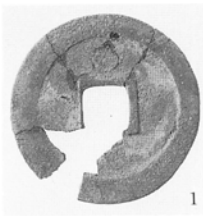
179

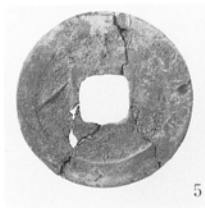
陶磁器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22

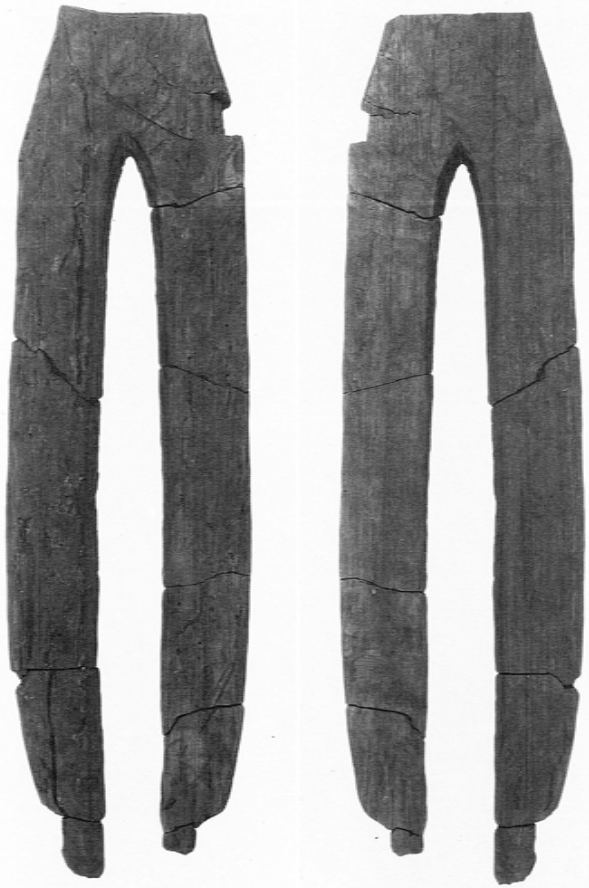

24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42

土錘





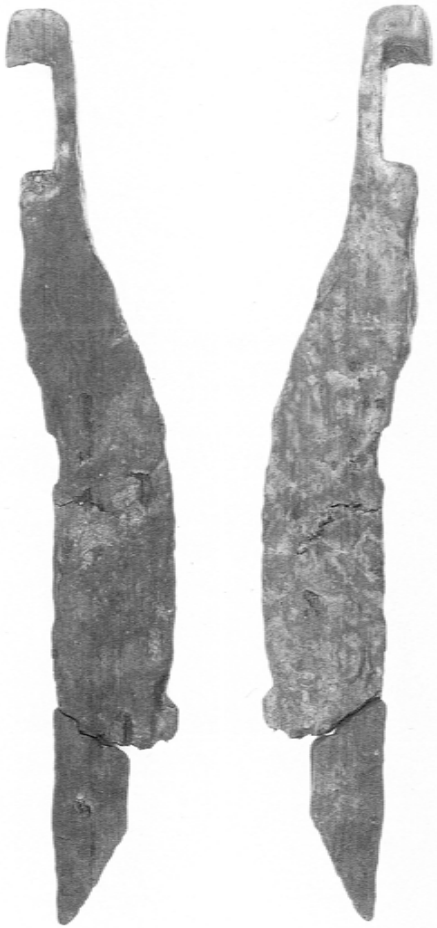
銅銭・耳環・飾金具・石錘



4

3

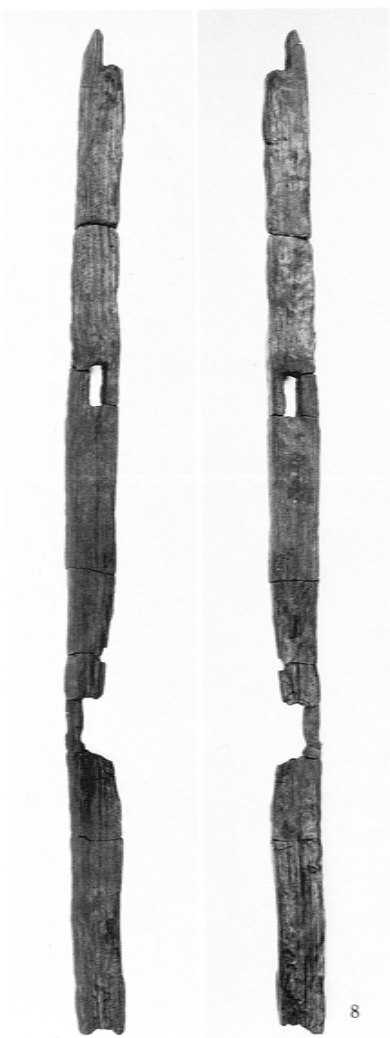
SD 28出土木製鍬



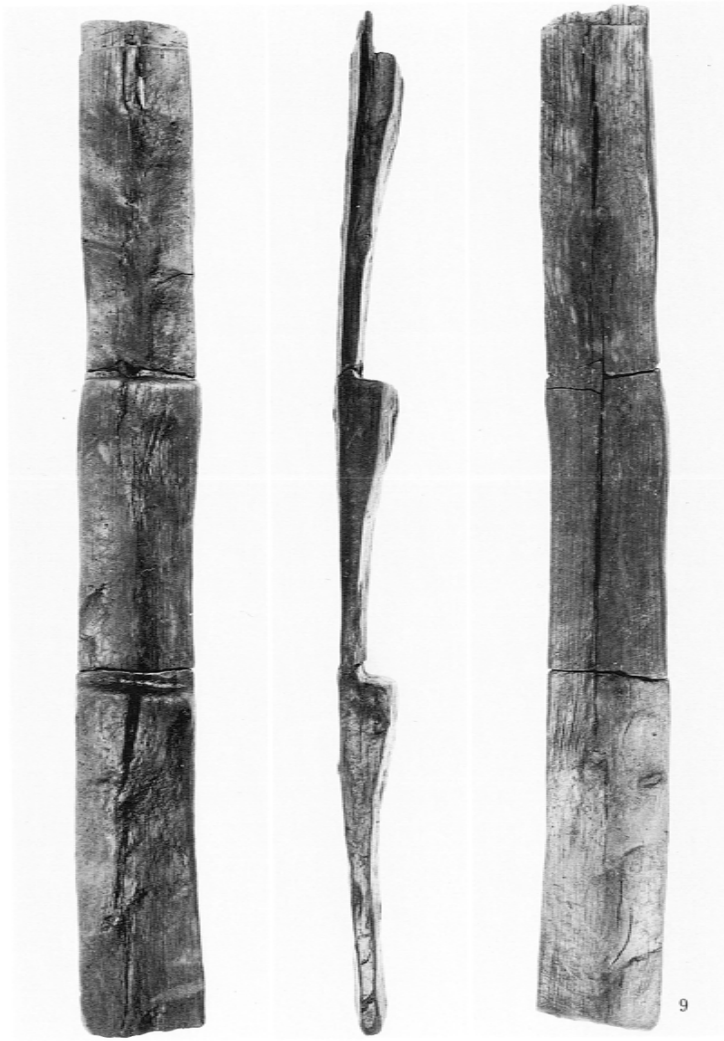
5

6

SD 28出土槽（右）・木製鍬（左）



8

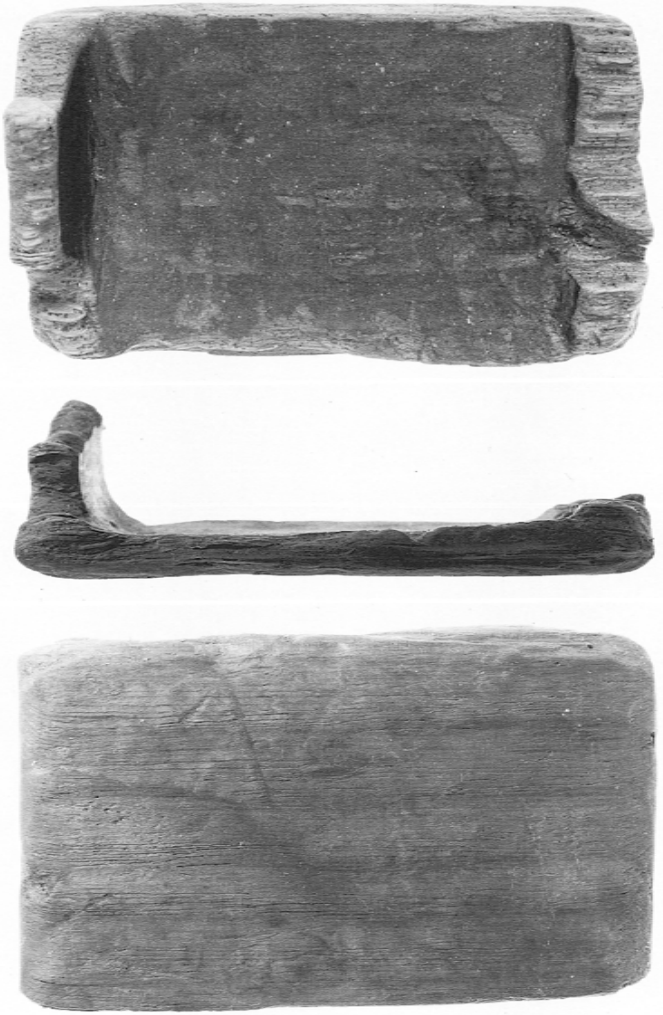


9

10

SD 28出土建築部材・木器

20



7

SD 28出土木器（右）・SD 30出土木製鍬（左）

18

19

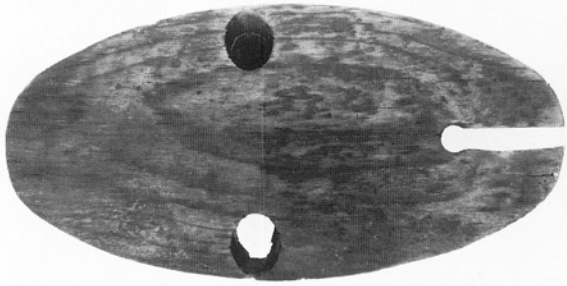
SD 30出土木製鍬

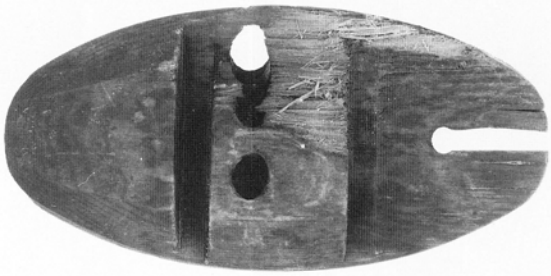
13

14

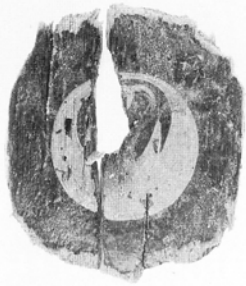
SD 30出土木製鋤

SD 30出土木製鋤





23



22

2

1

21

SG 01出土下駄（左上）・SE 05出土漆椀（右上）
SD 01出土木製編錘（左下）・SE 31出土木製品（右下）

福 岡 市

下山門乙女田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第170集

1987年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2－10－29
福岡ようきビル内

印刷　秀巧社印刷株式会社
福岡市南区向野2－13－29